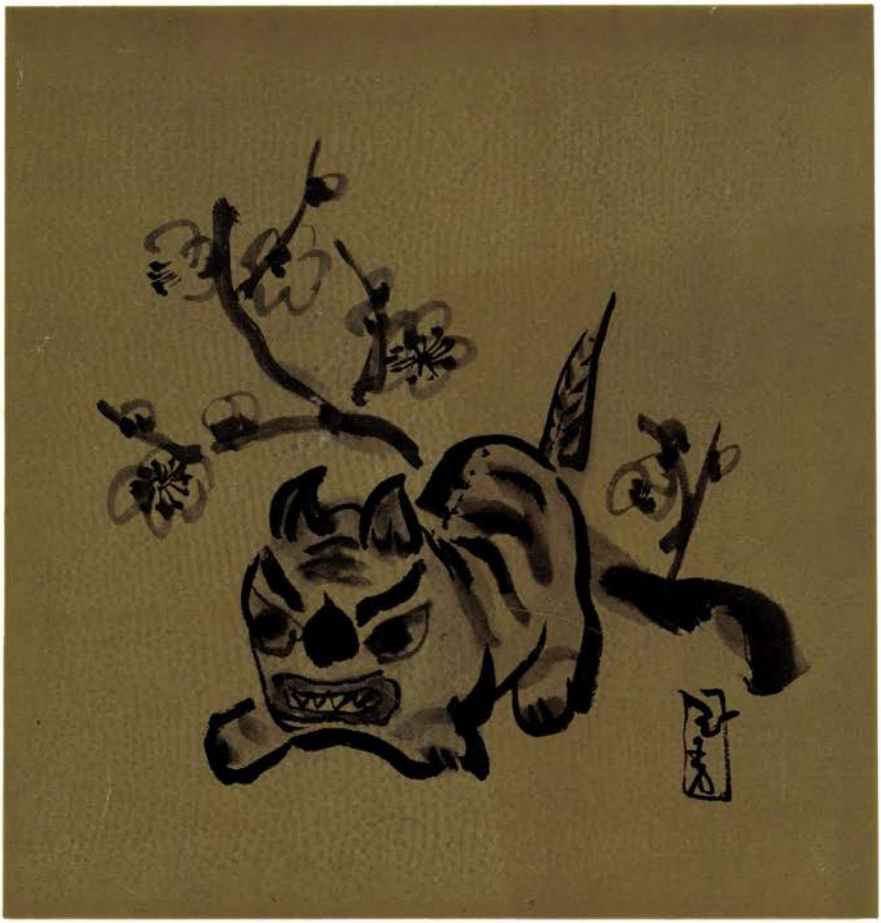
川柳塔

昭和六十年十二月二十五日　印刷
昭和六十一年一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻七〇四号



日川協加盟

同人特集・私の一句

No. 704

一月号

1986年

新春おめでとう会

日時　昭和61年1月15日（祝）午後一時開会

会場　大成閣
大阪市南区大宝寺町中之町二六
〔心斎橋大丸とそごうの間を東へ約百m〕
電話（06）271・5230

挨拶　西尾栞

お話　東野大八

兼題　「虎（寅）」　宮口笛生選
「窓」　橘高薫風選

懇親宴

会費　六千円

◆同人・誌友の皆さんのご参加をお待ちしています。

川柳塔社

NEW FORMAL COLLECTION

泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた。
男のロマンと
フォーマルと。

OSK JEFF ORIGINAL DESIGN

株式会社 大一エスケー
〒540　大阪市東区南新町1－13
☎ 06(941)8015

年　齢

西尾　栞

謹んで新春をおよろこび申上げます。好むと好まざるにかかわらず、また馬齢一歳を重ねました。

年齢には、暦年齢と精神年齢と機能年齢とがございます。暦年齢は、ほっといても一歳ずつとってゆきますが、精神年齢は、その人その人の考えで二十歳も三十歳も若く思うている人のあるのは洵に自惚れも笑止の至りであります。機能年齢は個人差がありまして、若くても早く老いぼれてしまう人があるかと思うと、老齢になってもまだ現役で、かくしゃくと活動している人もあります。然しテレビのコマーシャルじゃないが「おいら三十代、やる気はあるが、身体がついてこぬ」というのがあります。全くその通りで、大体機能の方は、暦年齢と一致するもので、冗談にも横着してはなりません。私は暦年齢を軽視していたことを今度はじめて知りました。或る見舞客が地下鉄の階段の上り下りには「としじゃ、としじゃ」の口ずさんで、手摺りをもつことにしているという話をして帰られました。骨身にこたえる言葉でありました。

年賀状に、謹賀新年の次に、空念仏のように、旧年中は大層お世話になりました、本年も相変らずよろしくお願い申上げます、という通りいっぺんの言葉がよく書かれていますが、右の言葉は今年の私にとって、昨年の九月二十九日の記念川柳大会を思い起すとき、決して決して、空念仏でもなく、通り一ぺんでもない心からの、一方ならぬお世話になったことを、身に沁みて感じた言葉でございます。茲に篤く御礼申上げる次第でございます。

これから小寒、大寒と寒気がやってまいります。同人、詩友の皆様方のご健勝を心からお祈りして新年のご挨拶と致します。

座右の句

人恋し人煩わし波の音　（栞）

私の句

昨日の陽けさの陽あした遇える陽よ　中原汲香

川柳塔　一月号　目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

年齢……西尾栞…(1)
トラ談義……黒川紫香…(2)
川柳塔（同人吟）……西尾栞選…(4)
自選集……(31)
■川柳太平記(92)　川柳の群像　石原青竜刀……東野大八…(36)
■連載　誹風柳多留廿六篇研究（二十三丁）……(38)
江戸川柳に現われた八百屋お七(六)……阿達義雄…(40)
同人特集　私の一句……(42)
水煙抄……黒川紫香選…(54)
愛染帖……橘高薫風選…(72)

トラ談義

黒川紫香

昨年はプロ野球で阪神が日本一になりトラフィーバーを起した事は先刻ご承知の通りである。私の家にもトラキチが二人居て阪神が勝つたびに〝六甲嵐〟が夜遅く迄吹き荒れた。

それに対抗した訳でもないがお隣りの阪急電車は経営する宝塚ファミリーランドに白い虎、ホワイトタイガーをお目見得させて同動物園の目玉商品として宣伝している。トラが三つ重なると過去に悲しくも忌わしい歴史を持つが、先ずは二つで寅歳を迎え、ますます盛んになろうとしているのはお目出度い限りである。

トラ歳といえば東野大八先生もその一人である事を川柳雑誌四一六号（昭和三七年一月号）で知った。同誌に寄せられた〝トラ歳など不用のこと〟なる一文は躍如として先生の姿が浮ぶ。先生の御両親も寅歳、姉さんが午奥さまが未という事でハタと私の身辺も同じである事に気付いた。私の父が寅で母と姉が午、そして私が未、不思議な取り合せである。

先生が少年の頃、干してある酒樽に雨水が溜りドブ酒になった中へ落ちて大トラになられた話が面白く書かれている。私の小いさい頃、悪童に縄で縛られ誤ってドブ川に落ちた

秀句鑑賞 同人吟……水粉千翁……(35)
水煙抄……渡辺独歩……(71)
奇遇……紀市郁栄……(75)
川柳と註について……松村総七郎……(76)
初歩教室……阿萬萬的……(88)
「我慢」……平田実男選……(90)
一路集「湯」……芳地狸村選……(90)
「祝」……松本はるみ選……(91)
柳界展望……(92)
本社十二月句会……(94)
各地柳壇（佳句地10選／神夏磯道子）……(109)
■12月各地句会案内 123 ■編集後記 125

座右の句

ひとりいれば蜘蛛の子にさえ気がうごく　（路郎）

私の句

追憶の絵ばかりさがす冬画廊　広本文子

時ついた傷が未だに眉間に残っている。大トラになった先生と、ドブ鼠になった私とでは矢張り格が違うのかも知れない。

寅歳の父は普段おとなしい性格だが、酒を飲むと一変して機嫌が悪くなる時が多かった。いつかこの欄にも書いた様に父が福井座という芝居小屋を仕切っていた頃、まだ端役だった中村珊五郎（後の曽我廼家五郎）に何か気に食わぬ事があって酒気を帯びた体で追い廻した揚句の果て、舞台から奈落の底へ落ちた話を母から聞いた事がある。一方は身軽に脱兎の如く逃げたが、酔虎になった父は大怪我をした。その福井座も本当の経営者は母の親代わりだった人で父は虎の威をかる狐だったのかも知れない。

虎の絵が好きでいつも床の間の軸に虎の絵を掛けて楽しんでいた。その一軸も父が亡くなってからどうしてしまったか今は家に残っていない。

同じ年の川柳雑誌二月号へ新年句会に出た兼題〝虎〟が発表されていて西尾栞さんの句に、

駅前の宿にもあった虎の軸

というのがある。よく旅をして泊った宿で見かける風景だが、昔は威儀を保つものとして虎の軸が喜ばれた。

ともあれトラ年を迎え、心を新たにして泰然自若に辺りを睥睨したいものである。

西尾栞選

岡山市　川端柳子

某月某日きっとよい芽が出るように
それからが杞憂ですめばおめでたい
編針とお話出来てコタツ好き
道草の亀で兎の訃報聞く
目が覚めて隣の鼾聞く安堵
スペアーのきかぬ母子の血の怖さ

松原市　谷垣史好

昼寝から覚めたら地球回ってた
罪の一つに齢よりずっと若く見え
超音波で探ってみたらエゴの虫
可愛さは軽いジョークにむきになり
年上の恋は小皿にとってやり
ノホホンと暮して苺ジャムが好き

八尾市　高杉鬼遊

家族合わせのカードが揃う春の宴
山ほどの賀状に恋の一二枚
恋をして悪いか妻よなぜ騒ぐ
すこしねこ背の記念写真を女から
身に覚えないが噂の矢が刺さる
ドライフラワー心に冬の雨がふる

豊中市　安藤寿美子

掛軸の虎こわかった奥の部屋
きいたとかきかなんだとか冬の雷
かなしみよせめてミルクをあたためて
自分史を書いて家族を困らせる
夕焼雲私に帰る家がある
野菜サラダ青虫の顔まねてみる

岡山県　土居耕花

アメリカの方を拝んで元旦か
老妻と同性愛に成りました
自動ドアみたいな女探そうか

警察も百面相もお元日
シーソーの様に風邪引く老夫婦
貧しさを紛らす様に又生まれ

西宮市　林　はつ絵

目のうろこ一枚剝いでいた月日
肩寄せて見上げる塔は美しい
掌に合った小さな石をしかと積む
終章をかざる驕りのない月日
椰子の実の流れて島にまだ着かず
堂々と着ぶくれている佗しさよ

桜井市　岩本　雀踊子

深酒はよそう私も七十六
細うなった腕に扶養家族の妻がいる
泣き言を言うと男の値が下る
踏切の向うも寒い顔で待ち
罪深い女と思う鏡掛
心豊かに茶漬けを食べていて無職

兵庫県　遠山　可住

母が来て下宿が日光浴をする
街へ行くトマトはあした赤くなる
やがて二人そして一人の旅に出る
さんま焼くけむりにむせている遺影
楢山が見えて心を入れ替える
回転椅子のうしろの根廻し役でいる

伊丹市　樫谷　寿馬

急ぐでもない旅へ時計を進ませる
月蝕は知らず下界を救急車
病む人の布団の紅よ秋の陽よ
コスモスの乱れと女一人住む
舗装路に没ってイノシシ村とあり
いづもやの話題に一致する仲間

大田市　藤田　軒太楼

名ばかりの家長で隅においやられ
家計簿は無理を承知の七五三
どう来るか条件次第と強気なり
世を拗ねた眼鏡は悪にくもりがち
嘱託という名の席にあまんじる
核心にふれて会談改まり

岡山県　嘉数　兆代賀

聞き流すことも覚えた土踏まず
金儲けの話へ鬼も来て坐る
いいことがありそう花を活け変える
癌でないと言われてどっと腹が減り
フンフンとうなずく老母で欺されぬ
心配と背中合せにいる希望

倉敷市　小野　克枝

貰う身になって小さい方を買う
ＮＨＫばかり見ている短気者
出嫌いと惜しい一日閉じこもり
長い夜を迷い続ける花時計
どん底で出逢った神は裏切らぬ
野良太の大きな耳も冬に入る

大阪市　西森花村

マンドリン阿呆な涙が似合う顔
コオロギは寝溜めするよに死んでいた
焼芋もよし秋晴れも嬉しくて
コスモスのうつつならずも咲く線路
取りあえず賽銭箱を新調し
年の暮れトランキライザー宝くじ

米子市　林瑞枝

赤く熟れたほうずき和尚さんが好き
何となく夕陽と契る歩道橋
ユニークな案山子が風にパピプペポ
降る星のひとつを宝石箱におく
足長おじさんは幻にしておこう
先生の素顔を写す木洩れ陽よ

和歌山市　西山幸

紅絹裏にひそむ昔が重すぎる
返り花急にいのちが惜しくなる
湯どうふの白さ素直さには勝てぬ
干涸びたこころも冬のせいにする
さよならの日からシーソー動かない
妥協しましょう干大根よ干柿よ

堺市　河内天笑

どっちでもええのも二次会ついてくる
誰とでも握手がしたい程に酔い
ええことにして他人の皿つつくなり
お誘いがかかっておでん食べ残し
ママさんを酔わせてみたい男たち
雑踏にまぎれて妻と手をつなぎ

大阪市　西出楓楽

ワープロに温い言葉が見つからぬ
二枚目半半のあたりにある救い
まさかともやっぱりともいうヤジロベー
ルビふっておくのは甘い言葉だけ
減塩に減糖ひっそり生きて行く
かえる座りしてときめきを遠くする

羽曳野市　塩満敏

悪友の特権深夜に上りこみ
三ヶ日江戸小咄をよみふける
津和野でも値引交渉浪速っ子
出雲路を泉ナンバーぶっとばし
松江の朝は本場のしじみ汁
淡水化反対松江七珍出雲蕎麦

京都市　松川杜的

ご破算で家計簿引き算ばかりなり
単三も必需品となった旅カバン
去年の今日の日誌ときどき読んでみる
秋深し奥歯が一つ又抜ける
門前町の此処おそばのうまい店
シャッターを切ってあげてからのお付き合い

竹原市　小島蘭幸

森を抜け林を抜けて父の忌に
父の忌にいもうとの子が膝へ来る

いのちふたつあれば悪人にもなろう
やがて不惑の顔が鏡の中にある
昭和二桁いつまで若い気でいるの
かすり傷子のやわらかき肉体よ

米子市　林　荒介

網膜のあちらこちらにある桜
空っぽのボトルに風を詰めている
たちこめた紫煙の中の音符だな
わがままを言っては石を困らせる
外敵のことにはふれぬ花の萼
見送りの君のその手が胃に刺さる

倉敷市　野田素身郎

阪神優勝僕は一人で祝いたい
検査結果明日はわかる夜が長い
取り止めのない話のようで隙がない
立冬へ今年も後遺症が出る
半世紀前は僕も少年野球の名投手
柿の木から落ちたことあり柿が好き

八尾市　宮西弥生

明日の風どんな彩にする絵筆
単身赴任に単身女がここにいる
山手のくらしで金を減らさない躾
水満ちて六甲の水忘れられ
倖せは秋の熟れどき女どき
忘れたきことも得がたき日のドラマ

大阪市　津守柳伸

双肌を脱ぐ金さんはフェミニスト
午前二時ナイトコールが来た眠り
ニューモード自信の貌にすげ替える
干からびたVサインして空の旅
甲板の星がロマンを追いかける
カマトトでよし懸命に歩を運ぶ

松江市　恒松叮紅

過保護からまだ抜け出せぬ糸電話
秋深くなると気ままな周遊券
文学が好きで明るい車椅子
星の降る夜は民話を子におくる
男の優しさだけを求めている世代
断崖で松もライバル意識もつ

京都市　都倉求芽

営々と善人平凡を積み重ね
秋空やクレーンの背のび見ていたり
保護色の場所間違えていた油断
遠州の庭も気候異変には勝てず
楢山へ行くのもやっぱり上り坂
大晦日去年のことまで思い出し

堺市　河内月子

せっかちもゆっくり座る春の膳
中年の顔を鏡にはげまされ
子が四人少々太い神経で
孝行のつもり夫婦で書く手紙
子をみんな出して夫婦の朝にする

何事もなかった様に起きてくる　和歌山市　福本英子

年変り丸くなった向い風
古稀の兄にまだ母がいる故里の新春
どの傷も思い出があり年の暮れ
三次元の映画館出てぜんざい屋
ひたすらに歩いて川に突当る
コンバインへ譲らぬ老父が鎌を研ぐ　大阪府　坂口公子

旅に出てこんなコバルト色の空
朝市へ早起きしようと旅の宿
桜貝私も燃えた青春譜
在りし日の母に似て来てはっとする
隣人とひょんなところで鉢合わせ
女丈夫に見えるそうです老眼鏡　岸和田市　古野ひで

あの頃はよかった育ち盛りいて
人恋し心の壁に沁みる雨
淋しさに負けた涙は拭わない
北風に押されて許り寡婦の日々
言葉にはならぬ言葉で悔みのべ
往生の見事うらやむ通夜の客　寝屋川市　稲葉冬葉

コーヒーとあなた私がそこにない
冬仕度大げさにしてひとり部屋
ストレスを流す湯舟が静かすぎ

才女振ることはないのよ秋桜
ポスターの女優に似合う帽子買う
スープ皿今宵は二枚置いて見る　岸和田市　原さよ子

一言を喜ぶ父も老いてくる
正直に話して誤解といておく
誰とでも話して息子に嫌われる
箸置けば薬の粒を読んでいる
正体を知って友情遠くなる
退職の額を銀行見抜いてた　米子市　桑原伊都

ささ舟よこの風ならば信じよう
鏡台のひき出しに棲む私小説
太陽の沈むあたりが楢山か
角切った鹿善人の顔となる
昼の月心残りがありそうな
冬の海父の砕氷船が進む　松原市　佐藤藤子

平穏な日々不安になることも
照る日くもる日御自愛と書いてある
幸せな話ばかりでない絵本
疑えば忽ち崩れてゆく絆
二人居て後ろ姿を見せている
寒牡丹情ぎらいになっている　豊中市　田中正坊

初孫誕生（三句）

秋晴や日本男児生まれたり
じいちゃんと呼ぶよと娘のご託宣
亡妻の血が流れる赤子ひしと抱く
人の輪がまた広がった宿浴衣
高い方選ってる男の市場篭
秘仏より僕にやさしい野の仏

富田林市　田形美緒

よろこびを聞く白菊の誇らしく
湯気あてて傷口癒す古毛糸
湯けむりにお国訛りが暖かい
死後もまだ捧げ銃する兵の墓
人間が好きで嫌いで今日を生き
妥協せぬ残り少ない日の為に

尼崎市　西村かすみ

元日の夫婦言葉をさがし合う
三ヶ日だけ白足袋に履きかえる
一坪を飾る余生の種袋
たそがれの孤独に耐えている氷雨
臆病で天使のチャンス無駄にする
足並の中で謀反を考える

島根県　堀江正朗

人生はこれから縋る数珠の艶
酒うましうまし酌がれて子と語る
掌の広さ信じて動く指
みかん剝く指から初春になる炬燵
我がことも出来ぬに人の世話が好き
木守り柿そこまで雪を連れてくる

島根県　堀江芳子

湯加減をきけば都々逸かえしてき
自己主張女きれいなことを吐く
膝枕嬉しがってる耳そうじ
親切に涙やっぱり六十路坂
空抱いて万年青も自己を見つめてる
いつまでも恋人年は口にせず

富田林市　板尾岳人

一月の風に殺され旅に出る
木枯しに白装束を着る鳥
愚痴を言う男に雪はちらちらと
一月の一揆へ妻はいもを焼く
馬車の荷はきっと母から来た甚平
雪化粧かやく御飯が炊けました

松江市　柳楽鶴丸

世界中で一番馬鹿は女房かも
健康です味覚音痴です
本当の事を言ったら叱られた
大人とは何んぞやそれは女です
反核の一票寝たきりも持っている

松江市　小林孤呂二

天皇の在位を励みとしてる老父
命知らずの雑兵でも月を恋しがる
夕食へいちばん生真面目な母の顔
でっかくはないが二百円も当り籤

管理職障子の組子に似て耐える

松江市　舟木与根一

合法でドラフトという市がある
犯罪の手引きもしているテレビ
豆つまむ左ぎっちょについ見とれ
孫もありどこにでもあるメロドラマ
先進国老人着々増えていき

東京都　増田次章

愛国心で税金をおさめてる
度忘れと言ったが覚えのない話
見送った時は不思議に良い話
後輩のファイトに平穏乱される
言われれば働き過ぎかとも思う

平田市　久家代仕男

お地蔵も半眼開き昼の月
ゼット音消えて平和な柿の色
呼ぶ声が素通りする鬱の部屋
体罰が有ったむかしは自律もし
松茸が届き豆腐を買いに出る

島根県　小砂白汀

祝　山根病院新築（一句）

ダイヤよりなお美わしき愛の塔
連凧に雲の秘めごと盗まれる
神棚をさぐると去年の五円玉
手品師の鳩がいきなり恋をする
何もせぬ日にも口髭だけは伸び

倉敷市　稲田豊作

初詣で迎えて神社大焚火
着飾って初春の娘は小笠原
一票が舌三寸に酔うている
従順な嫁が急場にタクト振る
賃銀より仕事が重いやじろべえ

鳥取市　両川洋々

だまされてやる気泥舟こぎつづけ
火に油そそぐ酒とは知らなんだ
バラまいた嘘がペテン師恐くなり
ああ金に法の番人まで狂う
転居あいさつローンの苦しさなど書かぬ

大阪市　河井庸佑

赤信号手を引く子どもに止められる
引き際をあれこれ思う齢になり
さとられず程よく負けるのも仕事
初発出て町まだ寝てる冬の朝
控えめな言葉の奥が読み切れず

東大阪市　森下愛論

お隣に合わしておきます奉賀帳
七十で女難の相とは恐れ入り
ジュースだけ飲みに二次会ついて行き
善人にされて断り切れまへん
正月元旦元旦なりの靴を履く

笠岡市　松本忠三

情無い涙が出ずに愚痴が出る

馴初めへ聞くだけ野暮の袖をひく
普段着のまま訥弁に嘘がない
コーヒーの砂糖自分で入れなさい
足並が揃う表と裏があり

堺市　高橋　千万子

思い出の糸どうしてもつなげない
序列もう待てず斜に進路とる
過去の虹終うて女黒が好き
助かった病に神が住み初め
言い勝って見たが無口の母に負け

島根県　西村　早苗

われ無職飲めば毒舌だけのくせ
真っ暗な邪恋水割り底のぞく
母がいるだから故郷の雲が好き
誘惑に勝ってちょっぴりもつ未練
真っすぐに歩けばねたむ口に逢う

倉吉市　奥谷　弘朗

儲かると見たか勢い込んで来た
引き返す勇気が光る山男
シベリアで洗脳された過去を持ち
思い出を温め合ってる老夫婦
有名無実味な言葉と思いたし

弘前市　波多野　五楽庵

歎異抄父の栞が読み残し
地の塩になれず木の水にもなれず
老眼鏡おやおや妻も借りて読む

聖書にも赦してもらう鍵がない
鉢巻をすれば静かになる鼓動

柳井市　弘津　柳慶

答弁へ本音は少し隠しとき
励まして呉れる妻は墓の中
ムゴイこと指輪で死体確認し
ハイハイと返事の後で舌を出し
遠足へ父が握ったお弁当

富田林市　岩田　美代

ピストルがポツンと孫の忘れ物
昔の音で抜いているラムネ瓶
新春(はる)の市夫婦茶碗を買い換える
耳よりな話はすぐに歩き出す
神様のまちがいだから許されぬ

熊本市　有働　芳仙

生字引一日馬鹿になりたい日
ママの留守長女に手綱握られる
俎は月給前の音になり
プロポーズ酒が呑めぬが気に入らず
握手する間仮面をもちこたえ

七尾市　松高　秀峰

夢を追う今度こんどの宝くじ
栄転は身体を張って摑むもの
共通点あってドラマに泣く女
お正月俎板弾む子等帰る
胃薬を飲んでめでたい席につき

米子市　小西雄々

兄弟もやがて他人の衣着る
体面はどうあれ末期の水を乞う
止り木で味方にしたい訛聞く
猫背には背広の地味な方がよい
長男へ勇気が欲しい喪が明ける

大阪市　江城修史

恵まれぬ足跡踏むな妻よ子よ
親ばかり目立つ晴着の七五三
幾山河越えて安らぐ夫婦坂
年賀状だけでつないでいる絆
風に舞う枯葉よ君は幸せか

大阪市　中川滋雀

六十年在位の初春にめぐり合い
カレンダーお前も三百六十五夜に耐え
憎まれている長生きも知っている
メモにするビラが毎朝溜まるなり
聞き役になろうと猫を膝に抱き

美祢市　安平次弘道

マンネリのこわさ小石にけつまずき
初恋の悲しく割り符合わぬまま
恋は盲目気づくと車間距離がない
市民権が欲しいアワダチ草の愚痴
エロ談義になると張り切る白髪染め

高知県　松岡三吉

先生が笑うと笑うみな良い子
サングラス外せば目もと涼しい娘
年金が来るから生きている私
就職の子と一日を城下町
核と癌こわい話がある地球

大阪市　天正千梢

還暦や落馬の数も三ッ四ッ
音合わせたくらみなどはありません
ふみ台を忘れ幸せに酔うている
諸行無情森林浴の中に座し
諸行無情諸行無情と波の音

島根県　榊原秀子

長生きは共にさせてと願う初春
美しい老い絵空事にはならぬよう
秋日和雑巾刺してるやすらぎよ
気を張って書けばかく程すねる文字
四冊の本を一度に購うは買い

出雲市　原独仙

九州の旅（二句）

空陸の快適な旅曽孫訪う
曽孫等に振り廻されて草スキー
親子共年金受給渓まれ
年金の尊さ長生きして判り
隠居さん子孫も造り菊作り

仙台市　川村映輝

のんきそうに見えても男腹で決め
さんさしぐれ歌う二階は嬉しい灯

松茸を半分呉れる友があり
グリーン車で週刊誌棚に降り仕度
断わりの理由前例が無いという　松原市　玉置重人

包丁のリズムは孫のハンバーグ
橋の袂で値踏みをされたのは僕
これも孝行亡父の年を超え
親類に年寄りがいる夜のベル
クレジット知らぬ夫婦で恙なし　和歌山市　若宮武雄

一日の計を大事と思う喜寿
平和の鐘高く鳴らないもどかしさ
阿弥陀如来の顔が怖いと思う日も
雑兵の功は握手をされただけ
抹殺へ赤鉛筆の気の重さ　寝屋川市　宮尾あいき

キリン草枯れて空地も冬の彩
かりそめの命を山茶花壺で散る
落葉ひろう私は秋の色が好き
外は冷雨女一人の冬仕度
うちの猫主人の私に似て多産　竹原市　森井菁居

土地売ってご先祖様に借りが増え
会者定離嫌でそれから飼わぬ犬
父も凡夫で嬉しい時は飲み過ごす
半分は妻子に見せる爪を研ぐ

出張の度に鎖が重くなる　宇部市　平田実男

胴上げをされる笑顔とする笑顔
アパートへ下着干す人干せぬ人
本人の未来は信じていぬ易者
全自動の便利無駄には触れずおく
平凡のよさが五十にして分かり　鳥取市　両川洋々

あやまち多きおんな火の性持て余す
のん気過ぎて二の矢は持たぬ俺だった
ヒロシマの鳩はのん気に鳴けまいぞ
黒幕のタクト札束まで降らす
魂を売った私を雪が責め　町田市　竹内紫錆

かげろうは消えプレッシャーの秋
手話もできずに見送る車窓
青春ありき階段教室
座椅子をならべ弟子をもつ妻
いぼがあるので床屋を代えず　和歌山市　内芝登志代

花道はゆっくり歩く方がいい
息切れへ妻が充電してくれる
おしゃれする紅葉に惹かれてするおしゃれ
みな多忙用なき老いへ日の長き
古傷がちくちく痛む冬のバラ　京都市　山本規不風

温もりが憎い唐津の人びとよ
知らぬ間を撮った写真を喜ばれ
葺替えて雨も楽しい低い屋根
熟年の七つ道具の帽子買う
古稀過ぎて箸のこけたを笑い合う

岡山県　時末一灯

政治色かすかに匂うとこで生き
冗談がやんわり傷口を嬲る
人形の眼が正解というている
北の路地ひょっとこ面が置いてある
秘境ツアー秘境をなくすまで続く

呉市　林野甦光

山茶花の遠きポストへ足運ぶ
吉日の床小鼓を置き変える
手締めして去年の事は皆忘れ
海はやさし叱られて来た子を庇い
臭覚は紺屋と踏んだ白い杖

大阪市　山根いつを

倖せは足らず余らずみな達者
離婚したのにも一枚おめでとう
大がいの無理も聞いてくれる金
もの言うとどやされそうた魚市場
泣いて来ぬ娘ですこしもの足らず

今治市　越智一水

砂の塔蟻が力を見せつける
母知らぬ少年夕日へ膝を抱く
生きのびて恋を知らない秋の蝶
雁渡るその夜の月がきれい過ぎ
一糸乱れぬ雁の言葉に教えられ

大阪市　黒田真砂

人恋し秋の夕べの茜雲
色づいた紅葉に父の忌を思い
恥じらいもためらいもなく寡婦の紅
バーゲンの人出に酔うてのむコーヒ
欲しいもの買えず疲れを持ち帰り

倉吉市　渡辺独歩

てっぺんの風は訛りを持って吹く
歳時記と富山の薬は手離せぬ
負け犬は歯槽膿漏病んでいた
花を飾る人の噂を消したくて
宇宙ツアーフェニックスに席をとる

羽曳野市　榎本吐来

尤もな理屈後からつけて来る
遠廻りする道があり昼の月
一幅の絵と休日のひとり酒
ちょっと待つ思案五十の坂に立ち
神のリストに洩れた余命を楽しまん

東大阪市　斉藤三十四

古墳群皿のかけらが物を言う
夕刊が来たから爺チャン風呂にする
ラブホテル妻によく似た人に会う
雲行きにかかわりはなく傘をもつ

タイミング只今私一人もの　米子市　石垣花子

揚羽蝶先祖のことは聞いてない
針箱の空気動かぬ母の老い
豆殻も豆にも同じ根の思い
花売りの籠からこぼす島訛り
日本の四季歳時記を裏切らぬ　米子市　青戸田鶴

あの人もこの人の名も秋叙勲
ゆるし合うと秋空が澄んでくる
今日を限り燃えて大山冬に入る
橋の名は昔のままの隅田川（隅田川下り）
老女ばかりさんざめいてた熱海の湯　米子市　田中亜弥

小説が笑えば僕も笑いだす
咳一つ父の部屋から漏れてくる
年金の暮らしに松の樹が重い
楢山へ行かせてならぬ父母隠す
闇の夜は敵もゆっくり眠らせる　米子市　菅井とも子

納得がゆかぬが子等に逆らわぬ
ご機嫌が悪くて訛ほとばしり
向い風にことさら廻る風車
普門院ヘルンにまつわる話など
淡水化気にせず鴨は浮いている　米子市　政岡日枝子

すんなりと山に抱かれてみたくなる
父よりも少し低いが母の山
曼珠沙華あとでじっくり泣きましょう
換気扇廻せば文珠の知恵も出る
長男が言うから重い喪の辞（ことば）　米子市　寺沢みど里

人の手にふれて目覚めたおじぎ草
母となりまだ抜け切れぬ里訛
十指折る初春にも亡夫の喪がつづく
先祖の忌かるい財布はみせられぬ
正座した位置におわした伊豆の富士　米子市　沢田千春

火の鳥になろう一人になったから
松の木を守ってくれよ亡父の声
出かせぎが赤ちょうちんで聞く訛
観光の波に素朴さ失われ
湯から出て貫録がつく松葉がに　唐津市　仁部四郎

先達へ書く礼状に肘を張り
その時になり断崖に咲いた花
ソロバンの玉をぬらした通夜の酒
あの丘へ登れば雲に乗れるのです
後ろにも人がいますよ赤い舌　唐津市　浜本久仁於

会長という名で張子の虎にされ
寝ていても絵になる牛が羨まし

元日の朝に下着が見当らぬ
降る雪へ地蔵の眉の動かざる
寅年に生まれて残す皮もなく

唐津市　浜本義美

日本中どこもかしこも百年史
蝶の死に蟻丁重に列を組み
友が逝く酒も煙草ものまぬまま
同病同室私の他はみな浄土
点滴を速めりゃ主治医からみられ

唐津市　田口虹汀

おみこしの上に宮司の生き作り
三十万人の割に少ないお賽銭
単純で何時も後方の席にいる
田も畠も家もギャンブル喰べに来る
真っ先に日の丸揚げる丘の家

唐津市　久保正敏

水中花欺瞞のままに朽ち果てる
山茶花に約束出来ぬ白髪染
それからの男の水位定まらず
内外野ふえてうるさい外出着
歳入にスピード違反もある予算

和歌山市　堀端三男

三面鏡覗くと亡妻に逢えそうで
面影を偲ぶ弔辞が続いてる
スクランブルひとりで渡る日本晴れ
アパートの踊り場噂がたむろする
浮世絵のおんなが嘆く性モラル

尼崎市　春城武庫坊

元日や昨日と違う風の彩
雨が降るから赤い花束買ってくる
居酒屋の空気に情とけている
老酒を飲むと猥談湧いてくる
無蓋車が積んできたのは寒さだけ

尼崎市　春城年代

愛すると聞いた気がする風の中
約束はないが逢えるかも知れぬ
謎めいたことばに翻弄されている
小抽斗遠い日ばかりあざやかに
おとなしい虎で酔うたらねてしまう

浜田市　中川幸一

ハミングで人間ドックから帰る
ネクタイの好みがよくて厭な奴
外語出が啞で通したヨーロッパ
盗まれて調書証印までとられ
出稼ぎの地下足袋が踏む都市砂漠

名古屋市　越村枯梢

野分け一陣ひとの心も西ひがし
名調子だったと思う捨て科白
強かに生きつづけてる土踏まず
告別式に一きわ派手なひとがいる
深海魚お前も矢張りネクラ族

名古屋市　大林曲ん手

鶴を折る忘れて欲しい嘘一つ
女丈夫の姿と見たり曼珠沙華
後始末私も予備のない命
日めくりの一枚ずつが枯葉かな
人生も香車のようでは味気なし

出雲市　園山多賀子

八方美人姑息な指で輪をつくる
彩変えて見てもこおろぎ敗北者
桐一葉紅葉を紡ぐ女たち
ジレンマに墜ちて女の失語症
年輪という雅語皺をいとおしむ

新宮市　川上渓水

弱点の数だけ人間臭くなる
冗談で言えず本音でなお言えず
職変えてみてもやっぱり重い靴
本当のライバルだから仲が良い
手ぶらでは行けぬ話を持って行き

気根県　栂みどり

変りなく暮れていささか物足らず
感謝しておるのに怒鳴る夫婦仲
交際費の中に組込むゴルフ熱
大幟豊かになびく祭り笛
地球儀をまわして北の窓をしめ

今治市　矢野佳雲

最後まで味方の母をうるさがり
信頼をしていますのと油断せず
道傍で署名せぬにも要る度胸
添いとげてからは関白山の神
産院へ一緒に来ない責任者

東大阪市　崎山美子

中年の指パソコンにあなどられ
枯れて散る自由夢みている造花
のの字書く指が知ってる恋心
ゆとり出来夫婦の絆ゆるみだす
伴走の妻をたよりの向い風

浜田市　佐々木裕

足元は杖を頼りの口達者
天才も馬鹿に会うたら馬鹿になる
逆風をついた女の性かぶる
老いて来た知恵が和音のもととなり
まだ甘い夢を追うてるアイシャドウ

富田林市　藤田泰子

風が吹くまでのやすらぎ水鏡
恐いのが快感という恐妻家
なんやかや言っても他人の旦那様
デパートで売られてキロット、パンプキン
運動会どれが生徒か先生か

八尾市　宮崎シマ子

どうせならテレビも買うた十二月
十二月になって虫歯が痛み出し
親友が来たらし妻のはずむ声
三ヶ日亭主関白許します

隣の子の晴着の帯も手伝うて

高知県　赤川菊野

傷心をいやしてくれる花の種
聞いてやる愚痴へ自分の過去をみる
脱サラへ夢がしぼんだ不況風
独り居の哀しきものに夜の咳
般若経空でおぼえる不幸せ

西宮市　奥田みつ子

ライバルを褒める言葉があり余る
雨足も慕情も烈し山の宿
母から女軌道修正ままならず
想像が想像を生み女夜叉

父病む

尺八は袋のままに違い棚

出雲市　吉岡きみえ

止り木の酒は美味い酒高い酒
百薬の長の酒が狂いだす
酒のめぬ男の長居無用なる
酒断ったこの身に記憶の中の酒
酔いさめて自責の念の涙かな

寝屋川市　柴田英壬子

訥弁の友から蜜柑どさと着く
炉辺で焼く岩魚の旅を夢見てる
肉眼に飛び込んで来よ箒星
未来の樹であるためにです基礎化粧
新築の木の香が好きな風雲児

つぎたしの食卓囲む誕生日
七五三平和な国の有難し
六十路坂八合目の越えがたし
エプロンの一生を有難しとも
フィナーレとても上手に舞う木の葉

大阪市　柳原静香

これだけは守れと見せる箇条書き
例外も見とめようとせぬ石頭
冬ごもり書きためている春の唄
一人芝居だから大目に見てほしい
もう若くないと手足がすね始め

大阪市　藤田頂留子

幼な児に一番宝はお母ちゃん
遠慮のカタマリ孫の手が出てけりがつき
生活の灯も絶景になる宿の窓
免許証に今日から危険ついて来る
童唄遠い昔で呼ぶ記憶

大阪市　長谷川春蘭

禁酒令病室の窓更けて行く
冬支度衣料ストーブ障子はり
無料パス持つとやたらに乗りたがり
入院の準備借金を皆払い
みかんだけ安い離島の浜に立つ

八尾市　山下みつる

女から煩悩の面外れない

出雲市　石倉芙佐子

能面を付ければ背筋しゃんとなる
芒野を能面走り抜けてゆく
羽衣を愛しつづける松の枝
新しい年も能面泣き笑い

大阪市　神夏磯　道子

頂点に来たナと思うお正月
再就職の夫に出来た力瘤
記念品ぐらいは期待出来るだろ
曲り角父の人生ふと思い
好きずきがあって赤も黒も売れ

和歌山市　松原　寿子

約束を蒼い翼へまろく抱く
掌線に逢う日の余感ゆれている
往きも帰りも素通り出来ぬ愛の森
拗ねた背をまたひき戻すにくい人
いちめんに初春が拡がる日記帳

松原市　北野　久子

久々の仕立へ好きな鯨尺
惚けるよりましと思えど舅の眼
孫よりも舅寝かせてほっとする
娘の婿となる人と行くレストラン
正月だ娘手放す年が来た

鳥取市　森田　熊生

赤ん坊の手相明日の虹描く
もう酒はやめたと夕暮れまで思い
ゴム長で来て新鮮な野菜さげ
いい話だんだんでかくなってくる
なるようになれと雨傘持っていく

大阪市　本間　満津子

白杖のにぎりに冬がやって来る
家中の時計が止まる主婦のるす
糸切りに鋏を使うようになり
むつかしい話が子守唄になり
雪つりの松が芸術品のよう

神戸市　山口　美穂

さよならを言うてそれからの指切りで
束の間の虹だからこそ渡りたい
行儀の悪い菊はわたしに似たのかも
野の地蔵さん日毎に冬の顔となり
推理小説読んでるような日々の記事

高石市　牛尾　緑良

家計簿の穴から見てる子の育ち
妻への約束はまたまた年を越し
日本の新春にコーヒー飲まされる
ほほえみをひとつ明日のため残す
電話訪問居間へ土足であがりこむ

大阪市　鈴木　節子

春の寅ゆっくり飛躍を考える
おだやかに歳をとりたく墨を擦る
灯を点けて少し思いを替えている
朝食のいも粥に亡母がよみがえり
電話する方がやっぱり負けている

鳥取県　中原　諷人

秋さらば想い出さらば刻の音
いたわりの情けに白い歯を浮かべ
モナリザと呼ぶ稜線の母老いし
木守柿あちこち旅へ発つカラス
雑木林の熟柿は注連かも知れぬ

尼崎市　角野　かず子

ささやかに幸せ紡ぐ彩つむぐ
いつからか齢が自慢になってくる
期待した答えがでない福袋
塀なおし平均寿命まで生きる
引き出しに匂いをためて妻の留守

西宮市　西口　いわる

どしゃ降りの中を濡れずに来た封書
何事もないまま切符吸い込まれ
琴の爪無くしてからの失語症
父からの形身の一つ菊作り
いわし雲あなたは駆けて来てくれる

倉吉市　淡路　ゆり子

還暦のこまを夫婦で温める
散歩とは名のみの老いの手暗がり
コスモスの声がこぼれる散歩道
宇宙から宣伝に来るハレー彗星
中流の意識で飾る千歳飴

島根県　松本　はるみ

わだかまりが解けぬ朝の茹で卵
アンチ巨人うれしいことを言うてくれ
古里にひっそり亡兄の紺がすり
さてここでびっくり水を使うか
古里に切れて久しい糸電話

島根県　岸本　輝水

愛想がやたらに増える十二月
煩悩を背負って夢が重くなり
仏心が秋の気配に乗って来る
今一つ様にならない帯を締め
旅籠から笑いの声が温かい

西宮市　杉浦　婦美子

薄謝と書いて重たい義理包む
仇野の月は懺悔を聴き飽きる
逢えば泣きあえねば泣きぬうす灯
美貌の患者に人気のあった二病棟
あかんたれの自分を許した歳月よ

近江八幡市　前川　千賀子

指きりの指の間のすきま風
カラフルな過去をハートにコレクション
黙契を忘れはしない糸切り歯
白状すれば核より恐い歯医者さん
税騒ぎも比叡おろしも寒い鳩

尼崎市　奥山　美智子

神様の仮の姿を見てしまう
追いつ追われつみんな疲れた走馬灯
ポケットにいつもしまっている言葉

柿の種答えは急がぬことにする
石けってとても弾んでいる予感

和歌山市　坂部紀久子

神の意志明日を信じる外はなし
何もかも有難がって生きた母
背中から噂聞こえて来る孤独
ホーム炬燵出せばみんな寄って来る
会話の間外し女髪に触れ

和歌山市　福井桂香

王様の買う夢がない宝籤
松の内軽い鼾と添うて寝る
よい方で噛んで片方治療中
美しく生まれ運命は未亡人
振り切れと他人はたやすく言うた過去

倉吉市　野中御前

檻のなかあれはたしかに孫悟空
人妻と散歩鳳仙花が弾く
宣伝に狸のほうが化かされた
朝がきたさてどの面をつけようか
人間の正体見たり飢餓の国

高槻市　竹内花代子

弟を悼む（一句）

母の墓建てて自分が先に逝き
倖せは六十路で切れた夫の死
受付へ坐る和服の彩を選る
仏壇も秋菊に柿栗御飯

一泊の旅へバファリン　セイロ丸

大和高田市　岸本豊平次

この奥に神のいませり五十鈴川
オペラグラス白塗りの皺見てしまい
正直な目覚時計がたたかれる
ご無沙汰の義理をはたした廻り道
蓑虫のぶらんこがあり冬に入る

姫路市　人見翠記

松茸の香り柚子の香りと秋深し
誕生日亡母いまさばとしきりなり
大和路の柿に夕陽が暮れなずむ
浄財函に十円は十円玉の音
連休のほこり沈める古都の雨

鳥取県　新家完司

図書館の匂いの中で秋が逝く
飛行機がどうやらこうやら飛んでいる
六根清浄なまぐさき歯をみがく
しっかりといずれは離す手を握る
いちにちの最後に風呂の栓を抜く

羽曳野市　田中隆二

首つりの背広が似合う父の背な
定年へ指折る朝の靴をはく
行きずりの風に指切りしてしまう
馬鹿なこと言うて心で泣いている
クレジット衝動買いはせぬように

小野田市　国弘半休門
小野田労災病院

八十歳の愚痴も出て来る秋曇り
柳友に手を握られた見舞なり
注射針まな板の鯉に負けないよ
病窓の沼に白さぎ餌をあさる

兵庫県　辻　文平

計算をして白足袋を穿きかえる
五線紙をこぼれてからの父の唄
愛だけがあればと溺れていた不覚
自惚れておんなが渡る丸木橋

鳥取県　森田布堂

唄にある名所の松も枯れました
切れ凧を追う児がころぶ風の中
おむつ干す竿に国旗を建てている
くしゃみにもひと癖あって笑わせる

守口市　羽原静歩

子育てにピーターパンが多過ぎる
金屏風喜劇も悲劇も始まりぬ
人形も私も今夜は不眠症
コールテンのズボンに野心も何もない

奈良市　森田カズエ

定年の鞄に自画像つめている
子育ての日記に母の涙あと
稲刈って束ねた指が淋しそう
年金でくらし家計簿読みかえす

寝屋川市　江口　度

中東の挨拶ロケット二三発
しまったと瞬間思う冷凍魚
沈丁花長期約束してくれる
ロボットはきっと音痴の笛を吹く

橿原市　岩井本蔭棒

大根を洗う女の胸豊か
特攻の基地の跡なり襟正す
やり返す言葉は帰宅して浮かび
真っ先に歳たしかめる名士の死

岸和田市　清野こう

ユーモアも混じえた法話になごむ旅（元善光寺）
干柿の色あざやかに夕茜
若い日の着物こんなに地味な柄
石棺の眠りの謎にあるロマン（藤の木古墳）

羽曳野市　佐野白水

未亡人泣かす一周忌へ行きとない
磨崖仏滝の修験者見守って
河内大和一ト皮むけば古代あり
庭の菊色とりどりで老い楽し

大阪市　北勝美

カタカナについて行けない老眼鏡
券売機めがねかけ替え運賃表
川柳冥利未知の人から来る便り
ツインビル影伸びきっている冬至

大阪市　吐田公一

大切に育て過保護と指さされ
トリックができぬ真面目な父の顔

私さえ我慢をすればと古い母
湯煙が見えふる里のくに訛　桜井市　河合茂雄

極楽を信じ今日一善を積み重ね
見栄捨てて女は強い母になる
マラソンのテープは孤独の胸で切る
恵まれぬ星を一生背負わされ　出雲市　板垣夢酔

腹鼓打ちたい程に秋を喰い
気丈でもうるしと男についかぶれ
女から見ればおんなは怖いもの
侮って恋の湯冷めをしてしまい　島根県　錦織文子

おごそかな心に佇てり初日の出
元日や人間に帰るひとときか
古井戸の廻りで燃える曼珠沙華
菊咲いて貧しき野仏かざりけり　守口市　野呂右近

似通った暮しでライバル意識なし
子離れの安堵に迷い出す女
紅唇から飛出す人を刺す言葉
心の飢餓満たして呉れる本漁る　倉敷市　小幡里風

負けて来てじっと見詰める菊の花
十一月大分やせたカレンダー

ベテランとも鬼とも言われ親しまれ
花束の列へ謀反者が一人　岸和田市　福浦勝晴

中支戦線回顧（一句）
秋風に似し跫音や塁守る
ふかし芋食べ食べ転んで〝やせる本〟
気まぐれにのぞく隣の犬のエサ
だいぶ呆けましたと呆けてない証拠　鳥取県　林露杖

コマーシャルちゃっかり盗みコメディアン
ストローで飲む箱酒のつまらなさ
見栄はった寄付に溜息妻の愚痴
また二人減った賀状の宛名書く　和歌山県　天満三千代

古寺巡る女をぬらす京の雨
度重ね未知もなじみとなる行脚
竹生島雨が名残りを惜しませる
来る年へ夢いっぱいの老い二人　西宮市　朝山千世子

暖冬至迷い蚊くる独り言
柿の里しぐれを除ける茶屋床几
湯どうふを独りでつつく影法師
御神輿ワッショイ神と人間たわむれる　和歌山市　神平狂虎

意地を張りすぎてとうとう石になる

日溜りに淋しい貌が寄って来る
マフラーを編んでいるのは神だった
霙混じりの人生ばかり夢ばかり

和歌山市　山川克子

さりげなくさりげなくするむずかしさ
バカを言えバカを言うなとややこしい
事が事だけににやにやしておれぬ
腹割って話せばなんて事ないよ

西宮市　野呂鵜汀

海青し人は何ゆえ死ぬるらん
いたわりも愛も老いればさりげなし
木犀が匂えば母の逝きし月
住職は萩が好きらし萩の寺

和歌山市　寺田裕美

紅葉の木霊園児にはねかえり
山芋と長芋の差があるレンジ
秋深し知性へ被るベレー帽
指切りの指の細さを欺けず

福岡県　横地雅風

心病む今年も金のことばかり
賀状から点滴のようないい言葉
色刷りの松だけ貼って初春の旅
ひっそりとローカル初春の旅だより

岸和田市　芳地狸村

東北地方を旅して

三途の川車で渡る恐山
古都税に仏忘れた京の寺
押す迄はうまい言葉の保証印
ちっぽけな意地で命を無くしてる

枚方市　二宮山久

満点の妻でちょっぴりものたらず
自動ドア決心つかぬまま開き
ラストチャンス恋の花咲く御堂筋
老いてなおのんびりできぬ趣味多忙

神戸市　仲どんたく

大根に徹して無事な日をおくり
ワンラウンド僕の命とほうき星
大便がうまく出た日の鰯雲
皿までの商法老いのターゲット

鳥取県　森山盛桜

玉砂利の他に聞くべき音が無い
恋唄が消えて全く冬となる
鳴咽消すように降りこむぼたん雪
火のような温もりが有る女傘

倉吉市　広本文子

振り向いて他人の顔をたしかめる
コスモスに女心をのぞかれる
風呂敷の家紋が重い女坂
連れの中で裏切る者はよく喋る

尼崎市　伊藤春子

酸性雨こわい話を聞かされる
帰り待つ猫の通路は開けて寝る
グループの気ごころ揃う時刻表
下積みの父へ茶の間の灯が温い

松江市　竹内寿美子

後姿似ているようで振返る
自転する愛を外から見ています
鳥かごを出れば無口になるオウム
表面張力破れて涙こぼれ落ち

大阪市　鍛原千里

トラの威を借りて仁王に逢いに行く
登るより降りる勇気があればよい
熟年の夫婦に嘘はもういらぬ
ぼけ同士ライバル意識もっている

島根県　藤原鈴江

本当の気持ちが聴きたいバラの棘
もう一度咲いてみたいと思えども
蝶や蜂やがて来る日の種をまく
バラ一輪咲いても薫る闇の底

大阪市　大野武太

一年の回り舞台や除夜の鐘
親も子も心機一転寅の初春
信用の二文字しかと子に譲る
振り出しに戻る塗料の三坪半

大阪市　中西兼治郎

糖尿に絶対ならぬ暮し向き
星に出て星に帰って恵まれず
乳呑児を抱いて離婚へ妥協せず
居座った家に高速つき当り

大阪市　坂本仙吉郎

全山紅葉走るに惜しいいろは坂
好きだったあつ湯長風呂禁じられ
霧の色変る四万の湯の煙
湯上りにくつろぐ出窓水の音

鳥取県　金川満春

淡路島旅行

商魂も見えみえ平和観音像
無意識に手を繋いでる紅葉狩
リハビリの散歩平和な福祉法
大中小適材適所にある役目

島根県　大森孝華

秋まつり小銭いらない老いわびし
慕いよる小袖へ匂う舞扇
母の背をながして好きなわらべ唄
客よせて祝うまつりへ娘のうわさ

羽曳野市　中村優

ハンカチを持てば可愛い泣き女
名作の録画邪魔する文字ニュース
振り上げた拳ゆき場がない過保護
ひとひらの雪を心の絵に受ける

宝塚市　丸山よし津

レポーターぎっちょの箸の美女である
カラフルな薬で鶴はもう飛ばぬ
怠け続けて霜月となる風の音
年寄りは年寄り連れの立ち話

高石市　浅野房子

行楽の名残りか親子で眠りこけ
空しい秋言う事きかぬ子と夫と
留守番のものうい午後を破るベル
紅葉にことよせて言うひとりごと

箕面市　坪田紅葉

もらいものの松茸でたくまぜ御飯
秋深く人恋しい電話口
友も又片意地になりよくもめる
病室でこれも見舞とぐちを聞く

大阪市　大塚節子

身の上話涙の味のしむコーヒ
カードライフ金銭感覚失われ
吾も亦何れ先祖と言われなむ
隣から故郷の実りのおすそわけ

岡山県　直原七面山

嫁に来て母を恋い
子に花を持たす父
石投げて憂さを捨て
旅に来て富士を愛で

松原市　小池しげお

草刈機で刈られた草はすぐ生える
カンニングしようと思う窓の雲
ライバルへ答えを二つ用意する
神主に子供がほしい七五三

兵庫県　藤後実男

退職の明日の時計狂うてた
念書まで書いたお金が届かない
無人駅乾いた風が吹き抜ける
カレンダーめくれば秋が待っている

姫路市　大原葉香

電柱の数で道順教えられ
お日さまに馬鹿正直を笑われる
風車風の気ままが気に入らぬ
国勢調査一億分の一の位置

倉敷市　藤井春日

初詣で老い打つ柏手まだ若し
早退の訳は課長も農繁期
大原女の季節売ってる京の街
Gパンをさりげなくはく四十路です

和泉市　西岡洛酔

白昼夢の中に出て来たのは他人
石橋を渡った所でけつまずき
三面鏡女が立つから様に成り
善を積む明日は骨に成ろうとも

六甲おろし続きあるのか虎の夢
年金が長寿の虫に住み付かれ
行革の試練を潜る汽車ポッポ
転宅の手伝い観音竹せしめ

河内長野市　井上喜酔

能登の空渡る見慣れぬ鳥の群
届かない柿は小鳥へ呉れておく
雪将軍迎える垣はしかと結う
さっときてさっと退く時雨よし

羽咋市　三宅ろ亭

女とはほめてなだめてひく手綱
指を折る心定まるのは自室
惨劇の涯からつづく青い空
その過去に触れず団地にある孤独

島根県　大屋秋峰

ピカピカの金よりイブシ銀が好き
信賞も必罰もせず民主主義
老いてまだ人の邪魔するスポーツを
指だけはパチンコ通いで老化せず

和泉市　岡井やすお

老いらくの恋に燃えない磁石持つ
出稼ぎの窓に親子の影うつる
同窓会女性も二次会三次会
引いた字を又引きなおす老眼鏡

姫路市　松浦輝月

浮くことなく沈んでばかり自己嫌悪
まだ解けぬ迷いのままの靴を履き
それなりの夢をあしたへ老い二人
あげ底とまずさと二重噛む土産

岡山市　井上柳五郎

割勘に先生派手な飲みっぷり
ペンネーム郵便さんも認めてる
女子社員休みきりきり舞う男
笑うのはトンネル抜けるまでこらえ

岡山市　行吉照路

冬の笛父は好んで低い音
遅れがち女遍路の軽い咳
お祭りと一緒に去んだ赤トンボ
友の訃受話器が指に凍りつく

西条市　片上明水

他人から鏡にされているわたし
僕も赤い羽根は通行手形と思う
仮に思う本飾るなど野菊など
電話鳴ってるお隣という遠い国

倉吉市　渡辺菩句

寒がりがこたつを出せとやかましい
終電の息子をテレビで待って居る
巡り来る年の瀬今年も生き残り
気兼ねすまいお上もまだまだ生きてはる

貝塚市　行天千代

鳥取県　土橋　蛍

方向音痴に太陽は東から
しあわせを拾いに散歩してきます
男から理由を聞かない夜なべする
手を振ってわかれてからの二つ星

川西市　松本　ただし

妻の持つ射程距離は意識して
病葉の散る外はない風の舞
日本を肯定している蟻の列
一病の枠を守って古稀迎え

吹田市　茂見　よ志子

散りいそぐ山茶花掃いて身を愁う
茶断ちした友の心に触れずおく
紅葉狩り山道夫の手の温み
ビル目当て歩けば目測違う距離

寝屋川市　堀江　光子

これからの冷たい露を野の仏
仏像の丸さで祖母の日向ぼこ
首輪のない犬が時雨を急ぐなり
足音の止む木犀の下あたり

奈良県　宮川　古都路

俯瞰する大和三山村に浮く
よい話まとめてうれし月の影
空想もあたまの肥やし明日を見る
勧請縄結界の下みずが澄み

西宮市　津山　冬子

木守柿因習守る祖母が居て
補聴器の返事時には喜劇です
バーゲンで小さい義理をすませとく
お守りを添え空の旅子がくれる

高知県　曽我部　裕

金になる苦情で足がすぐ揃う
三ヶ日だけはと思う訃が一つ
なんと言う時代子供が首を吊る
飽食のこの世へ落すひとり言

寝屋川市　平松　かすみ

スキップを待って居るのは影法師
くしゃみして塗り変えさせた空の色
せめてもの足音だけは中流に
ライバルがお愛想言うた日の焦り

姫路市　丁坪　サワ子

饒舌の底に秘めた涙壺
三代の御代の誇りに生きた父
娘の電話声の曇りがさわがせる
ジョギングの足がたき火に誘われる

岡山県　岩道　博友

書初めに愛の一字を持つ未婚
突然の客から貰った知恵袋
凧の糸心の叫びを高く挙げ
教科書に無いいじめをよく覚え

大阪市　岡田ふみ

いやな事忘れてしまおう秋日和
鹿ヶ谷の謀議はやはり金儲け
見る方が馬鹿だと息子に悟される
豊穣の畦を彩る秋ざくら

豊中市　上田登志実

キャッシュレス時代カードに管理され
老年に「花いちもんめ」が警告す
ココ椰子は藁のころもの冬姿
だらしないアンバラ服で自己主張

岡山県　二宗吟平

真面目さの裏をかえせばあかげっと
向きかえて男は後をふり返る
退院が近し御見舞いかけつける
八十の欲朝のジョギング夜の竹

神戸市　山片紀雄

据膳のたのしみだけの主婦の旅
事故現場安全護符が揺れている
休憩とは食べてしゃべって紅つける
考えぬ女のしゃべりは止められぬ

弘前市　田中叶

おとうとが妻の瞳の中に棲む
二階から見ている人が今日見えず
ナポレオンあり長いこと待たされる
衰えぬ美貌人事に口を出す

堺市　柿花紀美女

ふる里にもう見あたらぬ丸木橋
大根菜間引く指先から冬が
黒髪の手ざわりいつか消えている
小さくとも心豊かな老いの城

鳥取県　中原みさ子

女ひとり怨みつらみを耐えしのぐ
すすき束ねて貴方と来世誓います
めぐり逢いそして別離のひき潮よ
風しのぐ七十五日の鳳仙花

鳥取県　中原汲香

障子はり替えて倖せを抱きしめる
遅まきに幸福らしい二人です
六畳の部屋に埋もれた亡母の私語
今年こそは日記帳が書けそうだ

諫早市　原田メイシュン

仁王さん何に気にくわん目玉むき
ガソリン値上げ自家用車も腹八分
定退へ女房も朝寝のおつきあい

大阪市　松尾柳右子

ズダ袋さげて乙女の耳年増
編上る頃は春だと知りながら
加速する五十路へ用事目白押し

島根県　北川民代

客ひとり乗せてローカル列車過ぎ

夕仕度止めてくれるな焼芋屋
言うでもなし聞くでもなし秋の夜　境港市　細木歳栄

雪ならば会えるかも知れぬ吹き廻し
嘘ひとつまた言いました悔いを抱き
期待した通りに成ってもの足らぬ　芦屋市　竹中綾珠

自転車で老夫婦が遠出する
ゆり鷗大浪小浪の通り揺れ
朝早く鳥の声も良しと聞く　西宮市　藤村宏子

逃げかくれしても仏の手の上で
兄弟の落差に母の橋かける
運動会と葬式がある団地かな　枚方市　稲葉星斗

初風呂は椿眺めて湯にひたる
小倉山昔ながらに時雨する
道問えば向うも同じ社寺巡り　大阪市　板東倫子

感傷は親だけにある結婚式
バイバイと出掛けて行ったハネムーン
留袖に五十女がはしゃいで　寝屋川市　岸野あやめ

肘枕私の明日を信じよう
五十年空気になった俺お前
葬式と法事の日だけ会う従姉妹　交野市　山本テルミ

家元の松は豪華に峰の風

秋晴れや赤いドレスの葉鶏頭
スリッパがいつも小言を聞かされる　豊中市　奥田満女

通勤車女ばかりに口があり
長生きで何でも知りすぎよく忘れ
鉄橋の裏にすんでる鳩一家　大阪市　古川美津枝

老眼は進むフレーム派手になる
好きやねん私もお洒の燗をする
老松も冬ファッションのコモを巻く　大阪市　町田達子

名場面回想すると若くなる
根はみんな良い子の筈と考える
今頃は亡母の故郷秋祭り　大阪市　塩田新一郎

家柄か百万年前知ってるか
お好きにと金の無いのは強いもの
一と口で消される煙草十二月　大阪市　北山悟郎

手拍子に翻弄されて居る音痴
日めくりの一枚運命変えられる
無職には儲け話は素通りし　高知県　小澤幸泉

自治会の歩みをめくる手を休め
風寒しされど生れてくるがよし
どの庭もいたわりあって語り合い

◇12月号「子は宝積木くずしの子も宝」(松岡三吉)は、59年3月号の赤川菊野さんの句と同じにつき取消します。

自選集

小豆島（二句）

銚子渓目にとびこんだ柳史の句碑
寒霞渓そこのけそこのけお馬が通る

山内静水

ただいまへ娘の靴と孫のくつ
何が何んだか承知させられて
何もしてやれない妻に励まされ

藤井明朗

新春へたお幸せをひきしめる
にほんの平和を信じ白鳥の里帰り
雪止んで二人を照らす冬の月
喜寿近くなり仕上げを急がんか
新春の希望明ゆく陽が昇る

水粉千翁

合掌の指先にあり初日の出
うららかに話せばわかる年が明け
天と地に救われそうになる祈り
地に足が付いててんとうさま拝む

勅題に寄す

滾滾と水の旅路のみどりいろ

米沢暁明

年頭の誓い虎の威借るまいぞ
コップ酒ここではここの政治論
遊園地思い思いに散るところ
アルバムのふくみ笑いの思い出よ
手を出せば思いは同じ手を添える

市場没食子

点滴を止めたとたんに尿が減り
退院をしたら痩せ出しもの憂がり
句会用字引も半世紀の手垢
連休はもう珍らしからずカレンダー
ボーナスは三桁で暮を煽りたて

高橋操子

いい器になろう姑という位置で
花の寺いといんぎんに鐘がなる
母偲ぶふる里の柿熟れてくる

チャルメラが鳴ると北風きつくなる
我が道はけわしかったがぬくい道

八木千代

椿野の隅に来世よ棲まいたし
情熱をハラリと落す椿の木
やがて墨いろにうすれる椿の絵
もうひと世咲いて散りたい落椿
椿の木前世もきっと椿の木

小出智子

少し利口にならねばならぬ風の街
たかが豆腐男に買いにゆかされぬ
石段はゆっくり登ることにして
逝った人の齢聞いている軽はずみ
涙脆くなりこの町に安住す

月原宵明

万才のように子の無い夫婦和し
じいちゃんじいちゃんと看護婦軽んずる
必勝と裸婦が並んだ入試の灯
コメントを避けて蜜柑の筋をとり
風紋を明日訣れるひとと踏む

金井文秋

植木に水やって損したように雨
情報はあまり気にせずマイペース
サラリーマンだけが男か嫁ききん

LLだからコスモスに憧れる
人並の寿命でよいと思う日も

尼緑之助

人権が溢れる一億二千万
溜息を吐いたら負けだ腰を伸す
冬の雲走ると世間走り出す
拿捕の蟹競売に乗ったら二万円
反戦の闘士そもそも戦好き

藤村〆女

顔見世の噂にふける舞妓たち
ぬき衿の化粧が映える蛇の目傘
耳にたこ出来る昔で栓をする
栓抜けば底から響く父の笛
花いちもんめ逢えば幼な名にかえり

川口弘生

初日の出貞操固いガーネット
前門の虎に抗して二兎追わず
神様も大衆の眼もお見通し
秀でざる一芸なれど他能なし
白寿茶寿途中下車などしたく無し

正本水客

奥入瀬渓流

紅葉うち重なって瀬音を高くする
流れと道と顔を並べて語り合う

木立深く左に右に滝を抱く
阿修羅の流れ紅葉の赤に負けじとす
銚子大滝もう十和田湖の風になる

小林由多香

引際もみごと貫録見せつける
わかとりのはばたき見事羽を閉ず
夢を追う女暖かみに欠ける
鍵束の中の一つがよく光り
無理やりに納得させて背かれる

黒川紫香

春近しまたぞろ旅の本を買う
三ヶ日飯場に軍手干してない
父さんがいるので正月らしくなる
すこしだけ千切り犬にもやる雑煮
生きてはりまっかそうかで事が済み

市川鱗魚

蟹は幼稚な恋でわたしをねむらせぬ
百足急用四、五本痛い脚がある
銭があればあればと思うニシンそば
ユーモアに欠けた鏡があるトイレ
母の背の丸さに嘘が言いにくい

本田恵二朗

高らかな笑い声こそ彼の味
惜しみなく叱って褒めてくれる友
友は佳しひらめくものを蒔いてくれ
楽しさを等分にして談はずむ
喜んでもらえて奉仕が生きてくる

児島与呂志

むつかしい語源も知らず謝辞を読む
大根のべっこう色がめずらしく
村地蔵老母が花と水を替え
また町と丁目が短く詰められる
近道を避けて礼だけ言うておき

工藤甲吉

正月も吹雪地獄でちぢこまり
白書とはいつも合わない我が生活
日の丸がいくさなどした訳でなし
世の中が汚れて顔もまた汚れ
豪快な酒は仁王になってくる

大矢十郎

美しいからこそこなす汚れ役
好まねど戦前となる此の平和
一パーで揉める平和のありがたさ
欺された事も糧なり子に話し
貸し借りはないが借りたいおつきあい

阿萬萬的

二科展を見て
灯台の白さが雲と話してる

黒が基調で化石になった石のうた
黒人レイ歌目玉目玉が光ってる
青い月の光羅漢はみな伏目
人形の絵は鳩笛の音で描く

野村太茂津

法悦や渡瀬の湯に紅葉降る
幻想を塗る真夜中の湯が溢れ
啼くな小鳩よ弾丸痕疼きだす
独り腑抜けて山の湯に首が浮く
悪役を今年も徹す男唄

長野文庫

日に割ればいくらいくらと安そうに
すんなりと嵌る相手の得意わざ
国鉄の笑顔おそまきでも嬉し
未だ来るな十万億土から便り
芽出たい月本ものらしく輝けよ

橘高薫風

還暦や吉祥天と初詣
還暦の若水なれば若やいで
書初の虎の一字は心足る
今年また孫からかかる初電話
還暦は実年の花弓始

第6回 ときせん賞作品募集

雑詠2句（未発表句）

選者 大野風柳・去来川巨城・橘高薫風・寺尾俊平・小松原爽介

投句締切 昭和61年1月末日着便

発表 昭和61年時の川柳4月号誌上

賞 ときせん賞 一名
準ときせん賞 二名
佳作 五名

投句料 五百円（小為替、投句に同封）
▼誌友外で発表誌希望の方は千円（投句料共）封入のこと

投句先 〒652神戸市兵庫区大同町2丁目3—18
卜部晴美方
時の川柳社編集室宛

選句方法 無記名清記の上、選句一句ごとにその合計点で順位を決め、上位8位を入賞とする。
（平抜2点・佳作3点・三才4点）

時の川柳社

—同人吟—

秀句鑑賞

—前月号から—

水粉千翁

井上剣花坊も正岡子規も、夫々のジャンルにおいて只革新というのではなくして、時代の流れの中に即応しようとしたのではないでしょうか。最近いくばくかの作品に対して、川柳塔の中でも川柳を逸脱したような作品だというご批判もあるようでありますが、私も同感であります。しかし〝時代の流れ〟の中で原点を失わないことを前提とした川柳であれば、文学に到達しつつある川柳のためにもこれらの作品をもう一度見直してもよいのではないかと思います。

虫の音へわが一病をいとおしむ　遠山可住

私を含めて無形の感情を詠む川柳を好む側からして、この句に心打たれます。病む者のみが知るのではなくて、虫の声を通じていのち長らえようとする願いが中七から座五に切々と訴えられています。

絆かなまして木枯らし吹く夜は　小出智子

親と子だけでなく、人の絆の断ち難きは、〝絆かな〟の三文字に尽きます。木枯らし吹く夜の一入絆の固さを思わせます。

ああ孤児よソ連が攻めてさえ来ねば　岩井本蔭棒

終戦前後を知り尽くした者の吐き捨てたいような十七文字です。〝過ぎたるは及ばざるが如し〟などとこの句を見捨ててはなりません。指切りから条約まで決して嘘があってはなりません。孤児の道の出発点に憤りを感じます。

恥をかきさらさんあくまで天高し　山内静水

〝天高し〟の中に人は決して裸になったことを悔やんではならないと作者が喝破しています。

紙人形苦労ばなしはよしましょう　高杉鬼遊

紙人形以外はひとり言です。そして紙人形もいのち無い存在です。そしてひとり言に自らを律しているところに句が生きています。そして〝紙人形〟も鮮やかです。

方言で夫婦喧嘩を引き分ける　仁部四郎

平素平穏無事で夫婦の見本のようなのが何かの行き違いで喧嘩になり、引き分けの第三者がびっくりして方言丸出しで仲裁をするという景。正にこれは喧嘩ではなくて夫婦の楽しみでありましょう。方言が聞こえるようです。

女だてらよその女房でほっとする　松本忠三

ご主人さん冷たいねと誰かが言っています。女房でなくてほっとしているからです。川柳のおもしろ味を教えてくれました。

桐一葉不意の訣れを告げにくる　広本文子

桐一葉は秋を知り乍らもなお重たさを人に告げるものです。かさこそとする木の葉と違うところを作者は繊細に表現したのでしょう。その重い葉音に訣れの悲しみがあります。

美人だったなあ高かったなあ二日酔　二宮山久

これこそ後のまつりだったのでしょうが、でもまあ結構楽しかったのではないでしょうか。二日酔はお困りでしょうが、それぐらい我慢して奥さんの酔い覚めの水でもぐっといかがですか。

方針に妻は片目をつむらされ　小野克技

夫唱婦随は決して民主主義に反していません。日本は日本です。片目をつむらされてもそれは夫の思いやりと思えばよろしい。この句はそれが目玉になって川柳になりました。

この世のなさけ銀杏が散っていることも　小出智子

巨木にぎっしり葉を付ける。それが銀杏の姿です。秋になればそれが一挙に散ってしまう。それもこの木の特徴です。掻き寄せるのに苦労して一家総出となります。困った木だとこぼしています。しかしこの木からも一期一会を強く感じます。作者もこの姿を〝なさけ〟だと喝破しました。

川柳太平記(92)

川柳の群像

石原青竜刀

東野大八

石原青竜刀といえば、すぐさま川柳非詩論の提唱者というイメージに結びつく。

「詩は詠嘆である。宇宙万象に対して、客観たると主観たるとに論なく、主情的に、即ち感情に訴えてそれを諷詠することである。非詩即ち川柳は宇宙万象に対して主智的に、即ち理智に訴えてそれを諷詠する。古人はこれを非常に適切な言葉で説明した。即ち俳諧における「寂び」「しをり」は詩の本領であり、川柳における「穿ち」は「諷刺」である」(「川柳大陸」昭13年9月号〝詩と非詩に就いて〟石原青竜刀)

終戦直後、川柳界を騒然とさせた「川柳すげ傘」(昭21)、「川柳祭」(昭22)各誌上に提起した川柳非詩論は右に示した論旨を敷衍したものである。彼は生涯この川柳の信念で一貫した。この点を判りやすい論旨で示そう。

「〝松原の茶屋はいぶるが景になり〟この古川柳の対象となった風景は、ホトトギス一派にいわしむれば明らかに俳句のものだ。それを川柳は全然別の立場からこのように「うがち」の表現をしている。うがちは機智(ウイット)であり詩(ポエジイ)ではない。

このような非詩的な文学もあるということを発見した川柳の創始者は世界的—といってわるければ日本の文化史的にいってまさに敬服さるべきである。惜しいかな川柳界に人無きために、明治以来の復興運動者の一人としてこの根本に気づかず、なまぬるい「人情詩」に低迷して今日に至った。彼等は川柳のレーゾンデートルに考え及ぶ力を持ち合わせなかったという外あるまい。(略)

古今集の歌は非詩的であるが、川柳のうがちがない。むしろ狂句的である。おそらくこの時代は、まだ川柳的想念とそれを表現しようという欲求が弱かったのであらう。徳川時代になって人智の進歩と思考の複雑化にともない、従来諷詠の対象とならなかった部分の非詩的想念を表現する欲求が強まったのに応じて、ここに独立した詩型、すなはち川柳が発生した。この発生理由がとりもなおさず川柳の存在理由であり、今日においても変らないものである」(「川柳祭」昭22年12月号)

「川柳は他の詩のごとく抒情でなくまたイメージを求めるものではない。社会批判を諷刺リアリズムによって端的に表現し、読者に対して否定精神の共感を求めるものである」(「人民川柳」昭和28年復刊号)

因みにこの「人民川柳」は、昭和24年5月に創刊され、青竜刀が代表格となり、昭和32年25号で廃刊するのだが、二年後の昭和34年青竜刀は諷詩人同盟を結成し機関誌「諷詩人」(A5タイプ印刷不定期刊)を発行した。この誌によって青竜刀は「民族短文芸の最高峰をめざし、俳句でも川柳でもない〝柳主俳従〟の〝諷刺短詩〟の確立」を意図し、川柳呼称の改称をめざしている。(青竜刀の死去で54号で廃刊)

ともあれ今にして男えば川柳非詩論は諷詩への終着駅の道程にすぎず、非詩に捉われす

ぎる非詩論争は結局青竜刀の意図する〝諷詩運動〟の綱引、旗振り役に似ていた。

青竜刀は本名石原秋朗。明治31年11月7日広島県山県郡大朝町の生れ。拓大支那語科在学中、俳句に関心をもち血涙堂の俳号で俳誌「石楠花」に入会、臼田亜浪門下となる。大正9年拓大卒と同時に外務書記生で天津総領事館勤務となり、ここで大正12年天津川柳会の柳誌「ホコリ」の同人となり、柳号を傾倒する「三国志」の豪傑関羽の手にした〝青竜力〟を拝借して命名した。

簡単に大陸での職歴を記すと、大正13年天津領事館を退職、国際運輸を経て昭和3年満鉄に入社。大連・奉天勤務のあと昭和13年満鉄が華北で設立した華北交通本社勤務。昭和13年華北事情案内所長（華交の系列）となり終戦。昭和21年5月帰国東京に落着いた。

この大陸時代には、アジア学生会拓大代表で親友高橋大洋（京津地区切っての右翼の大物）と中国皇帝践趾の霊山泰山に登り「われ興亜の捨て石とならん」と誓った青竜刀22歳の感激が、その後の大陸における国士的活躍の素地となった。満鉄を背景に中国軍閥の各将領との交友や、華北交通設立の裏面史で暗躍。また旺んな文筆活動を展開。石原巌徹・石敢当・林君彦の筆名で大陸ジャーナリズムの一翼を担って活躍。このことは「満鉄調査部」草柳大蔵（朝日新聞社刊）にも紹介されている。また京劇通でも知られ「京劇読本」（昭17朝日新聞社刊）があり著書多数。

一方川柳面では、天津から大連に移り「白頭豕」「通」同人となり、のち高橋月南らと「青泥」を発刊しその主幹となり、それを99号で廃刊し「川柳大陸」を興し、終戦間際には「東亜川柳」にも関与し、北京では北京川柳会を和田黙然人らと結成、周作人を動員する「北京川柳展」を開催し敗戦を迎えている。

「俳句は臼田亜浪先生の依嘱で「石楠花」の大陸系列誌「山楂子」を作ったんだが、柳俳二足のわらじではシンが疲れたものよ」と戦後東京で再会の際語っていた。水府、三太郎を大陸へ招いたり、俳句の師臼田亜浪のほか、菊地寛、直木三十五、横光利一、佐々木茂索らを大陸に招いての案内役を買うなど、こうした因縁から、敗戦引揚後、文芸春秋社に就職する余得を生んでいる。

戦後は人民川柳や諷詩人の発刊で苦労したほか、よみうり時事川柳、大法輪など幾つかの柳壇選者をつとめ、川柳非詩論を掲げた新しい短詩型のジャンルとしての諷詩運動は底を割れば孤独な川柳人ともいえたが、その川柳人としての識見はなかなかのものだった。

「〝諷詩〟は本来川柳という名の不当に対する改称を目的としたもので、内容的にも〝柳主俳従〟の短文芸としての最高峰をめざしている。今後の川柳の在り方についていえば、やはり伝習派と革新派とに別れて進められるものと思う。伝習派はあくまで大衆にわかりやすいものを求め、革新派は現代詩のひそみにならって難解を意とせず感覚的な作品を求めていくだらう」（「川柳公論」26号）

このインタビューを最後に昭和54年9月5日肺炎のため死去した。享年81。

青竜刀最後の刊本は、昭和43年に出た「諷詩竜沙吟」である。B6判三百八十頁の大冊。

「これは遺書のつもりである。「諷詩」を題に掲げたのは、多年俳句と川柳を共にやってきた結論として、この二つの短詩文芸は将来一本になるべきものと考え、そのあかつきにおけるジャンル名をぼくの現代の思考力から「諷詩」以上の適称を得られないまま、そうすることに暫定したからである。（略）将来「諷詩」として民族短詩文芸の最高峰になるべきだというぼくの悲願は、すなわちこの〝遺書〟を刊行する目的につながる」（序文）

—「考えない葦」ジグザグとせめられる　青竜刀
—夢ならぬ過去や黄土のしみいくばく　〃

★次号は「福田山雨楼」

誹風柳多留廿六篇研究（二十三丁）

石田成佳・大屋六郎・八木敬一
鈴木　黄・石田晋一・南　得二
小野真孝・本多正範・多田　光
故岡田　甫

384　**すみ〳〵て大工をそしる畳さし**

石田成＝新築の家、大工、左官の仕事も一段落し、最後の仕上りとなる時点で畳屋や建具屋がはいるわけで、畳屋が仕事をしながら、腕の悪い大工をけなしている状景をよんだ句。

畳屋は角で大工をわるく言ィ　八〇・19
さやあてをするハ大工と畳さし　拾六・10

大屋＝賛。「チェッ腕の甘え大工野郎だ」というところ。職人というのは、他人の仕事を良くいわない傾向が現在でも多いようです。

本多＝賛。俗諺「畳さしは大工をそしる」の利かせ。鈴木勝忠氏によれば、本句「隅々で大工をしかる畳さし」（享保十五、桜がり）の焼き直しである、としている。

多田＝賛。

岡田＝同。

385　**買ぞめハ輪餅りのある四ッ手也**

石田成＝輪飾のある四ッ手については「……四ッ手にわかざりのかかっている時分から、きつねのまいこむ時分まで、三ッぶとんの上におしづまっていりやあ……」（『通言総籬』山東京伝、天明七）とあり、買初は正月初めて物を買うこと。

本句は正月二日は新年吉原の封切り日、一般には「買初も七福神が序幕也」（一〇七・18）で宝舟のすり物等を買うところですが、四ッ手の買初で吉原行を即ち女郎の初買を暗示した句。

八木＝賛。買初は、ここでは女郎をその年始めて買う意味で正月二日。

多田＝賛。

岡田＝同。

386　**卒都婆下りませひ出ませひと六位**

石田成＝謡曲「卒都婆小町」をよんだ句だが、『謡曲と川柳』が本句を鸚鵡小町と混雑した句と指摘しているように、六位とあるのは僧でなければ句意が通じない。

南＝謡曲「卒都婆小町」には勅使は登場しな

い。六位は勅使の従者ですし「下りませひ出ませひ」は、お白洲での呼出し言葉を真似たまで「鸚鵡小町」の前景の場面の句ではないでしょうか。「鸚鵡小町」には卒都婆の場面がないが、単に背景の混同だと思います。

本多＝南説賛。「六位」については、厳密に官位にとらわれる、或いは特定の人物を想定しなくともいい。勅使の従者を漠然とさしたくらいに考えるべきでしょう。川柳では特定の人物を限定せず、勅使あるいは公家を詠む場合漫然と「六位」で表現する場合があります。

多田＝どの謡曲と限定しなくてもよいのではないか。要するに小町の晩年のことと取り、宮廷の使者として最下級の延臣の六位が来たと思っていた。

岡田＝本多氏説、賛。

387 **ひつふの雪見鰒汁をくって出る**

石田成＝雪見と鰒は冬の景物で川柳においては、これらを合せてよんだ句が多い。匹夫は一人の男、身分のいやしい男の意。本句は鰒を喰おうとする決意を匹夫の勇（『孟子・梁恵王下』「小人の勇、血気にはやるばかりの小勇）にかけて雪見からさらに、吉原へ出掛けることを含んだ句作と思います。

白たへの中をかすかにふぐの声　二五・27

おそろしきものの喰たき雪の空　一〇・35

雪の鰒あに一命をおしまんや　三九・26

多田＝賛。**岡田**＝同。

388 **生酔を芸子にたのみ寝かし付ケ**

石田成＝「芸子」は踊子に同じで、踊子の名称は元禄以前からあったもの。

句意は、字の通り。

生酔のつつかひ棒にげい子なる　九・1

多田＝賛。**岡田**＝同。

389 **古今ンの難渋ぬり箸て小だゝみ**

石田成＝「小だたみ」は「海鼠湛味」と書きなまこを薄切りにして酒または酢に漬け、山葵または海苔などで喰う酒の肴であり、また山の芋を摺り掛け清汁を澱いで喰う場合もある。

これを箸でとりあげるのは、正に古今の難渋で、現在でもなまこの酢の物など酒席の肴にでると箸でつまむには苦労するもので、そのことを単に格言めかして詠んだ句。

古今の難渋ぬり箸でそうめん　一五九・22

多田＝賛。　**岡田**＝同。

390 **一寸した船中をする茅場町**

石田成＝茅場町「鎧の渡し」の句。

鎧の渡しは距離が短い。だから渡し舟に乗る間もなく、極く気軽に乗ったことを一寸した船中をすると詠んだもの。

大屋＝謡曲「船弁慶」のワキの詞句「ああ暫く、さやうな事をば船中にては申さぬ事にて候ふ」を用いたものでは……。

南＝船弁慶の詞句に関係ないと思いますが。

多田＝賛。**岡田**＝同。

391 **骨ふとな源氏荷なひて水を汲**

石田成＝「源氏」は奥女中の異称、源氏名を持っているから。奥女中の大部分はか弱い感じを与える女性だが、同じ源氏名を持つ御端下はそれとは対象的に体格もよく、いかにも丈夫そうな姿を骨太な源氏とよんだものでしょう。

源氏名ハいいが荷ないで水をくミ　第一・41

多田＝賛。

たもん兵衛か大八をいひこめる　傍四・25

岡田＝賛。

江戸川柳に現われた八百屋お七 (六)

阿達義雄

(六) 八百屋お七の封じ文文と江戸引廻し

現在、残っている江戸川柳は、万句合のものと『柳多留』その他の柳書のものとを合して、概算二十数万句位のものと思うが、それ等の中には、お七江戸引廻しの句は見当たらないようである。

それで、江戸引廻しの事に触れるために、観点を少し変えて、今度は専ら八百屋お七の紋を詠んだ句だけによって、お七の事跡を辿ってみよう。すなわち、紋章的角度による、八百屋お七事件のクローズアップである。

したがって、既述のものと多少重複するが、これはこれとして、一つの纏りを持つものである。

天和二年十二月廿八日の大火で焼け出されて、駒込吉祥寺正泉院（実は指ヶ谷町の円乗寺とも言われている。）に、本郷成願寺門前の八百屋久兵衛が独り娘お七を連れて避難した際、寺小姓の吉三と恋に陥り、家に帰ってからも、恋慕のあまり、火事にさえ遭えば、また正泉院に行かれるものと一途に思い込んで放火をして、その罪に問われ、翌年遂に火刑に処せられたという巷談は、文学や演劇の好題目となり、幾多の作品となって広く世に知られるようになった。

これにちなんで、川柳紋章句として現れてくるのは、八百屋お七の封じ文である。そして、その源流は歌舞伎芝居であって、歌舞伎において、お七の役をする者が「丸に封じ文」の衣裳をつけるようになったのは、若女形嵐喜三郎が江戸に下り、宝永の頃、中村座にいて、『けいせい嵐曽我』で、江戸で初めてのお七を演じ、大いに好評を博したのに端を発している。

柳亭種彦の『還魂紙料』上巻によると、

「寛永五年の春、堺町中村座にて嵐曽我と題する狂言に嵐喜代三郎と言う女方阿七の役をつとむ。是阿七がことをかぶきになすのはじめなり。かの喜代三郎が紋、丸の内に封じ文なるゆえ、今において阿七の狂言に此紋をつくる。宝永五年は阿七が二十七回忌なり云々。」

其の時のお七の衣裳には喜代三郎の替紋たる丸に封じ文を附けて大当りを取ったので、以後は、縁起を祝って、お七の役には必ず丸に封じ文紋を用いるようになったのだと言われている。

このお七の封じ文紋は、既に奥村利信の漆絵に於ても見られ、又、宝暦元年二月、中村座に出した河東節『恋櫻反魂香』の初めの文句の中にも、

へ春の夜の夢ばかりなる手枕に、かひなく立ちし嫁が萩、三葉四葉に殿造り、その主様の行方をも、聞かん便りの封じ文、かの雁がねも今ここに思ふに実にや恋の闇……。

とあり、これはお七が吉三の絵姿を燃くと、その煙の中に吉三が姿を現わしてする所作に

合せる曲である。

尚、この河東節の正本絵表紙には、佐野川市松の扮したお七の衣掌に、丸に封じ文紋が書かれている。

道楽な紋久兵衛は付けて着せ　（八五・37）

元来、八百屋久兵衛の紋は封じ文ではなく嵐喜代三郎の当り芸に由来することは、前述の通りである。然し、川柳子は、舞台上のお七が封じ文の紋のついた振袖を着ているのを見て、「久兵衛親父、よくも恋文を想わせるような封じ文の紋のついた振袖を着せたものだ。だから娘が色事をするのだ」というような意味で、右の句を詠んだので、此の封じ文紋も娘のお七がつけてこそ相応しく、意味深長な処がある。もし、これを堅法華のお七の父親が付けたら興ざめものであろう。

久兵衛が付けりゃおかしい結び文　（宝暦一二・梅3）

久兵衛が紋は何だか知れぬ也　（拾遺九・9）

お七の紋が封じ文なることは、芝居によって誰しも知っているものの、さて、舞台上の或は実際の八百屋久兵衛の紋は如何となると殆んど覚えている者はない。

或は黒餅紋とも言われているが、華やかな役者などは、こんな紋を付けることは好まなかったであろう。それでは、実際において、お七の父の紋は何であったか。どうも「何だか知れぬなり」と言った方が江戸庶民一般によく当てはまりそうである。

前表は火中と書きし封じ文　（一一八・24）

紀海音の浄瑠璃『八百屋お七』の中にも

「我が夫戻せ、さなくば寺へ連れて行け。出家落して生きながら、火へ陥っても大事ない。会ひたい見たい行きたいと、形も乱れ気も乱れ、乱れ心のあどなくも、家が焼けたら寺へ行き、又逢ふ事もあらうかと、ふっとついたる出来心云々」

とある程だから、封じ文の中へも、灼熱の情熱をこめて「主の為なら、たとえ火の中、水の中云々」などと書いたことが、或は「読後、この文を火の中へ役じて下さい」などと書いたことが、既に火あぶりになる前兆であったというのである。

封じ文火へくばったで名を残し　（六七・25）

芝居流に言えば、封じ文紋の振袖を着て火刑になったので、八百屋お七の名が高くなったのである。

但し、『笑委記』によると、江戸市中を引廻された時のお七の装束は

「肌には羽二重、白小袖、甲州郡内の碁盤縞、浅葱の絲にて縫ひたる定紋の三つ柏五つ所に、桃色の裏つけて、一尺五寸の大振袖上に重ね、横幅広き紫帯、二重にきりゝと引廻はし、うしろにて結び止め、襟ぎは少しおしくつろげ、たけなる黒髪島田とかやに結ひあげ、銀覆輪の蒔絵したる瑇瑁の櫛にて前髪を押へ、紅粉を以て面をいろどり」

とあるから、此の姿のままで、天和三年三月廿八日（墓表には廿九日とある）、鈴ヶ森で火刑にされたのであろう。これで見ると八百屋久兵衛一家の本当の紋は三つ柏であったらしい。

それにしても、八百屋お七の最後を飾る衣裳は、なかなか素晴らしいもので、うっかりここだけ読んでは、結婚式の時の衣裳かと思われる程である。

さて、次は江戸文芸に現れたお七の火焙りと、その頃の火刑の実際である。

〔十一月号の正誤〕

□38頁の中段の中頃の「同じく金でも」は「同じく釜でも」と改める。

□39頁の中段の五行目の「支える」は「与える」の誤。

（つづく）

同人特集

私の一句

（到着順）

考古学に情熱をもやしている夕陽　八尾市　西尾　栞

草に寝て雲を追い　岡山県　直原七面山

体験は背なの丸さにしもてある　松原市　小池しげお

知恵の輪は解けないままに凡夫婦　出雲市　園山多賀子

夫婦箸揃えて遠い坂がある　守口市　羽原静歩

生きているなと遅い朝を起き　東大阪市　森下愛論

赤のれん潜れば本音喋りだし　兵庫県　藤後実男

輪に入れば輪の楽しさに包まれる　尼崎市　黒川紫香

大原女の声は変らぬ京の四季　桜井市　河合茂雄

コピーしたような息子が気をもませ　岡山市　時末一灯

歳月の重みが孤児を悲しませ　西宮市　津山冬子

八十の手習い白寿遙かなり　岡山県　二宗吟平

忘己慈他心開いている和顔　倉敷市　藤井春日

逃げ道が浮かんでからの酒の数　島根県　西村早苗

足音を待つ耳だけが起きている　堺市　高橋千万子

春風に可愛い嘘の二つ三つ　西宮市　奥田みつ子

バカヤローと言う日本語に愛があり
巣づくりが終ると人間眠くなる
筒切りの鯖にも脂のってくる
壮大なゴミとなる日の地球かな
新しい眼鏡を誰も気が付かず
箸の向き茶碗の位置のわらい声
神さまの見える暗さになってくる
拾い読みの知恵で世間甘く見る
大波の打つ日よこころ海に似て
月冴えて余生ゆたかな趣味に生き
善いことをした日は悪い人も褒め
岩摑み風雲に堪え生きる松
カットグラス酒を入れると耀きだす
退きながら次の攻め手を模索する
したいこと山積みにして寒い部屋
情熱の詩人が降りた無人駅
一本杉は村へ帰って来いという
お年玉やっても孫には鬼にされ
いい時もまたありますと妻が言う

綾瀬市　大山と金
八尾市　大路美幸
奈良市　宮口笛生
松原市　谷垣史好
大阪市　岡田ふみ
倉敷市　水粉千翁
大阪市　正本水客
泉佐野市　阿萬萬的
西宮市　林はつ絵
西宮市　朝山千世子
伊丹市　樫谷寿馬
守口市　野呂右近
芦屋市　竹中綾珠
大阪市　河井庸佑
米子市　雑賀美世
八尾市　宮西弥生
名古屋市　越村枯梢
岡山県　岩道博友
高知県　曽我部裕

頬被りのまま握手求めてくるソ連

地団駄を踏んだ足跡だとわかり

老いの目に六月の女清楚なり

干し竿に二男一女が揺れている

転轍機ここから先は赤字線

気が遠くなるほど翅を休めてる

指先が空しさ知った自動ドア

名所ではないが故郷の花の色

老骨が折れぬ程度にタクト振る

手伝えば喜ぶ嫁で有難し

達磨さん起き上れない喜寿が来た

しあわせを他人に言わぬ軽い自負

高飛びをする気か蜘蛛が糸を吹く

貧乏神にも育ててくれた恩がある

着飾って見ても淋しい影法師

川柳莫迦ここにあり胸張って言え

落ちこぼれなどは知らない青い空

しあわせが一杯とっくり妻がもつ

今年から日めくりにして日を惜しむ

仙台市 **川村映輝**

倉吉市 **奥谷弘朗**

羽曳野市 **佐野白水**

西条市 **片上明水**

倉敷市 **野田素身郎**

富田林市 **岩田美代**

柳井市 **弘津柳慶**

東大阪市 **崎山美子**

倉敷市 **小幡里風**

岸和田市 **清野こう**

貝塚市 **行天千代**

米子市 **小西雄々**

西宮市 **野呂鵜汀**

大阪市 **中川滋雀**

七尾市 **松高秀峰**

倉吉市 **渡辺菩句**

大阪市 **町田達子**

高知県 **松岡三吉**

寝屋川市 **堀江光子**

見て見ないふりで他人は行き過ぎる
騙された女が眠る禁猟区
向うさまが何さまだろが我は我
その昔貧農搾取の塀朽ちる
ボケ防ぐ本買ったまま日々多忙
墓参してきれいな涙置いてくる
一年をつなぐと弓のようにそる
道草をしたので深い彩が出る
夜に咲く花を待ってる長い午後
振りむいて取りかえしのつく歳でなし
おとうちゃん負けたらあかん竹を踏む
闇無限ぶつかったとき考える
爪を切るいつか妥協の音になる
好きだから話がもめる菜種つゆ
けったいな服も他人の娘さん
娘のように春の琴弾く老女なり
真実を吐いて空しさだけのこり
自適同士ひと月かけて返事書く
一年草の誘う豊かなもてなしよ

今治市 **長野文庫**
美祢市 **安平次弘道**
青森市 **工藤甲吉**
出雲市 **原独仙**
岡山市 **井上柳五郎**
交野市 **山本テルミ**
米子市 **田中亜弥**
宝塚市 **丸山よし津**
富田林市 **藤田泰子**
八尾市 **宮崎シマ子**
島根県 **堀江芳子**
島根県 **堀江正朗**
尼崎市 **西村かすみ**
倉吉市 **淡路ゆり子**
兵庫県 **遠山可住**
高槻市 **田崎あき子**
笠岡市 **松本忠三**
町田市 **竹内紫錆**
米子市 **林瑞枝**

秘めている本音あなたになら吐ける
かるがると蟹太陽を差し上げる
さらさらと風紋描く砂の思惟
にわか雪肩を抱かれる期待感
黒髪を返して下さい玉手箱
垢のついた人生ゲーテ語りかけ
四つ角で待ってたような風に逢う
気忙しく余生へ落ちる砂時計
夢一つ一つ生き恥さらさんか
幕切れはせめて優雅に女です
埋れ火は明日の風が掘り起す
委された椅子が孤独になっている
橋いくつ渡れば逢える雪女
魚にも鳥にもなれず海に佇つ
見物は皿落ちるのを待っている
連れ添うて同じコップの水に馴れ
あぶり出しの炎に罪が浮いて来る
リンゴ紅玉母の位牌に香が移る
残照に浮かれる独楽を咎めまい

島根県 細木歳栄
島根県 小砂白汀
島根県 松本はるみ
島根県 北川民子
島根県 藤原鈴江
大阪市 天正千梢
京都市 都倉求芽
尼崎市 伊藤春子
竹原市 山内静水
高石市 浅野房子
平田市 久家代仕男
枚方市 二宮山久
出雲市 石倉芙佐子
鳥取県 新家完司
大阪市 鍛原千里
尼崎市 角野かず子
京都市 山本規不風
弘前市 波多野五楽庵
橿原市 岩井本蔭棒

扱かれた無念をはらす撥捌き
終章へ光あつめた私小説
お互いに空気になっていた月日
サクランボ自由に食べていいですか
三角も四角もあって丸く住み
小説が粋に仕立てた法善寺
がたがたのおもちゃ叩けば動きだす
幸せは嬉しいことで眠られず
父が居る凧がやっぱりよく上り
まっとうにつくと遠くへ響く鐘
付合いが下手で噂の外に居る
平凡な女になって泣いている
疲れたら海の話をして欲しい
燃えている女当世眼を伏せぬ
腰帯の重さを何気なく洩らす
ゲートボール軍隊調の声を聞く
花吹雪常楽我浄と舞いおおせ
小走りの癖貧乏がそうさせた
人生に彩り添えてゆく出遇い

大阪府 坂口公子
米子市 寺沢みど里
和歌山市 坂部紀久子
和歌山市 福本英子
和歌山市 内芝登志代
岸和田市 芳地狸村
岸和田市 原さよ子
大阪市 神夏磯道子
今治市 越智一水
大阪市 山根いつを
大阪市 黒田真砂
桜井市 岩本雀踊子
和和歌山市 神平狂虎
福岡県 横地雅風
米子市 政岡日枝子
豊中市 上田登志実
和歌山市 福井桂香
今治市 月原宵明
大阪市 本間満津子

雨が上ると鏡の中に子はいない　竹原市　小島蘭幸

一歩又一歩涎の乾くまで　唐津市　田口虹汀

私小説目次は俺もできている　唐津市　仁部四部

中流のメダカは群をなしたがる　唐津市　久保正敏

鷺草よあなたの父母の話など　寝屋川市　柴田英壬子

可愛さがまだ残ってる膝小僧　松原市　佐藤藤子

骨壺に涙は容れて欲しくない　鳥取県　林露杖

起承転結七言絶句唐詩選　豊中市　田中正坊

他人なら九十五点はやれる妻　宇部市　平田実男

弱虫の野良犬雨が好きである　豊中市　安藤寿美子

自動ドア開かぬ母になり給い　大阪市　中西兼治郎

園児の手摘み草一杯夢一杯　大阪市　長谷川春蘭

雲悠々どこにも見えぬ落ちこぼれ　大洲市　米澤暁明

老眼鏡素直な位置に置いてない　藤井寺市　児島与呂志

膝の猫おまえは私の孫じゃない　寝屋川市　宮尾あいき

主役にはなれぬピエロに徹しきる　大阪市　西田柳宏子

心斎橋うぬぼれ鏡ふところに　大阪市　柳原静香

晩年のふっくら炊ける栗ご飯　大阪市　小出智子

針仕事亡母のことばに無駄はない　大阪市　鈴木節子

聴えたら長い電話をするだろう　松原市　北野久子

戦後四十年まつり手のない英霊も出　大阪市　市場没食子

花電車乗る人もまた花となる　富田林市　和田維久子

きもの展着物の似合う顔がない　高知県　赤川菊野

笑いぐせお面のように外せない　西宮市　草刈堕駄

虹にもの言ってる純粋精神　倉吉市　渡辺菩句

寄り添うて暮せば温い隙間風　宝塚市　吉田笑女

平凡なくらしの中の酒さかな　高知市　川竹松風

絵葉書に軽いめまいの女文字　寝屋川市　稲葉冬葉

孫九人それはそれはと羨まれ　寝屋川市　岸野あやめ

あんな奴と言うてた人と添うている　大阪市　大塚節子

新ら玉へ夢とロマンは持ち続け　島根県　大森孝華

哀しいと何時も鳴りだす母の弓　米子市　菅井とも子

表彰へ妻ひかえ目な位置にいる　鳥取市　小林由多香

庭のない人も立寄る植木市　唐津市　浜本義美

舌にのるほどに小さな人でなし　唐津市　浜本久仁於

二度咲かぬ花に時どき水をやる　鳥取県　土橋　蛍

二度とないチャンスのぞかないでお月さま　出雲市　吉岡きみえ

信じれば必らず福はやって来る　和歌山市　山川克子

さりげない言葉で怖いことを言う　米子市　石垣花子

干潮のテトラポットは隙だらけ　姫路市　大原葉香

胃袋に男は勘忍噛み砕く　和泉市　西岡洛酔

取巻の方が弾んでいる受賞　大阪市　川口弘生

床柱撫でて新築かみしめる　加賀市　細呂木魯木

お祝の杯すこし大き目に　呉市　林野甦光

ひまわりの下で貧乏くじを引く　倉吉市　広本文子

壁に耳ありチューリップの首がのび　奈良県　宮川古都路

正直な夫婦でいつも残がない　松江市　恒松叮紅

自画像を少し明るく塗りかえる　大阪市　金井文秋

蔵月が夫婦を水の様にする　熊本市　有働芳仙

かけ込み寺の門を叩いている男　尼崎市　春城武庫坊

神様が下さるように水が湧く　尼崎市　春城年代

どん底が想い出となる日を信じ　大阪市　江城修史

薬玉を迂闊に割れば核になる　倉吉市　渡辺独歩

有線の流れる中で歯を抜かれ　大阪市　松尾柳右子

光るものはずしいちからやり直す　大阪市　津守柳伸

喜びをすこうし貰う藍の古布　大阪市　杉本智慧子

紙屑になってスターが一人消え　八尾市　山下みつる

猫好きと聞きこみあげる親近感
嫁ぐ娘へ父の空しいお立酒
父消えて天は椿の花ざかり
風を呼ぶ手をふところに入れている
道一つゆっくり夫に添うてゆく
生国も仕事も知らず趣味の友
妻君が艶ぶきん役を相つとめ
めでたい日迎えて老母に役がない
笑い袋が迷い子になった風の街
親切な風はフォルテの音を鳴らす
八起き目で綴る私の回顧録
翔んでいる女で苦手な家事雑事
かき舟が恋しくなった霜の朝
秋茄子を上手に炊いた亡母しのぶ
欲しいとは言われなかった母子家庭
荒城の月歌い出す城の跡
女坂ラストチャンスを燃え盛る
虫干しに秘蔵の版画色褪せず
胸底にボロも錦も貯めている

西宮市 杉浦婦美子
大田市 藤田軒太楼
米子市 澤田千春
堺市 藤井一二三
和歌山県 天満三千代
和泉市 岡井やすお
倉敷市 本田恵二朗
鳥取県 中原汲香
鳥取県 中原みさ子
鳥取県 中原諷人
呉市 槇田英詩
姫路市 萩原みね子
姫路市 丁坪サワ子
姫路市 越田みつ子
姫路市 松浦輝月
姫路市 増田とし
姫路市 植村客遊子
大阪市 坂本仙吉郎
富田林市 田形美緒

三ヶ日だあーれも来ない福寿草　京都市　松川杜的

偏差値はよいがタオルがしぼれない　尼崎市　奥山美智子

一文も無けれど寝釈迦堂々と　大阪市　西森花村

逢えそうで今日はやさしい眉を描く　和歌山市　西山幸

わが青春ゴマも摺らずに悔いもなし　岸和田市　福浦勝晴

己が罪洗う聖書が読み辛い　羽曳野市　中村優

君が代の君を素直に読み給え　大阪市　北勝美

柏手をふたつ重ねる身の証し　米子市　林荒介

歳取りて漬物石もままならず　兵庫県　深山健二

パレットにまだ赤があり青があり　岡山県　白岩文衛

みだれ咲く萩の憂いをきいてやる　富田林市　藤岡花梢

親娘三人三角形に今日も昏れ　和歌山県　寺田裕美

芸の無い鳥です軒の下が好き　倉敷市　小野克枝

犬の行くままに合わせている散歩　寝屋川市　高田博泉

倖せなリズムのんびり妻の里　河内長野市　井上喜酔

終章へ女房の笛が鳴り止まぬ　兵庫県　辻文平

鍋でこと足りた思案の阿呆らしさ　寝屋川市　里小路

グーチョキパー運命線は別にある　松原市　玉置重人

立ち消えにレールが錆びたまま続き　岸和田市　高須賀金太

ローソクの炎ぐらいは妻燃える　岡山県　土居耕花

生きて行く義務が僕にもあるらしい　大阪市　神谷凡九郎

油断したわけではないが出た白髪　寝屋川市　平松かすみ

素通りがわかれば怖い家がある　新宮市　大矢十郎

ゆるしあうと秋空が澄んでくる　米子市　青戸田鶴

無事な顔見るまで母は起きている　川西市　氏林洋敏

戻れぬ道で死ぬほど好きなひと偲ぶ　和歌山市　松原寿子

両の手をあふれたものは地に還す　大阪市　西出楓楽

負けて勝つ勇気黙って茶を入れる　鳥取市　森田熊生

海に出るまでに笹舟救わねば　米子市　茂理高代

けもの道皮の一つも残さない　米子市　光井玲子

シルクロード古都の歴史を砂が埋め　鳥取県　森田布堂

無事着いた電話は学資代のこと　高槻市　辻白渓子

出刃包丁器用に研いで雪化粧　富田林市　板尾岳人

朝夕に城を拝める街に生き　和歌山市　野村太茂津

寅歳の妻もいつしか猫に似る　藤井寺市　笠原吸江

一人から一人に還り冬を待つ　近江八幡市　前川千賀子

多喜二忌や骨の髄まで二月なり　八尾市　高杉鬼遊

笹に吊すあさきゆめみしゑひもすと　米子市　八木千代

鏡照り照りて花嫁はわが娘　豊中市　橘高薫風

黒川紫香選

秋だった私のほほを撫でたのは
本心を伝えるペンが乱れてる
夕焼けをカラスが急ぐわたしも急ぐ
ペンを持つ言いたい事を書いている
黄蝶よ酔っているのかひらひらと

竹原市　信本博子

めでたさは家族が一人増えた初春
門松が子の絵でドアに貼ってあり
正月をGパンで行くバイトの娘
炬燵からあごで指図は面憎い
千鳥足美人の肩を借りたがり

熊本市　宇野昭代

時効にはしない女の記憶力
とまり木へ上役下役ご同役
その先は聞くまいママの細い首
産声が重い空気を吹きとばす
幻想の衣きせようお月さま

富田林市　田原久子

みかんころころ笑い上戸の手を逃げる
打ち返してこない会話の席を立つ
こともあろうに閻魔を誑かす
一緒に死のうねと指きりの数嘘の数
口紅がうまく塗れない失意の日

藤井寺市　赤木和子

三面鏡の奥に広がる冬景色
皿割ったぐらいの罪は着てあげる
喪が明けて弱い女を脱ぎ捨てる
負い目があって目深くかぶる冬帽子
冬の寺赤いヒールが脱いである

尼崎市　福田礼子

脱線をポケットベルが許さない
煩悩を捨てる写経へ心澄む
一人住む気楽と不安同居する
娘の見合い妻若返る染小紋
お座敷でどじょうがはねる安来節

東予市　小山悠泉

八尾市　高杉千歩

お揃いで何処へと問われ口ごもる
我が家にも英霊在わす神ならず
ベレー帽今日は絵描きの血がさわぐ
本当の話へ誰も寄って来ず
コーヒーの底に沈めた誘い文

西宮市　紀市郁栄

人の群れピカソもゴッホも分らない
便り読む飯場で冬雷聞いている
人妻と心残りの星を見る
鍵っ子がカナリア飼っている救い
年賀ハガキ寂しいことに買いそびれ

岡山県　山本玉恵

さり気ない素振りがたまらなくさせる
義理堅い父から届く送り状
声きけば逢い度いばかりの炎の女
嘘一つ作ってのぼる縄ばしご
一合の酒で天下を取る夫

大阪市　清水康恵

置きざりにされているのはティーカップ
言い訳をだまって聞いているグラス
冬の雲ひとりの女についてゆく
ポケットに温い話を入れておく
約束を守ってくれる椅子を買う

名古屋市　藤井高子

蕾とは謎火のような花も咲き
野仏の私語から晴れる冬の旅
傷ついたハートが笛の音に吸われ
さいころはすぐ振り出しへ逃げたがる
あのねのネ女二人のティータイム

熊本市　永田俊子

真実がまだ見つからぬキャベツ剝ぐ
妊って月育つ夜の春の曲
鳳仙花自己満足してはじけ
うゐのおくやま越えて来ました坐りだこ
人情の風が左遷をあたためる

熊本県　大川幸子

決めた道只ひたすらに走るだけ
占いを信じ一日棒に振る
途中下車等は知らないレール敷く
秋の夜を本と眠りに落ちてゆく
人恋し秋の夜長をもてあます

熊本県　高野宵草

ボール追う子等へ非情なバラの垣
手をゆるめすぎたら凧がおちはじめ
マニュアルで出来ぬ職人芸の自負
威張っても糸が引いてる奴凧
相槌をテレビに打って孤独な日

熊本市　北川一進

不釣合とははたの瞳のヤキモチさ
定時制夜の電車を賑やかし
来客へ猫ゆうゆうと膝をとり

カセットを真ン中にした慰安会
吊皮が揃って揺れる終電車　尼崎市　田中晴子

灯明のうらに隠してある願い
なに不足ないが夫のきれい好き
足音が小さくなると風が吹く
人様が拾えば捨てたことを悔い
飾りない指で冷たい水が好き　長岡京市　木本如洲

孫にだけ甘い財布をもっている
天女舞うすこし淫らな雲に乗り
紙テープ波で無情に名残り切る
夢捨てた尼に嵯峨野は優し過ぎ
裏町でこころの温い猪口を持ち　米子市　茂理高代

声くれる菩薩さがして語り合う
誰となく手を振る山の頂きで
別れたくないから共に我慢する
ロボットの弱味は赤い血が出ない
一番星待って待ってて馬鹿になる　尼崎市　丹下玉子

告白のチャンス南天の実が赤い
岩海苔を拾う足許波が噛む
計算が少し狂うた子沢山
つけボクロ舞台に出る度変えている
浮世絵の切手を貼って愛告げる　京郎市　松川芳子

カラフルな薬がそむく日の不安
空席が沢山あって迷う席
口ぬぐう女が聞き耳立てている
食欲の秋にそむいて病んでいる
ライバルの祝杯受ける喉仏　富山市　舟渡杏花

手の甲で拭う涙のうしろ向き
凧の糸切れてかすれる子守唄
遠近のメガネで余生見えますか
灰皿がうごいて商談風をよび　今治市　野村京子

指切りの愛を信じるレモンティー
懺悔する爪のマニキュア剝げている
そして秋女が爪を研いでいる
裸婦の絵に画廊の風を甘くする　久留米市　鶴久百万両

雪おんなの情け裏切るのも男
二十五時間あなたと住める森が欲し
母病んで孝の一字を胸に積む
懺悔する鬼を傀儡にしてならぬ　佐賀県　寺中三枝子

千羽めの鶴はあなたの彩で折る
指眼鏡で見つけた君の優しい瞳
なぜこうも素直になれるひとに逢う
寝息きく近さに愛は萌えていた

熊本市　黒田　緑

さわやかなにおいの中の発車ベル
シャッターを降ろして今日を締めくくる
見たい絵が急かす美術館の道
夜に掃く箒に今日の些事も消え

吹田市　井上照子

釣り池に暇もてあます顔もあり
首のしわかくして深い衿を着る
派手に皿割って溜飲やや下がる
フルムーン眼鏡同士で地図さぐる

和歌山市　桜井千秀

安定剤飲まずに話しけりがつき
枯すすき風の煽てに身構える
企てはまあまあ吹雪止んでから
拠り所欲しいと思うぼたん雪

高槻市　笠嶋恵美子

真実は一つ南天の実の紅さ
裏の無い男で少し物足りぬ
稲妻のようなひらめき高笑い
ほんとうの事は知らない葱坊主

羽曳野市　吉川寿美

合掌の手からこぼれる罪の数
とも綱をといて男に広い海

柳友秋山シメ子さん叙勲

晴れやかな友の叙勲へ菊香る
秋霖や独りはひとりの音で聞く

尼崎市　的場十四郎

手のうちを読まれているから逃げている
秋の夜を一人部屋にはしたくない
母さんのおにぎりうまい運動会
コスモスは天気予報を聞かず咲き

大阪市　上田柳影

追伸に本音を書いて悔いている
貰ろてきた小犬が隣でよく遊び
さわやかな目覚めがあった旅の窓
父の引くレールに乗った縄電車

唐津市　山口高明

結末は知らぬ雲間のお月様
捲いた捻子弛む女の部屋に居る
借金は無いが祭の頬被り
漫談が好きな男の話下手

滋賀県　安田志津

合せ鏡のような夫婦にあこがれる
風の向き素早く見抜く風見どり
ペアを編む娘のリズミカル春ごたつ
涙ぐむ女心にある打算

高槻市　河瀬芳子

石橋を叩く夫居てよく眠る
八等身のモデルの服が欲しい秋
おしゃべりが聞こえる深夜のオモチャ箱
お調子者の小指が指切りして困る

西宮市　松本一郎

二人来てしばしの無言虫の寺
自分史を作家気どりで書く余生
フルムーン誰が妬くのか雨続く
コーヒーと紅茶に分かれ妻と飲む

尼崎市　児玉歌子

六甲を登り切ってるにぎりめし
三度目の裏切りを聞く泣きぼくろ
思惑の通り相手が踊らない
逃げ道を作り相手を黙らせる

兵庫県　森脇和子

編棒へつぶやき多くなる夜長
掌を合わす母のうしろにいる安堵
花時計甘えてみたい人を待つ
マト少しはずれて憎めぬお人好し

兵庫県　東浦砥代

糸電話切れてしまった白い髭
溜息をついて鏡が閉じられる
愛さめて自分が馬鹿に見えてくる
温い絵を探しに独り旅に出る

岡山県　千原理恵

和解してつづきの夢を買い戻す
花屋まで情を買いに行く女
モナリザの絵よりも妻がありがたい
赤門はくぐっただけの歴史もつ

広島県　田村新造

古里は雨下駄はいてひとまわり
曼珠沙華咲き乱れてる墓の道
顔見世は京の師走を触れていく
筆供養筆焼く煙天高し

桜井市　前山美恵子

明日の夢考えている枕元
騙すより騙されていて刺がない
救われるおもいで冬の陽を浴びる
めでたしめでたしそんな絵本をよっている

唐津市　浜本ちよ

彗星のように尾を引く離婚沙汰
アンコール無いのにマイク離さない
喜寿にしてまだ失わぬ好奇心
悪友が愚痴つれて来て飲んで行く

西宮市　秋元てる

太鼓判押されて不安増して来る
花をぬらし私を濡らし通り雨
雨の日は赤いコートの明るい娘
峰々に雪が来て姉再婚す

鳥取県　土橋はるお

赤い羽根美人がつけて呉れました
富士山の裏で札束積んでみる
ロボットが鏡の前に立っている
長話してやれやれと腰あげる

愛媛県　石手武

波の谷海女は呼吸を整える
無駄骨の踵斜めにちびてくる

三ヶ日めでたい貌で雑煮食う
それらしきアリバイ作る朝帰り
岡山県　小林妻子

母さんの味が続いて祭り寿し
頑張って握る拳がかたくなる
嫁がせて今日から重い父の靴
末っ子の船が錨を巻き上げる
兵庫県　脇田米朝

語尾にごし内心ちょっぴり覗かせる
フライパン男を上手に裏返し
ゴマ摺って男うだつが上がらない
サラリーの入る手前の火の車
河内長野市　大西文次

誕生日一本多くつけてくれ
夕飯のかわりに酒を飲んでおく
歩道橋の上でゆっくり立話
歩が金になって苦労が又増える
尼崎市　野瀬昌子

父母の愛たしかめる文を見る
一人ではしゃべる術なし受話器取る
回転の速い話に感心し
移り気な女で何時も模索する
尼崎市　吉永伊三郎

ライバルが息せき切って抜いて行く
不器用に生きて天寿を支えあい
正直に歩いて月に褒められる
起立して以下同文の賞を受け
広島市　望月はるひこ

みな敵に見えて開かぬ貝の蓋
仁義より力が欲しい流れ者
料金へ感謝を足した過疎のバス
日和見の別れが言えぬさようなら
青森県　福士トキ

誕生日嬉しくもない齢になる
止り木の男の背中恐くなる
優勝メダル孫が供えて仏間の灯
嫁して四十年わたしも欲しい努力賞
茨木市　堀良江

風冷えて家のない猫気にかかる
木枯しは見なれない葉をもって来る
年始ですおろし立てです靴の音
新しい鈴光らせて猫の春
愛媛県　西山えつ美

申告をごまかすほどの知恵もなし
修学旅行イメージダウン京の寺
大の字になるには畳よく似合う
ハレーすい星望遠鏡がほしくなる
西宮市　山田喜代子

冗談の好きな姑で明るい嫁
ご飯よと孫が呼びに来てくれる
青春の過去に浸るも独り酒
お湯呑みのぬくもり両手に虫の声

午後の客猫の話を長々と
別れぎわとても上手な人があり
名刺さえ呉れず遊びに来いと言う
待ち兼ねた休日にする事がない

守口市　森川まさお

かすり傷ぐらいで足をとられたり
見てくれと言わぬばかりに鳶が舞う
赤ん坊のもの言いたげなまなざしよ
めんどうで原価計算などしない

島根県　森山英子

糠漬が好きな女の抜き衣紋
下校時の車内手鏡リレーされ
丹念にするポケットの穴かがり
名園の苔を褥に散る紅葉

吹田市　山田里子

魚釣り釣った魚に睨まれる
出稼ぎへ赤いリンゴもついて行く
褒章もなく田圃で五十年
誰が何と言おうと亡母は愛し

青森県　波　ただお

ぺしゃんこの鞄が重い月の暈
虫除けの網戸に蠅が縋りつき
用済みのお守りのある小抽出し
賽銭の音を気にする脇仏

尼崎市　尾宮弘治

雨の日の一人芝居を猫が見る
振り込みで紙一枚の給料日
知恵ついてきたといたずら見守られ
鍋の底みがきつづけて無為無策

堺市　矢倉五月

旅に出て亡父のロマンに逢うてくる
温かい空気を連れた嫁がくる
柿一つ夢のつづきを追っている
これでもかトラの商法つづいてる

伊丹市　山崎君子

独り旅戻った妻の薄化粧
庭の柿色づく頃に孫の声
遺産わけ何のかんのと欲がふえ
又一つ友の灯が消え年の暮

静岡市　渥美弧舟

喜寿まではまさかの事は考えぬ
嫁はんのいない男に金はよう貸さん
補聴器が儲け話を聞き洩らす
運鈍根一つつかめず冬迫る

尼崎市　鈴木良征

ロボットにあとをたのんで休暇とる
恐い顔やさしい人形作りだす
夕食が四時とは腹も切なかろ（入院中）
松茸の香りも嗅げず中流か

尼崎市　山田保蔵

残飯の情野良犬朝も居る

弘前市　斎藤劦

分からせる授業に選ぶ色チョーク
灯油の値聞けば夜風が染みる帰路
落ち葉掻きちょっぴり残る秋惜しむ
米子市　光井玲子

人の世の汚れを知った赤とんぼ
どしゃ降りにたたかれながら生きてきた
少しずつ悪女になってたそがれる
大阪市　亀井円女

母の愚痴笑って聞ける年になり
親バカは子の無事一途に生きている
往きかえりおんなじ人の長話
竹原市　古田比呂子

昭和六十年只今育児奮闘中
馳けてくる二歳よ未来大きいぞ
玉砂利を母子で通る音ひびき
吹田市　栗谷春子

暖かさも今日か明日かの菊日和
朱にまじり少うし現代人となる
鏡からなぐさめられる冬の朝
堺市　桜沢あか里

とり入れの時期にはミレーの絵を思い
たまに行く店で楽しむ水いらず
絵の中の石にも坐る場所があり
尼崎市　木下義嗣

先方が黙ると催促言い出せず
見合席女の母がよく喋る
いささかの旅愁の味を筆にとり
尼崎市　小熊江美

まだコタツ出してないから早寝する
夕焼けて雲の峰だけ燃え残る
十二月ケーキ造りの講習会
出雲市　竹治ちかし

遮断機の向うに青い鳥が舞い
飲んで寝て妻の小言の子守唄
自画像を描けば嫌いな奴に似る
島根県　園山世似

義理堅く来たり行ったり秋祭り
乳母車互いに押して老いの連れ
初七日の鏡台に残した白髪染
鳥取県　田村きみ子

スクラムを組んで青春まっ盛り
日曜日あの娘はどこへ行くのかな
御先祖に供える白い飯を炊く
鳥取県　さえきやえ

ちろりで一本亡父といっしょに冬祝う
鬼とすもうとって平和な日が暮れる
地下足袋の唄がはずんで冬となる
弘前市　真喜内實

赤とんぼ茜の空にうつつぬけ
風がもう冬が来るぞと告げまわる
雨もよし二人の門出ぬれてから
岡山県　矢内寿恵子

忘却の彼方で風車カラフルに
蝶の舞知らず山茶花咲いて散り
明日は明日の風を吹かせる仕掛人
島根県　坂本雪路

秋雨を背に農婦一日終える
新調の靴のリズムに見送られ
出勤を見送り妻もアルバイト
竹原市　石原淑子

ときめきが残っていたのよ赤トンボ
あと十年母の無い子にしたくない
欲ばって老後のことなど考える
竹原市　岩本笑子

バター焼きのアサリ酒のカンも出来
日溜りが好きで毛糸など巻こう
早朝マラソン子はさっさと追い抜いて
貝塚市　池田寿美子

見栄捨てて女を少うしかくし持つ
グツグツと大根煮えて人恋し
シベリアで励まし合うていた絆
山口県　高崎雀声

カロリーの通りに食事して痩せず
朝早く弁当持ちで追い出され
子育ての話がつづく立話
京都市　森川春子

送られて産地と知った落花生
デパートのオープン先ずは食堂へ

山の家静かになると寒くなり
守口市　結城君子

九〇パーセント水と知りつつ大根買う
画家の視線たどればつわぶき咲いており
落日へ並びシャッター競い合い（舞子ビラ一泊）
高槻市　芦田静江

デッサンに後姿の熟れた女
秋桜束ねて持った人に逢う
たわむれる雲に芸術問うてみる
鳴門市　八木芳水

我が暮しゆとりの文字がまだ書けぬ
世渡りを下手と思わぬ律義者
横道を知らぬ真っすぐだけの父
豊中市　辻川慶子

木枯しが吹くと大根煮たくなる
つるし柿軒に並べて冬の音
藤色の好きな着物で初詣で
米子市　川上より子

人形が子供の部屋の主となる
宅急便母の訛りを連れてくる
暖い鍋が家族の顔をする
米子市　小村てい子

亡妹の声を探して歳時記を見る
真っ赤な花を咲かせて庭は昼寝する
銀の斧振ってあしたは魔女になる
羽曳野市　麻野幽玄

秋の陽やからすがかえるから帰ろ
雲行きの見られぬビルの谷に生き
賀状だけの絆それでも待つ元旦
出雲市　入澤壽恵

農繁期留守居の老母の遠い耳
遺族席白いハンカチだけ動き
簡単に値引きをされて買いしぶり
鳥取県　羽津川公乃

オセロゲーム夫ライバルに策をねる
ライバルの七癖知ってるゆとり持つ
呆け少し老婆日向の小豆選り
呉市　蔵重成人

背なの子の風車をまわす風よ吹け
プロの味盗んで欲しい妻を連れ
泣き虫で拳を上げぬほうが兄
岡山県　黒住美穂子

貧しさへ大輪の菊咲いてくれ
雨の朝バラ一輪を亡母に剪る
過去蹴ってまだ迷ってる風の彩
唐津市　相葉あき

眠ってた編棒起こす秋の風
四方山のニュース出湯で仕入れて来
城下町ブームに乗った歌も褪せ
出雲市　河原恵美子

彼の事父の背中に書いてみた
「ハイ」というこのふた言が言えぬ日よ

松は松杉は杉なり人生譜
寝屋川市　立床晴風

朝を掃く箒に遅刻見送られ
人形が与作を唄う腹話術
出迎えの孫抱き上げて父帰る
八尾市　鷲見章

石庭の声なき声に秋陽満つ
リハビリ室人形と来る車椅子
名園のカメラの視野にネオン塔
旭川市　朝倉大柏

ピクニックやっぱり母は握り飯
顧みて運の弱さを知らされる
可も不可もなく後列にいるくらし
出雲市　小玉満江

一本の松茸汁と飯に分け
親と子の爪切り猫がのぞき込む
一本の糸がセーターになる不思議
鳥取県　乾喜与志

平和憲法地球儀に張っておく
ささやかな儲けを割いて宝くじ
助け合いがあって師走の風ぬくい
岸和田市　藪野けい子

靴が鳴るからついつま先で歩く部屋
風鈴へやっぱりきつい秋の風
同窓会のたよりへアルバム出して見る
岡山県　伏見すみれ

振り向けば小走りに妻ついてくる
手をつなぐ二人に逆風こわくない
気がつけば虫の声さえしなくなり　新発田市　上鈴木春枝

平和な世旧札はもう忘れられ
シャッターへ背伸びしている貸衣装
困らせて反応見てる目がこわい　唐津市　筒井朴竜

清貧へ坐して本音の句へ意欲
上京の息子よ乾杯唐津弁
東京もんにゃ成るなと吾子さとし　唐津市　中山ふじ枝

秋の夜を話し上手と聞き上手
自殺とは人に弁解要らぬこと
老醜を隠す術なし道路鏡　今治市　月原つくし

母にまだ母あり共に泣いてくれ
がむしゃらに髪梳く絆とく様に
つるべ落ち案山子ポーズが崩せない　西宮市　飯森泰世

足音が近づく鏡そっと見る
都会の子芒を大事に持ち帰る
トラ狂と言われていても勝てばいい　尼崎市　佐藤美代子

タイミングが良くて小遣いもらってる
姑好み少し辛目のかやく飯
からっ風に男はうまく乗っている　静岡市　青柳金吾

高飛車に毅然と言った父が好き
病臥して意外な友の情け知る
満ち足りた暮しを顔が語っている　新潟県　高野不二

医者の一言で毎日が休肝日
借金も出来ぬ暮しも中流か
此の人が敬老会という元気　豊中市　小畑よし子

アルバイト料より多いお年玉
おおらかな顔で大仏殿を出る
法要がすんで再婚話くる　竹原市　古田鈍舟

食べ頃と風にこびてる吊し柿
秋しんとして鳴る土鈴の空しき
秋深し無策のままかとせかされる　徳島県　松田康次

遠来の孫と遊んで肩がこる
通過車の放送もなし無人駅
無人駅ホームの雑草伸びたまま　兵庫県　奥野テル

目を閉じて思い出を追う虫の夜
柿食べる種から童話喋り出し
両の手に余る喜び秋豊か　岡山県　杉本伊久栄

童唄花一もんめと風の私語
丹念に咲かせた菊に一人悦
乾燥機廻せば雨は上りそう

新宮市　山田平和

湯上りの素足と下駄にある色気
古都巡りポックリ寺も入ってる
言いたい事言ってしまった気が晴れた

八尾市　松下蕉露

立場では対立バーでウマが合い
今が底株屋すすめにやって来る
平行線あって国鉄安くなる

吹田市　西岡豊

故郷から指名がかかる舞扇
水割に燃えた女の瞳がうるむ
すんなりとまとめることに汗をかき

鳥取県　西川和子

寅年も中流の夢見て暮す
笑えない笑い話で恐くなる
日本語が読めぬ悲しい日本人

堺市　江辺天鳳

灯の影で待っているのは鬼だろう
最後には捨てる紙だがためてある
ヨーロッパから新婚電話する

岡山県　福原悦子

カレンダーめくって冬と深呼吸

兄さんは新調の服ばかり着る
立ち読みの子もふえている秋の風

泉南市　坂根流水

よそ者が作った郷土史村かざる
神無月神様るすで落葉舞う
秋の雲国会駆引俯瞰する

川西市　野村静雄

松茸を貰うて礼にうろたえる
あいづちを打つ哲学で勤めあげ
おやすみと誰にともなく言うてみる

大阪市　田中節子

切符いる遊具ばかりの遊園地
秋晴れや家で編物などしておれず
焼栗のはぜてのぞいておいしそう

奈良県　山村有佳

旅をしてお互いに知る年のこと
湯加減のあわぬ友との職場風呂
はらはらと湯舟に落ちる紅楓

和歌山県　森三枝子

ゆっくりとくどくつもりが酔っている
タコ焼きの指にダイヤのあった過去
繰り返し聞いていたのに又忘れ

大阪市　宇久はる子

過去語る老父の目元穏かに
特急も当分止る甲子園

ちょっと好きだからちょっといたずらし　指宿市　渡辺伊津志

感謝する気が作業衣を働かせ
子が居ればぜんまい仕掛けの蟬が鳴く
年とってからは小さな和に凭れ　岡山県　戸田種子

ダンジリにハッピ姿の孫可愛い
美しく老いたい祖母の薄化粧
秋晴れに菊花もかおる文化の日　鳥取県　乾隆風

貫禄にまけてはならぬ眼鏡かけ
エプロンが恋しい皿にお菜盛る
すきま風財布の底を見通しだ　鳥取県　太田幸枝

笑い上戸の盃へ浮く寅の貌
スタミナをつけて多忙の波へ乗り
不器用な舌で本音をポロリ吐き　鳥取県　津村八重子

神木も松喰虫に負けました
読みにくい孫の手紙で和を拡げ
大漁旗帰り海猫までさわぐ　大阪市　川原章久

壁に耳内緒内緒が突き抜ける
森林浴紅緑黄の永源寺
ホルモンの煙撒き撒きドヤの街　大阪市　渡部さと美

子の風呂はコマーシャルほど湯を流し
宅急便しばらくみかんとさつまいも
ぐち聞いてもらううどんの熱いこと　岡山市　河野青銅

海に立つ素足の父は頼もしく
順番を待つひとときの週刊誌　大阪市　稲本凡子

聞き上手きれいな嘘を聞き流す
ユニークな孫一人居て日々楽し　大阪市　横山為子

心音の高まり笑う聴診器
天高し立って見たかろ大仏さん　大阪市　大倉圭介

ファンレター皆仲良しの丸い文字
お三時を貰えば帰る小さい客　泉佐野市　大工静子

病院で縁談あった人に会い
愛犬にだけ嫁江戸っこで躾け　豊中市　一瀬福一

みの虫は夕日の中のシルエット
もうついて行けぬと妻の果し状　八戸市　島田昭治

金だけで済む話なのに金が無い
高楊子変な言葉を生噛り

理屈なし精農土と話す秋　高知市　北川竹萌

グラバ園残る夕陽に見疲れる　岡山県　後安ふさえ

真っ白に障子張り替え客を待つ

美術館わからぬままに見る名画　島根県　菅田かつ子

お隣の花だが咲けばうれしくて

どたん場の逃げ道だけは開けておく　鳥取県　福田あや子

みどり国体に寄せて

新体操えがおが技にあるゆとり

コレステロール減る頼もしさ鰯食う　橿原市　西本保夫

信じない事やって見るスリルめく

沈黙の中に遠ざかる唄がある　兵庫県　伊沢午郎

一泊の温泉旅行三回湯に浸り

湯の中のおなら鼻の先で爆発し　島根県　小田川智重子

せっかちな男でバスに乗り遅れ

底辺にいて頼もしい事を言う　大阪市　末永芙久枝

枯野にもおくれ花一つ咲いていた

味噌汁のゆげの香りで目が覚める　大阪市　今西静子

ひとりっ子へ手綱はいつかゆるんでる

肩書が付くと男はすぐゴルフ　大阪市　井上白峰

やはり京雨の祇園に妓の蛇の目

譲り合い空席のまま駅に着き　岡山市　中嶋千恵子

妻の留守あれこれ勝手が狂い出し

礼欠いて義理という字が重くなり　岡山県　池田半仙

趣味の友ライバルなのに息が合う

数ばかり増える盆栽持て余し　倉吉市　田中八太朗

免許証取らせばマイカーねだられる

感謝デーなどと商魂養を着る　藤井寺市　菊地繁男

切れた下駄下げて帰るバラス道

トントンと下りたところで発車され　富田林市　松本今日子

午後の顔合せ鏡の中に抱く

きっかけは萩の花咲く頃でした　愛媛県　八塚三五島

何か足りない男の側が温かい

考えが似てる親子で恙ない　堺市　小西小雪

庭の菊みんな曲って咲いている
荒れた手に苦労かけたと言う夫
高槻市　宮野四郎

苦労した妻が浮き立つ紅葉狩
緊張のすきを狙って出る欠伸
八尾市　椎尾公子

調子よくよんだ石段踏みはずし
愛犬のライバルと逢い廻り道
兵庫県　野々口ゆう也

寝た切りが怖くて朝の一万歩
老いらくの恋の道にも咲く野菊
高知県　山下登舟

善人の輪の中にいる車椅子
甲子園高校野球もプロも沸く
守口市　若林市郎

七輪の湯豆腐味あう南禅寺
手入れした分だけ目立つ菊の花
富田林市　片岡智恵子

子供の目まで低うなり話聞く
新世帯冠婚葬祭費に喘ぎ
茨木市　井上盛雄

黄金色稲穂収穫秋真中
馥郁な香りまだまだ夫婦酒
岡山県　後安江山

徳利を振って半分注文し
ゆっくりと煮込んだ味は母の物
鳥取県　横山房子

友訪うて白髪の数を笑い合い
反抗期へ親の絆をうるさがり
大阪市　服部頼一

禁煙が湯治場に来て又揺らぎ
公園の鳩にも老いをさげすまれ
益田市　里本たかし

叱らない父の積木が音をたて
公害の空からフェリー離してゆく
岡山県　松本元江

花言葉花のかれんに救われる
直立不動樹は幾年を立ちつくす
広島市　花田繁子

ヒイ孫に大きな大きな夢をかけ
半生の我慢に耐えて老いの幸
大阪市　堀口欣一

けさもまたかんころかんと夜が明け
東海道宿場栄枯を眼のあたり
大阪市　秋田茂

まんまるい膝になったねおばあちゃん
小包に甘いものまで入れる母
出雲市　小白金房子

指きりの孫の瞳はいきいきと
日曜日計画むなし雨の音

堺市　山本半銭

背をみせて妻さりげなくさぐり入れ
嫁いでも又手を替えてすねかじり

大阪市　山脇正之

チャンネルを変えても老後のことばかり
趣味合うて辞書引く役は妻の方

大和郡山市　岡田寿美礼

雑草のなかにサギ草麗わしく
老いの坂愛馬に乗って遠き旅

大阪市　多田せい子

長旅の疲れを癒す湯の香り
旅に来てお湯に入って花が咲き

鳥取市　若林一止

デザインは変えてもポストなぜ赤い
負け犬の背に落葉が降り注ぎ

大阪市　冨岡温子

行った地の名があるだけの旅土産
家計簿へ我慢してきた跡残し

和歌山市　三谷周三

母の字のコンクールめく名札縫い
案山子にもユニホーム着せ阪神狂

堺市　安西カネ

はるばると秘境の湯での夜は長し
萩の花手折りて亡母に見せました

岡山県　牧野秀香

出口からこっそり入る猫の足
夕陽にお寺の銀杏も舞扇

大阪市　橋本悦子

しみじみと秋を感じる虫の声
のぼりがま素朴な焼はだ立杭の里

河内長野市　植村喜代

雨やめば岩湧山も側へ来る
娘の絵掛けて娘笑い出す

大阪市　野村八重

何んとなく背筋のばすと若がえり
英会話はなして見たい習いかけ

高槻市　大池好古

優勝のカップ飾って母を呼ぶ
早咲きの菊花わけ合う友が居る

大阪市　北田秀月

虫さされキッスマークに間違われ
虫の声地底から鳴くさわやかさ

兵庫県　山崎亀男

湯タンポが今懐しい年になり
唄も出る話もはずむ露天風呂

大阪市　朝田晃世

大津絵は笑いとにがみのサスペンス
寅ブームあの手この手の商魂さ

大阪市　桝本蕗児

後家筋と言われて悲し昼の月

六十六ゲートボールにやまだ若い　泉佐野市　真崎浪速子

微粒子が真犯人を捕えてる

回数券祖母はせっせと初孫通い　大阪市　平井露芳

京都御所

菊の御紋古びた幕にある威厳

ファッションですと手袋指切られ　島根県　岩田三和

娘に贈るナウイ言葉の老春期

よその娘ならデイト気分か老春期　島根県　喜島ノブ

何んとなく自家製のもの食べたくて（病院にて）

余りにも次男の嫁がやさしくて　岡山県　富坂志重

鉢植にされて稼ぎに出た植木

北風にツイスト踊る濯ぎ物　豊中市　額田明吉

御所の庭小声ささやく異国人（御所特別拝観）

石段の数で汗ばむ金毘羅さん　奈良県　和田萬里

雨しずく満員電車はやめておこ

四季咲きのバラよ休みがほしかろう　大阪市　高森文子

新米と言われ見分けのつかぬまま

湯に酔うて孫につられてわらべ歌　大阪市　喜多佐津乃

児の寝息聞えなくなり別住まい

ちらしずし湯葉と三つ葉の香り添え　大阪市　山本炉斉

パチンコに行く暇もない老いせわし

湯舟には金も悩みも皆忘れ　米子市　宮本佳女男

訪れる困苦にチャレンジ出来る幸

良い奴が早逝してく世の無常　兵庫県　山崎敏子

我慢さす事もしつけの第一歩

湯の中で親子の会話はずむ時　新宮市　船越正

ダイエット一時中止の三ヶ日

父子酒夢にまで見て糖尿病　枚方市　二宮摂子

ジュニアの部

おこずかい値上がり反対　お母さん

雲あつめわたがしの国できあがり　枚方市　二宮正彦

お母さんパートに行ってぼくるす番

秋もいい家でゴロゴロ本を読み　桜井市　前山たかのぶ（5歳）

でんわせんどうしてこえがきこえるの

ぼくやまのこうあつせんがすきなんだ

—水煙抄—

秀句鑑賞

—前月号から—

渡辺独歩

水煙抄秀句鑑賞の役目を受けました。一月号担当という光栄を全身に受け止めながら懸命に作業を致しました。同人特集「私の一句」に比べても遜色のない句を飾ることが出来たと思っています。

妻の手が温くて旅に出られない　福田礼子

形骸化されたのか、と思っていた「良妻賢母」の言葉を拾った感じのする句です。旅は二人でするもの。一人の旅には得てして不純が匂う。「温くて」に小道具的効果が効いています。

愛の琴線鳴らして去った憎い風　永田俊子

何気無いひと言の風が流れて、胸深く張った琴線に触れたという。愛の波長で鳴る絃は、誰もが持っていて、一度は風を待っている。ゆきすりの風に終ろうとも。

絵本から私に似合う夢をよる　清水康恵

絵の中には夢や神話が棲んでいる。絵はある意志の伝達を目的にしているものだが、華美を競う絵は、神話くずしに合うと思われたのは好判断。絵解きがわかれば夢もふくらみます。

ときめきがこぼれた日から失語症　山本玉恵

ときめきは胸にたたんだ風船がふくらんでゆく時に覚えるもの。それが敢えなく萎んで歌を忘れたカナリヤになったとは。詩があります。七五調まで捨てたりはしないでしょうね。

愛してるなどと小指の悪だくみ　朝倉大柏

指切りの構えを持った小指には、有無をいわさぬ血の息吹きがあります。軽い眩暈は許しましょう。悪だくみを探るスリルは、あってもよいものです。

本庁へ叱られに行く靴磨く　渡辺伊津志

出る杭ではないのだ。本庁へ呼ばれても、胸を張っている夫の姿を描きながら靴を磨く。「叱られに行く」には微塵も暗さがない。古い言葉だが、そこには女冥利が動いているようだ。

石焼いも突然きこえ出して秋　栗谷春子

秋の訪れは人それぞれに暮しの中で読みとるものだが、「北国の春」では都会の季節は摑みにくいと歌詞にある。そんな時、石焼いもが突然秋を連れて来た。意外性の発見があった。

丸出しの訛が好きで花を買う　光井玲子

丸出しの訛が、とても気に入って花を買った。買われたその花は、行商にまだ日の浅い人のことを喋ったのであろうか。在所の名や人柄の良さは、訛が残して行った。

日めくりが痩せると亡父が顔を出す　さえき　や　え

日暦の残り少なくなった或る日に亡父の祥月命日がくる。瞼のなかの亡父が一年で一番身近に思える日。年の瀬も近く、作者も新たな年輪に包みこまれてゆく。

野仏を拝むどなたもいいお顔　安田志津

気の合ったグループの旅の一とコマか。散策のつれづれに野仏を囲む顔は明るい。「嫁いらず」を願う呟きも洩れてくるようだ。

スーパーで逢う先生はママの顔　灘尾民子

買物に夢中の先生の姿を教え子の目で見ている。普通のママと全く同じ顔が、先生にもあったことの発見が鮮やかだ。

窓の月にそっと素顔を盗まれる　菅田かつ子

イヤリング揺れると恋がしたくなる　黒住美穂子

ファックスで旅のスケッチ送ろうか　池田寿美子

かけ直すメガネの先に良い便り　北川一進

愛染帖

橘高薫風選

笠岡市　木山遠二

気構えを又また変えて寝たっきり
寝たきりの抛り出した掌に猫の頤
寝たきりの窓べにも菊文化の日

米子市　八木千代

朱い帛紗に傷を包んだことがある
はぐれ鬼ひとり遊びになれてきた

大阪市　小出智子

彩褪せてゆくかのように年をとり
十二月ボタンをしかと付け直す

岸和田市　古野ひで

わかれ来て涙ぬぐわず足袋を脱ぎ
限りある命いとしく人愛す

羽曳野市　麻野幽玄

初春や今年を任す床の虎
核兵器なくす話を核を背に

岡山県　土居耕花

ふる里は母のお臍のまん中に
税務署へ行く血圧をみてもらう

吹田市　後藤火鳥

金のことといつしか妻の自然流
木枯しに夫婦吹かれて嶺越える

東大阪市　津雲一

無量寺に蘆雪を訪ね虎と語る
凍滝の上に神仏並び建つ

米子市　小西雄々

背広ではドンキホーテになりきれず
禁断の実が月光へ熟れていく

鳥取県　新家完司

それぞれの守備つつがなく温い飯
神の目で見る星空と街の灯と

米子市　茂理高代

この坂を登れば何か解けるもの
刺子刺す指に千人針偲ぶ

高槻市　笠嶋恵美子

初鏡おんなの戦はじまりぬ
山茶花の垣根を越えてくる噂

山口県　高崎雀声

お言葉に感涙むせぶ臣女優
米余り落穂拾いは鳥まかせ

和歌山市　桜井千秀

人さし指時には自分に向け直し
信じ切る祈りに手立てありますか

守口市　森川まさお

くだもの屋まん中にある富有柿
赤い鳥居くぐって椎の実を見付け

和歌山市　西山幸

凩の夜は羽目をはずしてみたくなる
賛美歌も祈りも遠くなるばかり

島根県　堀江正朗

窓の風雪のワルツをながしそめ
盲人の箸にも好きと嫌いあり

島根県　堀江芳子

雑巾もせっせと従いてきてくれる
服比べ指輪もくらべいい年で

和歌山市　神平狂虎

風に恋しておんなは雲になっていた
二転三転結局酒の手に堕ちる

唐津市　浜本ちと

もじずりの花斜めから書き上がる
女とて浮名を流すことは好き

唐津市　中山ふじ枝

かげで聞く嫁の不満はなるほどネ
切干大根(かんころ)を切って時雨る雨女

西宮市　松本一郎

お互いに少々難あり四十年
栄光のテープは切れずそれもよし

大阪市　上江洌勝子

返りこぬ若さ糠味噌まぜかえす
愁嘆の落葉が肩にからみつく

青森市　工藤甲吉

初霰これが飲まずにおれますか

唐津市　田口虹汀

お供日のしまい祝いか妻の客

唐津市　松高多駄子

里の味醤油も味噌も自我を持つ

寝屋川市　堀江光子

秋の朝わが青春の女優の訃

大阪市　松尾柳右子

獅子舞はどこへ行ったか自閉症

近江八幡市　前川千賀子

月光へ秋のルビーは燃えたがり

伊丹市　樫谷寿馬

曼陀羅に眼鏡をかけたのが一人　鳥取県　土橋　蛍

真実と嘘すれ違う冬の雲　守口市　結城君子

バス待ちへ野鳥一声ずつ啼けり　豊中市　奥田満女

拝観料安うて徽の仏さま　米子市　林荒介

花屋から約束ごとが多くなり　八戸市　島田昭治

なんとなく今朝は神棚に願いなし　宝塚市　丸山よし津

犬褒めて犬の一日聞かされる　川西市　野村静雄

確かなる歯ごたえとなる子の議論　吹田市　西岡豊

二番手で向い風さけ北叟笑む　唐津市　筒井朴竜

雑草を踏んで蹟く紳士靴　唐津市　仁部四郎

九時半はもう寝ています月給日　唐津市　久保正敏

遠い夢買いたくて行く古本屋　唐津市　山口高明

花いちもんめ鬼が欲しがる眠らぬ子　富田林市　岩田美代

齢のこと誰も言わない新春の雲　藤井寺市　赤木和子

大学の風景なるを君知るや　福岡県　横地雅風

菊花展尺貫法で咲かしてる　寝屋川市　岸野あやめ

施主の名を女とのみの水子塚　富田林市　藤田泰子

さむざむと一人で入る湯を満たす　尼崎市　伊藤春子

秋深く厨ひとりの音で暮れ　芦屋市　竹中綾珠

伝説の妖気を雨月物語　和泉市　岡井やすお

健康が第一と水臭い味　大阪市　坂本仙吉郎

八白の寅千里まで走ろうぞ　平田市　久家代仕男

人生の節目の先の交叉点　藤井寺市　福元稔

きなくさくなったとハレー見てるだろ　米子市　政岡日枝子

古井戸をいつものぞきに来る男　米子市　寺沢みど里

同じ痛み分かち合ってる冬の屋根　米子市　沢田千春

歳時記やビルの谷間でみる野菊　川西市　松本ただし

八っ橋が湿って僧兵食べ残し　新発田市　青戸田鶴

振り向くともう夕暮になっていた　岸和田市　武俊春

宝石箱しまった嘘のひとりごと　西条市　片上明水

食べて出た柿を隣も剝いてくれ　島根県　小砂白汀

地蔵まで水子あやしにいく女　河内長野市　植村喜代

駅下りてコツコツと皆無口　広島市　望月はるひこ

シートベルトまた威張られるものが増え　愛媛県　八塚三五島

海外赴任妻は英文科を出てる　今治市　月原つくし

国訛り助走路長くながくとる　岡山県　清水悠貴女

負けそうではずしもならぬ鬼の面　長岡京市　山田葉子

ネクタイにまだ脱サラは話せない　高知県　山下登舟

善人の輪にかこまれて車椅子　広島県　田村新造

うなずけばピアスきらめきつけぼくろ　岡山県　黒住美穂子

人恋うる哀しさ安らぐ菊日和　米子市　田中亜弥

いろは坂バスが器用に降りてくる　米子市　林瑞枝

小鳥の墓にちょこんと花が挿してある　大阪市　西森花村

さるすべり僕の頭を撫でてみる　米子市　菅井とも子

菊明り月にも薫り届けよう　島根県　榊原秀子

ここからは帰りたくない夕陽かな　堺市　桜沢あか里

合掌をしてから蓮は花開き

鳥取県 乾 隆風
みの虫よお前も俺の冬に似る

橋本市 岸本木魚
リフォームに俺の頭はどうだろか

岡山県 池田半仙
教養もヒスの歯止めをしてくれず

久留米市 鶴久百万両
離婚劇認めるひとと責めるひと

和歌山市 福本英子
年の暮一針ずつを刺す情け

佐賀県 寺中三枝子
何故なぜなぜ女に耐えることばかり

益田市 里本たかし
いろいろな理由でバラの香が消える

岡山県 岩道博友
解釈を右派と左派とに変えて読む

今治市 矢野佳雲
油断してならず疑うてもならず

吹田市 栗谷春子
奈良の秋阿修羅の像へもう一度

和歌山市 山川克子
不始末をしてからですよ低姿勢

岸和田市 原さよ子
決勝戦相手をほめる余裕持つ

羽曳野市 吉川寿美
不整脈神の裁きと受け候

和歌山市 坂部紀久子
柿の実が私の届かぬとこで熟れ

大阪市 朝倉利義
妻よはよ治れよ俺が老いぬまに

八尾市 松下蕉露
流行は裾を長くし短かくし

今治市 野村京子
母の瞳に企みのあるはずがない

羽咋市 三宅ろ亭
二等兵の流した涙忘れない

大阪市 桝本露児
泣き笑い芸の苦労も三枚目

大阪市 川原章久
もう一つ残る難物息子の荷

尼崎市 西村かすみ
三代目店を英語の名に変える

島根県 喜島ノブ
うぬぼれは鏡のせいでないらしい

竹原市 信本博子
ビールより話に酔ったクラス会

高槻市 河瀬芳子
碧い眼の託鉢一点を凝視て歩き

米子市 光井玲子
欠けもせずこの飯茶碗いとおしく

岡山市 川端柳子
ほほえみに春夏秋冬あるものか

岡山市 井上柳五郎
生々流転雲は流れるひとり旅

和泉市 西岡洛酔
夫唱婦随妻カンパスの裏に居る

松江市 竹内寿美子
螺旋階段に小花敷きつめ君を待つ

島根県 大屋秋峰
終焉の幕を繕う糸が切れ

草津市 久保和久
フルムーン松江にきめた訳をきく

岡山県 千原理恵
飲み食いの話ほんとに罪がない

弘前市 真喜内実
音がみな冬を呼ぶ笛かなでてる

寝屋川市 宮尾あいき
菊人形去年の老菊師見当らず

出雲市 竹治ちかし
賢い娘よりも可愛い娘を望み

弘前市 波多野五楽庵
木枯しや浄土の母は寒がりや

高槻市 笠松高子
十三夜私の傷は癒えぬまま

新発田市 上鈴木春枝
赤ちゃんにだけはみんなが素顔見せ

＊

投句先 〒560 豊中市中桜塚三丁目13—15
橘高薫風宛（ハガキに3句）

NHK川柳募集

課題「写真」 選者 **橘高薫風**
締切 **1月10日**
（ハガキに三句以内）
投句先 大阪市東区馬場町3—43NHK
大阪放送局〝さわやか広場〟係
発表 1月26日（日）ラジオ第一放送
午前11時5分から

奇遇

紀市郁栄

人にはいろいろな出会いがあり、別れがある。そして時として奇遇が生れる。

昭和四十二、三年頃の緑の季節であった。ある日、わたしは阪神電車の甲子園駅で、だしぬけに「班長」と呼ばれてびっくりした。班長というのは、旧陸軍の下士官に対する敬称である。終戦当時、わたしは独立部隊の本部で嘘八百をならべて、功績名簿を作成していた。軍曹であった。

本部にいたカメです、と彼が名乗ってくれるまで、誰であったか思い出せなかった。

彼は福島亀という上等兵で、本部下士官室の当番兵であった。「亀」というのは本名をなんと読むのか忘れたが、わたし達下士官は素直で実直な彼をカメと呼んで、可愛がっていた。

それは昭和二十一年の真夏、鹿児島発、青森行きという日本列島を縦断する復員列車で別れてから二十年余りの歳月が流れていた。

彼は大阪で家庭を持っていて、遊園地の阪神パークへ、子供を連れてゆく途中であった。

その奇遇以来、絶えて久しくわたしは奇遇らしい出会いに、めぐり会うことはなかった。

ところが去る九月二十三日、お彼岸の日のことである。わたしは墓参に帰郷のため、近鉄上六駅から、十一時十五分発宇治山田行きの急行に乗った。奈良県の桜井市という小さな町が、わたしの古里である。

上六から次の停車駅が鶴橋、国鉄環状線と交差している。いく人かの人が乗りこんできた。そしてわたしのやや斜め向いの席に座った熟年の女性と顔を見合わせて、お互いに驚きの目を見張った。昭和四十五年頃、職場でわたしの管理下にいた保健婦であった。当時彼女は大阪府の豊中市に住んでいた筈である。一別以来、十五、六年の空白を埋めるのに、鶴橋から、彼女が下車した「大和高田駅」までの二十数分間では、はなしがつきなかった。彼女にまつわるエピソードを、長い間、わたしは忘れることはなかった。

十年に一度、いや二十年に一度あるかないかの奇遇が、その日重なって生じようとは、全く夢のような出来ごとであった。

生憎、朝からの小雨であったが、二人の姪を連れてお墓へ着いた頃は、幸い降りやんでいた。彼女達には祖父母と父、わたしには両親と兄、浦野家累代の先祖が静かに眠っていた。

その墓地で、なんと西田柳宏子さんに会ったのである。それはまことに思いがけない出会いという外ない。驚いた二人が、やあ、と言葉にならない感歎詞を吐いて、両手を握り合っていた。

「浦野家?」と柳宏子さんが怪訝そうに訊かれた。「そうなんです。わたしの本名は浦野で、紀市郁栄というのは、ここに眠っている親父と御袋の名をとって、雅号にしたんです」「そうですか、紀市というのは珍しいお名前だと思ってました」「ところであなたは?」

「わたしは大阪ですから、墓も大阪にあるんですが、ここに親戚の墓があるんでお参りに来たんです」

そんな短かい会話だけで別れた。一週間後には、栞主幹の祝賀川柳大会で、お会いするに決まっている。

お参りをすませて墓地の参道を出ようとする時、また柳宏子さんに出会った。「奇遇ですなあ、仏さんのなんかのお引き合せかも知れまへんな」そう言ってすれ違った。柳宏子さんは、年輩のご婦人を連れておられた。或いは奥さんであったのかも知れない。

川柳と註について

松村総七郎

A、はじめに

「私の川柳」（昭和60・2・15　拙著　北海道川柳研究会発行）について、川柳誌「ますかっと」（岡山市　昭和60・7・1　No.493　P9）にご紹介を頂いた。そしてその評に、「（句）のすべてに註が添えてあるのが気になる」とある。

また「川柳塔」（昭和60・10・1　No.701　P72）に、前川千賀子氏が「自己の表現法」として、ある陶器の作品展で、その作品に、詩を書いた陶板が添えられているのを見て、「陶器も絵画も自己表現であり、本来ならばその作品によって自分を表現しなければならないはずである。なのに、その作品に言葉を添えるというのはどういうことなのだろうか」と述べておられる。

氏の論は、川柳の言葉の使い方の大切なことを諭しておられるのだが、氏に代表されるこのような警告は、当然に、「私の川柳」の註の誤解にも繋がることにもなるので、この機会に私の考え方を纏めておきたいと思う。

B、分析

1、まず「ますかっと」の「私の川柳」評について

この註は、入選句に後でつけたもので、註をつけた句が入選したのではない。「私の川柳」は、もともと、自作の権威を世に問うたものではなくて、数年間の入選作を一つの歴史の歩みとして、註をつけて楽しむために作ったものである。「句集」となっているが、これは一種の川柳随想あるいは、川柳漫歩ともいうべき性格のもので、一般の句集や名句選とは趣を異にしている。選者そのものを、斯道の権威が批判されることは自由にあってよいと思うが、註がついているというだけでおかしいといわれると、私は戸惑いを感じる。

こういった川柳の楽しみ方も、世に一つや二つはあってもよいと思うのだが……。

2、次に前川千賀子氏の「自己の表現法」について

これについては、この道の大家がいわれることだけに言葉に重みがある。川柳のように極限にまで思想を凝縮した短詩に、やたら註をつけ説明を加えるということは、原則としてあってはならぬし、名句といわれるもののほとんどが、言葉の付属品を持たないことは事実である。名句といわれるものは、五・七・五のその言葉だけで読者の感動を無限に深め共感を無限大に拡げるものだ。しかしこれはあくまでも理想的な原則であって、時と場合によっては例外もあり得る。

例えば、

前記「ますかっと」の、大森風来子氏選「百花集」（P21）に次の句がある。

中国の旅

帝陵の豪華苦役の民想う　　広畑ハツ子

これは、句自体としてもなかなか味わいが深いが、「中国の旅」と付記することによって、中国を旅する人と、旅路の状況、歴史的背景が脳裏に浮かんで鑑賞の味わいを一層深くすると思う。

また、尾藤三柳著「川柳作句教室」（P175）に、次の句が紹介されている。

追悼句

萩咲けば思い出される咳一つ　雀郎

（「咳一つ」は、剣花坊の句）

これなども、句を読んだだけで、その背景をじっと見詰めさせるものを人に与えるものではあるが、これを追悼句として観念し、註を読むことによって、追悼の感慨を一層深くすることができるのではなかろうか。

さらに「川柳研究」（昭和59・12・15　No.420　P22）に次の句がある。

献句

師に問えば静かに富士を曇らせる　胡里

説明（要約）

三太郎先生十七回忌墓参吟行、昭和59・11・25　富士霊園にある三太郎墓詣で。当日曇時々晴

■各地柳壇追加

むらくも川柳会　藤井　明朗報

見舞客　笑顔で送る快復期　正朗
ほどほどのぜいたくわが家の灯がぬくい　芳子
衰えぬ人気のつづく玉三郎　峰雪
白鳥に国境はなし冬の海　鶏生
人形が鳥になる日を待っている　秀子
ぜいたくは暖房の中風邪もらい　孝華
ぜいたくな暮らしの中にある不満　とみ子
初なりを鳥にもわける柿の彩　文子
ひとりいる篭の小鳥もなかぬ春　みどり
空を飛ぶ鳥になりたい空しい日　一葉
ぜいたくの裏には貧乏神が住む　林蔵
ぜいたくを言わずこつこつ積み上げる　武衛
ぜいたくと思うダイヤの光る指　はる代
香りよいおでんに辛子よく効いて　百代
巣立たせて古巣にわびし夫婦鳥　富子
ぜいたくに馴じめぬ老いの目をつむり　吉野
生れつき器用で老いの恙なし　ヤス子
帰省する子のように来る渡り鳥　マサコ
久しぶりおでん肴に友と酌む　光子
絶頂の人気へ笑顔の少女歌手　蚊声
人気歌手まねてちびっ子歌合戦　ゆき子
食欲の秋へはかどる台所　幸子
コマーシャル人気選手でよく売れる　雪路
食欲をそそる色どり母の知恵　よし美
人気集中主婦の目がむく特売日　昌子
食欲が出過ぎてアロエで調節し　三津江
食欲の秋に持病の胃が痛み　克子
食欲をそそる料理は母の腕　三喜子
食欲の秋へ孫等の食い盛り　なつえ
紐おとし宴は小さな主役から　保子
松茸の香りも忘れ秋はゆく　八重子
秋の空傘の離せぬ旅の日々　寿
北風が顔をだしては秋を追う　節江
七五三主役はパパの背で寝息　ふさえ
柿むいて隣とお茶の小半日　藤子
ぜいたくを追うて暮らしの赤信号　明朗

これも大家の作だけに、これだけでも一つの詩として楽しませて頂けるが、献句と書いてあり、若干の説明があるので、先達を偲ぶ人たちの美しい姿が浮き彫りにされてくるといってよいと思う。

C、むすび

まず、私の書いた川柳随想あるいは川柳漫歩の類いは「川柳と註」の本質論にはなじまない。

次に、一般論に話を戻すと、

川柳は、その文化的性格からして、一般的普遍妥当性をもつべきものであり、川柳が、その思想を極限にまで高め凝縮した短詩型である以上、それだけで通用すべきものである。註や説明をそれに加えなければ人の共感が得られぬような性質のものではない。しかし、時により、状況により、註を付し、説明を加えた方が味わいをより深くする場合がある。そのような場合は当然許される…、というより必要だといわねばならぬ。ただし、註や説明が許される句は、哲学、文化性、詩性の上で、独立句としても人の鑑賞に耐えられるものでなければなるまい。（少なくとも、初心者としては、そうなるように努めるべきだろう）註や説明に安易に頼ることは自戒すべきであると思う。

川柳たけはら

〒725 広島県竹原市竹原町田中

山内静水方

明けましておめでとうございます。
本年は創立30周年並びに合同句集〝竹の里〟第二集
発刊記念川柳大会を９月14日に開催致します。
よろしくお願い致します。

会長　山内静水
副会長　小島蘭幸
会計　時広一路

森井菁居
三宅不朽
古谷節夫
古田鈍舟
古田比呂子
岩本文晴
岩本笑子
佐藤令子
石原淑子
信本博子
山内房子
ほか一同

頌春 1986

川柳わかやま

橋本・紀水川柳会
由良・川柳ゆら

トラトラトラ
サインは既に出してある

岩倉 天彦　黒田 秀雄　中根 勇太　南 恵美子
内芝 登志代　後藤 正子　中山 修　守内 恭子
牛尾 緑良　坂口 公子　中井 栄美子　森脇 善太
上杉 信秋　坂部 紀久子　長尾 ミチ子　森 三枝子
大野 武太　染道 佳明　西山 幸　山路 佐代子
大越 一千代　垂井 千寿子　西口 忠雄　山川 克子
柿花 紀美女　田中 悦子　野村 きみ　山田 久子
片岡 茂一　田中 輝子　平井 照子　横垣 忠
神平 狂虎　谷口 信子　福本 英子　若宮 武雄
岸本 木魚　寺田 裕美　福井 桂香　野村 太茂津
北山 凡太　天満 三千代　堀端 三男
黒瀬 登紀夫　冨上 光代　細川 稚代　外一同
桑原 道夫　中島 正博　松原 寿子

初歩教室

題 ― 松 ―

阿萬萬的

新年号の課題に松ということになると、門松になるのですが、
世につれて情緒廃れる松の内　姿洋
で、あとは
絵に描いた門松アパートのドア飾る　喜代志
味気無しコピーですます松飾り　姿洋
絵に描いた門松だって幸をつれ　周三
松活けて床の間だけはお元日　よし津
だが、次の句にはほのぼのとした暖かさを感じました。
若松を活けて今年も恙なく　八重
（水引の金も目出度く松を活け）
若松を生けて黒豆まだ煮えず　春枝
京都御所や御陵を訪ねるとこんな句も
お手植えの松はきびしい竹矢来　てる
禁中の歴史を語る御所の松　正之
さすが御所　松の緑が瞳にしみる　愛子
陵域の松端正に白い雲　里子
宮内省立札の横陵の松　里子
（宮内省の立札松の影が延び）
だが松にも色々な運命があるのですね。
老松を腕木が余命支えてる　悟郎
（立札が由緒を語る松が枯れ）
老松がどまん中交通邪魔をする　保夫
（〆張った松が国道迂回させ）
松風に替る排気音須磨の浦　繁男
（松籟はいずこに須磨浦排気音）
松枯れて村も湖底に沈むよし　房子
（松も枯れて明日は湖底に沈む村）
豪華松玄関口で威厳もつ　文子
（豪華な松も一緒に別邸売りに出る）
一本の松が抱いてる物語　ただし
（一本松ポツンと過疎の村見てる）
流人の涙知ってる隠岐の松　静子
（流人の涙も知ってる隠岐の松）
松の家の由緒の枷が重すぎる　輝月
（松の家由緒の枷が重すぎて）
そして松は絵となり詩の心となるのです。
うっすらと雪のせ絵になる松の影　春枝
（うっすらと雪が絵にする松の庭）
松並木ちらほら見える帆掛舟　せい子
（島の墓地松のむこうに白い船）
郷愁をつのらし車窓松となる　たかし
（磯馴松　車窓に夕陽落ちてゆく）
松風に昔を偲ぶ旅の宿　金吾
（防風林の松と話していた挽歌）
松原を友に暮さん古寺の尼　公一
上五〝松原を〟を〝松の声と〟にしたら。
借景の富士に映えてる三保の松　たゞし
（三保の松の向うに富士が夕焼ける）
浜辺の松汐風を受け強く生き　芙久枝
（磯馴松の根っこがっちり風に耐え）
四季表情ちっとも変らぬ松並木　兼治郎
（無表情な松にも四季の風の唄）
文化の日枝吊る松も冬仕度　勝嘉
松吊りの眩ゆいまでにストレス失せ　寿美子

川柳塔社常任理事会（12月2日）

出席者＝栞・紫香・薫風・太茂津・柳安子・文秋・雀踊子・鬼遊・白渓子・萬的・凡九郎・岳人・重人・寿馬・笛生・智子・武庫坊・史好

〈議事並に報告事項〉

▽恒例の新春おめでとう会が今年も大成閣で行なわれる。舞台付きの豪華な会場です。大勢の参加をお待ちしています。

▽茂理高代、光井玲子（何れも米子市）の同人推薦を了承。

▽本社句会の運営につき、現在の「兼題四題席題二題、各題三句」を再検討してみてはと提案あり、意見を交わすも結論を持越す。なお投句料は一月句会より三百円と改めることを決める　（史）

■**1月**の常任理事会は**休会**。

◇

（松吊りの幾何学模様に空青く）　寿子
築地松きびしい冬を寄せつけず　正之
このままの姿を庭に欲しい松
映画の一齣になる松もありました。　静子
早篭の密書が走った松並木　新造
早駕籠も馳けた街道松並木　仙吉郎
松並木御成街道生き残り　芙久枝
風雪に松の木耐えた東海道
（松がポツンと旧街道の一里塚）
又古里の松は何かを考えさせてくれます。　せい子
ふる里の山に登れば松の風
（ふる里の峠なつかし松の風）　三十四
Uターン峠の松に話しかけ
（Uターンの僕に支えの峰の松）
だが盆栽となると松はいじめられてますね。
人間のエゴへ忍従盆の松　克子
植木鉢松はいやいや耐えている　昭治
盆栽の松針金を切ってやり　麻黄
大木になるまで生きたし実生松　京子
盆栽の松の姿に父を見る　八重
盆栽の松に亡父の影残る　かつみ
家元の松は豪華に峰の風　テルミ
（〝峰の風〟家元豪華に松を活け）
枝ぶりをほめて茶席の孤に座り　実男
（窓に松の影ありお茶席冬となる）
松籟は又武士の夢跡でもあるかのように、
五葉の松登城の武士の夢の跡　久留美
（櫓もない城跡松の寒々と）
血を浴びた松もあるだろ古戦場　悟郎
古城の松風雲急を語りつぎ　明吉
松籟に詩あり悲し落城譜　かつみ
老松の昔話に聞き惚れる　若水
松風が語る栄枯の城の跡　公一
（荒城の月松風が曲になる）
そば処松の高さで歴史つぐ　高代
（城跡に松あり由緒のそば処）
松喰虫に枯れた枝に松毬だけを見るのも
手を尽した松が枯死して行く痛み　愛子
松喰虫松にまわしを締めさせる　義男
記念樹も松喰虫は差別せず　喜与志
松喰虫やっぱり生きるために食い　兼治郎
赤松へブルドーザーは容赦なく　克子
松の芯天へ公害訴える　やすお
松露ダンゴだけが残った埋立地　義男
埋立地は造成地としたい。
松は物語や舞踊などにはつきものですね。
熱海の海岸松も一役かっている　千代女
貫一の涙が沁みた松の碧　サワ子
羽衣を掛けたい様な松が減り　国彰
松原で天女はただの人になり　露芳
（金屏風に松の緑の舞扇）
お正月松の内にはこんな句も生れます。
松の内年賀状にもある温み　国雄
（松の内賀状に古き友憶う）
松とれて飲みに行きよい友の家　周三
松過ぎて訪う客もなく老夫婦　国雄
松竹梅やっぱり俺は日本人　金吾
松かさの句もありました。
松かさを宝のように拾う孫　ちよ
松ボックリ拾う街の子目がきれい　勝美
松ぼっくり今年もころころ生きようよ　房子
苔松に菊添えにして夫の喜寿　輝月
お目出度うございます。益々お元気で
老松を風よけにして子は育ち　京子
少し解しかねるところがあります。老父を
松にたとえたのでしょうか、一寸無理では。
では最後に私の好きな十句でしめくくることにしましょう。
松の木にかかった白い月の私語　博子
植木好きの家に似合わぬ見越松　八太郎
土に還る松の落葉の二つずつ　里子
松よりも杉の直幹めでし友　てる
大和路に夜鍋藁打ち松飾り　章久
松の木を信じてからむ葛燃える　博子
松の恙揺れて人恋う町はずれ　高代
野仏に傘さしかける松の枝　新造
庭の松庭師の鋏真似てみる　喜代志
松の内読みたい本を出して置く　よし津

◇

題「**種**」　**1月10日締切**（3月号発表）
ハガキに5句以内
「花」　2月10日締切（4月号発表）
宛先　〒598
泉佐野市中庄一〇八一―九九
阿萬萬的

我慢

平田実男選

監督の我慢をほめる解説者　兼次郎
ここもまた我慢をしなと風の言う　ゆり子
宮仕え我慢を癒やす酒が待つ　智恵子
お下りでいいと母子寮灯が和み　大柏
我慢強い男の心はチャック付き　章久
愛情のある間はじっと我慢する　三五島
子に我慢させずに親が苦労する　ちかし
売り言葉買わぬ我慢をしておこう　志重
母の背我慢の二字を負い続け　妻子
我慢したわさび涙で味を賞め　里風
夫より多い収入我慢せず　三和
ヒョットコやおかめの面で耐える炙　高明
妻病んで妻の我慢だった日々　義男
つめ込んだ我慢の袋と旅に出ん　ふじ枝
叱られてしびれの我慢だけ覚え　紀雄
やせ我慢三面鏡へ笑われる　忠三
嫁姑互いに我慢している気　千秀
我が社にも我慢くらべの椅子がある　雀踊子
嫁がせて父は寂しく笑うのみ　正敏
子の我慢母にも痛い注射針　久仁於
黙々と母の我慢がある笑窪　規不風
我慢してよかった今朝の丸い月　元江
我慢することを教えて嫌われる　佳雲
我慢した石を河原で強く投げ　博友
褒められるから我慢する注射針　伊津志
我慢することもソロバン知っている　重人
底辺の我慢で税が取りやすい　成人
嫁姑かしこい方が我慢する　久子
蓑虫の愛は別居を我慢する　正敏
我慢にも限界がある愛の水　雄々
陽が落ちて我慢我慢の靴を脱ぐ　四郎
青筋の浮いた笑顔で我慢する　本蔭棒
生きて来た我慢のにじむいい笑顔　弘朗
我慢する涙きれいな色で落ち　洛酔
もう我慢出来ない顔で聞くトイレ　本蔭棒
小男の我慢は青い筋をたて　しげお
同居して今日も我慢が胃に溜まる　寿美
佳
我慢する涙は胸の中に落ち　与呂志
投げられた石手に持っている我慢　藤後実男
我慢する度に吹き矢をためている　婦美子
栓抜けて我慢の水が吹き上げる　劦
よい嫁のうわさへ我慢する疲れ　春枝
人
耐え忍ぶことはシベリヤから学び　弘朗
地
我慢して鬼一匹を胸に飼う　文平
天
我慢する石がポケットで丸くなる　道子
軸
辞表ふところに我慢の堰が切れ

湯

芳地狸村選

ひとり居の夜を深くする湯のたぎり　大柏
露天風呂月と女が湯につかり　たず子
湯の町もかに解禁で活気づき　勝美
生姜湯に亡母を偲んだ風邪三日　寿美
ふれ合いの温味湯宿の国訛り　テル
湯豆腐にわが家の和み見る夕餉　ゆう也
阪神がどうなったかと湯殿から　しげお
湯加減も覚えた嫁にいたわられ　木魚
湯加減も機嫌もよくて浪花節　幸一
太陽の恵みでお湯の沸く便利　多賀子
ギャル今日は日本娘で居る茶の湯　本蔭棒
湯が沸いているのも忘れている電話　重人
即席へ一杯分の湯がたぎる　秋峰
おうどんの湯気でゆるんだつけまつげ　悠泉
銭湯へくれば垣根のないお人　優
茶筅よくお湯の加減を知っている　テルミ
湯煙りにからっぽの貌並んでる　豊
湯の国へお座敷列車としゃれてみる　米朝
一人湯を覗けば音痴歌ってる　伊津志
湯加減に心がこもる母の風呂　公一
湯上りの浴衣は脱線したくなり　可住
湯引きはも梅酢でつまむ大阪の味　喜代子

湯豆腐をふきふき話がもつれだす　与呂志
湯煙りへ影武者がよむ浮動票　朴竜
ご機嫌は父湯ドウフで赤い顔　里風
湯上りの肌の温みを盗む風　達子
まだ湯玉はじける肌をいとおしむ　美房
山の湯にどっぷりつかる親子猿　圭介
湯豆腐があればよかった父の酒　倫子
湯にはいる順序が狂う巨神戦　兼治郎
殿様の気分ゆったり湯にひたり　暁明
初釜に一期一会の湯がたぎり　ひで
一泊の旅湯の街の阿呆になる　雀踊子
湯けむりがチラホラ宿が近うなり　道子
湯のしして母の晴着は甦える　枯梢
湯豆腐の外は吹雪か風が泣き　素身郎
風呂の灯が一つ夜業の父を待つ　明水

佳

風呂の湯があふれて嫁に手を合わす　文平
湯殿から父子の笑い灯がまるい　きみえ
お湯割りがだんだん薄い妻の知恵　ちかし
虎造を唸って浸かるしまいの湯　勝晴
湯けむりへはじらい少しずつ消える　砥代

人

動物が傷を癒やした湯の起源　右近

地

退院の風呂で再起の血を湧かす　どんたく

天

湯の花を入れて我が家の奥別府　久仁於

軸

湯煙りを朱色に染める山紅葉　寿美

祝

松本　はるみ　選

病院も旗日は赤飯つけてあり　繁男
慶びの娘の瞳を逃げて父ひとり　芳子
祝歌少々下手でもうけている　露児
祝い客帰して静かな内祝　さと美
祝典に陛下を拝む車椅子　輝月
六一の祝いへ家中灯を燈し　七面山
金屏風主役の顔がちと硬い　達子
無愛想な部長の祝辞冴えに冴え　芳水
分校が祝賀会場ダム竣工　明水
左遷への餞別祝いと書いている　保夫
明日からは苦しみもある祝い事　ちかし
検問に吹く風船の祝い酒　白峰
暦には無い祝日がある二人　正敏
赤飯で始めて父が知る祝　成人
祝酒こぼれることをめでたがり　きみえ
棟上げの祝いの酒は冷やで飲む　新造
犬連れてちょっと祝いをくれる仲　与呂志
お祝いもあやふやになる子沢山　兼治郎
祝当選初対面の貌が寄る　多賀子
定年を妻が祝うてくれただけ　忠三
栄転を祝う末座で泣く左遷　みどり
お祝いのことばは妻に聞いてでる　ろ亭
祝盃へ本音を少うし注ぎこぼす　寿美
祝い酒母ちっぽけな幸に酔い　砥代
祝い事そのまん中に母います　重人
祝勝のビールの浪費許すべし　どんたく
水割りに二人で祝う夜が長い　規不風
秋の空祝辞のように澄んで来ず　可住
片言のテープも届く喜寿祝い　大柏
ライバルの祝辞は軽く聞き流す　枯梢
祝い酒妻は鎧をまだ脱がず　雄々
廻し呑む祝いの酒の火の匂い　ゆり子
年経れば法事もどこか祝めき　ちよ
祝盃へもぐり込んでる旅のひと　かすみ
祝い唄ききつつピエロの取る仮面　文平
明日はどうあれ今を祝っとく　山久
生死輪廻の命を洗う祝酒　元江

佳

未知数へ祝いの言葉ばかり選る　失名
祝杯の底で妬心が青く炎え　本蔭棒
祝杯に女の嘘が揺れているテル
お祝辞に似合う顔して坐っとく　佳雲
地下足袋にどうも祝日多すぎる　八太朗

人

祝盃に写った顔は善人よ　洛酔

地

祝杯を一気に乾した喜寿の初春　白汀

天

祝膳入歯に少し無理がある　雀踊子

軸

お祝いはなんにもいらぬ夫の掌よ

柳界展望

集録・板尾岳人

★第四回川柳Z賞作品募集
作品＝自由吟30句6組
未発表作品又は60年以降の作品
用紙＝B4判原稿用紙
第一次選考委員
宮本紗光・柏葉みのる・小野公樹・工藤寿久・西山金悦・高田寄生木
第二次選考委員
橘高薫風・寺尾俊平・時実新子・柴田午朗・泉　淳夫
尾藤三柳・山村　祐・片柳哲郎・奥室数市・杉野草兵
締切・61年1月31日消印
参加料・不要　発表誌60円
切手15枚封入
送付先・青森県下北郡川内町浦町294　高田寄生木
主催・かもしか川柳社

★川柳都大路第25回作品募集
題「歴史」2句
投句先・京都市伏見区醍醐御霊ヶ下町47―12　都大路川柳社
締切・61年1月4日必着

★テレホン川柳ひろば
052(722)1001番
このたびなごや川柳社ではNTTに協力「テレホンサービス」でテレホン川柳の広場を開設、新人向け川柳のPRに乗出すことになりました。協賛名古屋川柳社
（越村枯梢）

★「川柳でんでん太鼓」田辺聖子著が講談社より出版された。「小説現代」に連載されたもので600余句を収録344頁、B6判定価一、三〇〇円

★毎日新聞兵庫文芸川柳教室が11月からスタート。室田千尋（ふあうすと社）が初心者層を指導

★広島川柳会主幹菅生沼畔氏が死去され11月16日葬儀が営まれた。

★川柳たけはらの森井菁居小島蘭幸両氏が中国郵政局表彰を受けられた。

▼**お便り**△

■何年振りかで川柳塔社の11月本社句会へ出席して呼名賞を受けました。番傘の句会部員が川柳塔社で呼名賞をもらったということはどうみなさんお考えでしょうか。句会ムードをもりあげるためにも。
（石川　勝）

■11月中旬、再度、市場没食子氏が北逓信病院に入院されました。当院薬局に御長男が勤めておられるので何かと安心です。
（森下　愛論）

■11月10日出雲市川柳大会があり、ささやかなものでしたが50名参加、一応11月の行事を終えました。
（尼　緑之助）

■出雲市川柳大会で尼先生お元気に主催者を代表して御挨拶があり賑やかに終りました。
（久家代仕男）

■今女房と共に四国路の旅を続けております。
（上田登志美）

うみなり川柳会

鳥取市相生町三丁目二〇四

大塚　豊生　　中森　葉士人
北野　天人　　小林　由多香
森田　熊生　　土肥　希満子
加藤　貞山　　有田　とし江
加藤　雄人　　田中　富美湖
岸本　無人　　原田　芳泉
岸本　静生　　森田　華子

ほか会員一同

賀正

東野大八

新同人紹介

田中隆二
—天笑・吐来・智子・白水・敏推薦

茂理高代
—紫香・薫風・花子・千代・瑞枝推薦

光井玲子
—紫香・薫風・花子・千代・瑞枝推薦

寺井東雲
—天笑・薫風推薦

■川柳天国のテレビ放映しっかりみました。投句電話したのですが、つながりませんでした。毎週孫の綾に逢うため日曜には岡山まで車をとばしております。
（小野　克枝）

■いま雲仙の宿でくつろいでおります。主人が会社へ入って四十年近く永年の労をねぎらい旅をプレゼントして頂きました。
（吉田　笑女）

■来年の別府大会では大阪本社の同人のみなさんとお会い出来ると勉強に励んでおります。
（田口　虹汀）

本社　十二月句会

十二月六日（金）　午後六時
メンズファッションセンター

今年最後のおはなしは野村太茂津氏、テーマは「顔」。日本人でも北国と南国とでは顔が違う。同じ和歌山県でも加太には加太の顔、高野山には高野山の顔がある。これはやはり風土からきたものだろう。テレビで見た米ソ首脳会談のゴルバチョフ書記長はいい顔だったが、あの微笑を信用してはならぬ、とは如何にも戦争体験者ならではの話。

月間賞は河内天笑氏。呼名賞は水客、柳宏子、悦郎の三氏。　（S）

（進行—天笑）（受付—年代・冬葉）
（記録—射月芳・亜成・山久）

出席者—いわる・武庫坊・年代・はつ絵・作二郎・紫香・一郎・冬葉・笛生・幸・凡九郎・太茂津・きみ・照子・郁栄・雀踊子・寿馬・千代三・池田寿美子・満津子・道子・敏白渓子・章久・薫風・紀雄・狸村・悦郎・水客・眉水・鬼遊・史好・安藤寿美子・蕉露・亜成・英壬子・春蘭・三十四・勝美・柳宏子・射月芳・美智子・金太・岳人・萬的・隆二・天笑・月子・白兎・寿子・小路・ただし・あいき・柳伸・一二三・文秋・三男・吐来・栞・すえお・正坊・山久・美代子・美房・洋敏・吸江・智子・規不風・楓楽・頂留子・外吉・度・寿美

席題「息」　岩内外吉選

吉報の予感に弾む白い息　美智子
遮断機が長い吐息を聞かされる　太茂津
息切れがしてる男を追い越そう　水客
コスモスは溜息に似て揺れ止まず　萬的
亀サンの息の長さでゆく余生　ただし
ピッタリの息で夫婦にみられがち　柳伸
初産の大役終えた娘の寝息　正坊
息つめて聞こう今咲く花の私語　柳宏子
息の合った漫才だったのに離婚　萬的
ひと息を入れて核心突くことば　ただし
ライバルと不思議に息があっている　美智子
ため息はつかず自分を知っている　道子
中流と思うから出るため息で　吐来
十二月越える吐息を繰り返す　笛生
吐く息の白く田舎の母のこと　一郎
四面楚歌溜息だけが味方です　ただし
折返し点で息があやしくなっている　智子
水入りの息が聞こえる砂かぶり　すえお
ため息の本音は母は知っている　武庫坊
ため息をつくと自分に負けそうで　楓楽
不安解消寝息にも出るゆとり　吸江
息の長い歌手で紅白には出ない　水客
出稼ぎの少さな村の息づかい　雀踊子
低音の魅力が息を吹き返し　金太
息のある内にと子等が狙ってる　きみ
家計簿がひと息入れたボーナス期　寿美
子の寝息たしかめてから妻の愚痴　吸江
息抜きの切符が二枚冬旅情　笛生
恋人の吐息はサマになっている　天笑
砂山を踏むとロザリオ息をする　作二郎
息抜きに来いと追伸さりげなし　水客
熱い息吹きかけてくる下心　年代
ため息で吹くと風船すぐ割れる　幸
悔いのない一日でした深呼吸　悦郎
若者が燃えると息が青臭い　楓楽
にんにくが匂うつるはしからの客　鬼遊
息抜きに里へ戻れば母も愚痴　春蘭
息とめて一応妻の愚痴を聞く　一二三
健やかな寝息へ母の今日終る　柳宏子
子の前で吐息は見せぬ亡母だった　三男
耳もとの息は本気にさせる息　外吉

席題「アパート」　紀市郁栄選

アパートの灯が暖かい色でつく　金太
アパートの一間西陽も醒めている　白兎
花好きの母にアパート冬になる　水客
アパートの隣の主がまた変わり　紫香
アパートの噂の中で髪を梳く　悦郎
アパートで居留守を使うのに馴れる　柳伸

アパートで菊一輪がよく匂う　道子
アパートの土曜噂のベレー帽　外吉
アパートに六法全書が置いてある　岳人
アパートの灯がモンマルトルの街かざる　武庫坊
アパートの灯が下町をぬくめてる　白兎
オーデコロンが匂うアパートのひと間　水客
魂を売ってアパートから出よう　雀踊子
アパートにひとり暮しが干してある　紫香
アパートで妻の稼ぎを待っている　洋敏
アパートで芸人いつも花を活け　柳宏子
アパートに交際悪いのが一人　天笑
アパートのひと部屋ごとにある縮図　外吉
アパートの合図素通りした男　三男
アパートの階段疲れた音で鳴る　あいき
マンションと言うからアパート素通りし　洋敏
アパートで立志伝を読んでいる　雀踊子
アパートに学生夫婦が住んでいる　寿馬
アパートに誰かをさけてる窓がある　亜成
アパートのドアー鋭い耳を持ち　悦郎
アパートがひっくり返る直木賞　楓楽
アパートの前でチャルメラの音が止む　三男
アパートに住んで遠くの虹を追う　白兎
アパートにひそとドラマを持つふたり　柳宏子
アパートの鍵から始まるサスペンス　美智子
ぬくもりがあるアパートの薄い壁　射月芳
アパートの階段不思議な音をもつ　智子
アパートで大人同士の遊びする　作二郎
単身で住むアパートに風がない　郁栄
アパートの今日は向いがもめている　
アパートに灯がつく温め合っている　
アパートの隅で時効を待っている　

兼題「襟」　西出楓楽選

夢二描く女初冬の襟の色　萬的
襟足から娘の春が匂い立つ　寿美
襟少し開けて油断はしてません　月子
抜き襟に有為転変の風が吹く　年代
十二月風も襟から責めてくる　滋雀
襟元を奇麗に悪女とも見られ　悦郎
襟元の乱れ心の底突かれ　芳水
妥協せぬ襟足の白さ見せている　水客
襟元が気になる人と冬の町　山久
襟もとを払ってあげてから噂　外吉
襟裏に女の哀しい思慕がある　郁栄
軽口の中の一言襟正す　太茂津
白粉の襟で男がちょろくさい　きみ
特大の襟で柔道一直線　洋敏
家伝薬襟を正して飲めば効く　花村
襟の星靖国神社で夜泣きする　武庫坊
民の声襟立てて聞く耳がない　一二三
実年の襟木枯しが吹きぬける　どんたく
襟首の風仲よしになれそうな　水客
カッターの襟に独身のぞかれる　正坊
そこはかの憂い襟あし耐えている　きみ
襟巻のミンクの中に居るキツネ　寿馬
反省会襟を正した訳でなし　文秋
抜き襟の綺麗な女画廊出る　規不風
実年と呼ばれ背広の広い襟　正坊
ネクタイを締めて働く襟になり　はるひこ
抜襟におんなの業の見え隠れ　紀雄
襟巻きを深ぶか冬に負けている　笛生
素通りする気かオーバーの襟を立て　あいき
半襟の白さ毅然と生きている　幸
出てはったらしいとわかる襟の抜き　美代子
襟元がすっきりすきのない女　月子
わたくしを売る襟元のアクセント　はるひこ
首のない男が襟を立てて冬　雀踊子
金策に走る師走の襟を立て　一二三
襟首をつかまれている宮仕え　妻子
喪服着る襟の芯から冷えてくる　はつ絵
「たち吉」へ寄る襟足の匂うひと　作二郎
襟章にいつも私を問われてる　幸
胸襟を開くとお金が減ってゆく　亜成
半襟の白さ心を覗かせず　智子
襟元に顔出したがる鬼がいる　武庫坊

60年月間賞杯永久保持者
荻田千代三氏に決る

60年本社句会月間賞は
1月＝史好、2月＝年代、3月＝一二三
4月＝萬的、5月＝幸、6月＝幸生、7月＝水客、8月＝千代三、9月＝洋敏、10月＝千代三、11月＝度、12月＝天笑
この結果、2回獲得の荻田千代三氏が永久保持者と決りました。

人を恋う襟ぐり少し大き目に　楓　楽

兼題「南極」　藤井　一二三　選

湯豆腐の湯気が恋しい昭和基地　千代三
南極に犬由き延びていた奇蹟　柳宏子
南極の氷が溶けた日の悪夢　幸　一
南極よ昔のロマン語ろうよ　正　坊
南極へ単身赴任という船出　三十四
南極と北極みたいな倦怠期　妻　子
南極の基地でネオンの街を恋う　金　太
紅白へ南極からもメッセージ　三　男
南極にだけ非武装という平和　幸　一
ペンギンは知る南極に生きる知恵　文　秋
南極まるごとオンザロックで飲んだ夢　楓　楽
南極からロマンチックな便り来る　吸　江
まぼろしのタローが駆ける昭和基地　鬼　遊
あざらしのデート祝福する白夜　頂留子
南極の犬オーロラへ遠く吠え　どんたく
旅人の目には南極すばらしい　はつ絵
オーロラにネオンを偲ぶ南極夜　章　久
南極に立ちたい夢が橇を引き　蕉　露
ペンギンの楽土に兵火ない誓い　吐　来
南極の使者珍奇なるエンビ服　いわゑ
南極へ熱い噂を届けよう　寿　子
やがて冬男のロマン南極に　岳　人
置き去りの極地で犬の物語　小　路
南極のベールに挑む昭和基地　射月芳
南極に仰ぐ日の丸眩し過ぎ　勝　美
南極物語タロージローに借りがある　美代子
南極へゆけば出会える雪おんな　千代三
南極を思いだすため星を見る　郁　栄
ペンギンの夫婦とハピーニューイヤー　寿　美
閉じた瞳をぬけ南極へ辿り着く　寿　子
ロマン追う男で熱い昭和基地　楓　楽
南極へ逃げても恋が追ってくる　月　子
紅白を聴く南極の耳が寄り　鬼　遊
氷雪の智恵をタローからもらう　柳　伸
南極で厚切りのパン焼いている　作二郎
南極の未知が氷の底にある　笛　生
ペンギンに南極やさしい貌を持つ　楓　楽
南極の神秘な夜空見て飽きず　天　笑
南極の氷が裂ける春の音　照　子
南極で人間も陽も啞となる　美智子
児の名前決め南極へ鹿島立ち　一二三

兼題「還る」　堀端　三男　選

夕焼けこやけ何処へも還れない鴉　作二郎
ご機嫌な父に還った豆腐鍋　小　路
渡り鳥還るさだめのあるなさけ　春　蘭
還れぬまま夢が漂う北の海　寿　子
片っぽの靴も還って黄昏れる　月　子
道頓堀に魚の還る夢を持ち　一二三
還るまで心開かぬ北の海　柳宏子
折返し点で自分に還るとき　美智子
呱々の声あげたアパート見に還り　天　笑
本当の勇気生還期している　柳宏子
マッキンレー鉄の男を還さない　英壬子
なぞなぞは母なる川へサケ還る　美智子
還らない人を待ってる帽子掛　隆　二
還らなくとも岸壁に立つドラマ　千代三
風葬のメロディが止み無に還る　白　兎
首たてにエクボで還す日の答　寿　美
負い切れぬドラマを下げて孤児還る　吐　来
幸せは子に還るだろ札所旅　道　子
ふと吾に還るとあたり暗過ぎる　芳　水
地に還る夕べの星を疑わず　吐　来
仏の掌に還る亡母の鈴が鳴る　雀踊子
長恨歌いのちはみんな地に還る　幸
人間に還ると米粒が見える　白　兎
逢えてなおひとりに還る冬の傘　寿　子
還俗の過去持っていて美しき　水　客
わたしのため生還したと信じよう　博　子
暦還る日の息災のちゃんちゃんこ　どんたく

60年本社句会全出席者

松本一郎・宮園射月芳・飯田悦郎・北勝美・橘高薫風・高杉鬼遊・岩本雀踊子・二宮山久・長谷川春蘭・黒川紫香・松下蕉露・吉川寿美・野村太茂津・春城年代板尾岳人・稲葉冬葉・吉岡美房・金井文秋・西出楓楽・松原寿子・辻白渓子・神谷凡九郎・阿萬萬的・高田美代子・堀端三男・春城武庫坊・西田柳宏子・津守柳伸・芳地狸村

（29名）

税金が還るといつも騙される　滋雀
桐一葉還って冬の土となる　耕花
生きぬいて還れと祈り稚魚放つ　満津子
都市砂漠還って来いと過疎の村　蕉露
その辺で頭冷えたら還ってこう　太茂津
ゼロ歳に還る六十一祝う　笛生
墓のある島だが還ることがない　紫香
阿修羅に還り女は橋を渡り切る　楓楽
雑兵が還り我が家に灯を点す　冬葉
俗名に還って唄う暮れの僧　寿馬
母の手に還らぬ毬でよくはずむ　楓楽
ほんとうの私に還ってゆく写経　楓楽
ブーメランいつも還ってくるなさけ　作二郎
またもとのひとりに還る人生譜　三男

兼題「敬語」　西田　柳宏子　選

雑兵で敬語を使うことばかり　はるひこ
商社マン何処で覚えた敬語節　蕉露
いち物があって敬語を使いわけ　柳伸
電話とる長女敬語を心得る　笛生
顎が突っ張る敬語から解き放つ　白兎
つらつらと敬語ならべて読む祝辞　隆二
突然の敬語へ男身構える　天笑
外人に妙な敬語を教えるな　度
言い馴れぬ敬語祝辞を読みちがえ　白渓子
通訳が敬語を少し言い替える　白渓子
外人に変な敬語で賞められる　史好
いんぎん無礼よっぽど甘く見られてる　文秋
敬語から抜け出てくぐる縄のれん　ただし
小遣いをせびる時だけ敬語です　金太
敬語をつかう喜劇の中に居る　悦郎
肩書を見てから敬語使い出し　紫香
ベテランがとちる皇居の園遊会　柳伸
嫁姑距離を保っている敬語　道子
貧しさの中で育っている敬語　吸江
先生も生徒も敬語など忘れ　千代三
敬語より温もり持った言葉選る　三男
善人を敬語にのせた騙し船　悦郎
いんぎん無礼使う敬語が突き刺さる　紀雄
ほんとうの敬語を持っている夫婦　幸
兄弟で本家分家という敬語　史好
窓際に座り敬語を遠く聞く　月子
嫁ぐ娘の敬語にゆれる父の森　正坊
いつまでも敬語で距離を保たれる　安藤寿美子
同輩の敬語に少し針がある　金太
生きてていけないような敬語聞く　花村
一言が多い敬語をもて余し　萬的
終戦の日から敬語に疎くなる　作二郎
ご尊父と呼ばれおやじがくしゃみする　鬼遊
河内弁敬語の入る隙がない　吐来
丁寧な敬語の中にある敵意　蕉露
敬語など使うな返事に困るから　凡九郎
敬語などいらぬ裸のおつき合い　滋雀
けったいな男敬語を知っている　作二郎
白足袋を穿くと敬語がすっと出る　智子
水くさい男で敬語が達者なり　天笑
丁重な言葉で銀行に断られ　柳宏子

（清記・楓楽）

川柳堺二百号記念句会

とき　**昭和61年1月19日(日)**10時開場
ところ　堺勤労会館2階第一会議室
第一部　昼食懇親宴（正午～2時）
第二部　入選句発表（2時～4時）
席題　久保田元紀選
兼題「棚」　小出　智子選
「積む」　墨　作二郎選
「サイン」　野村太茂津選
「運」　黒川　紫香選
「賛成」　梶川雄次郎選
「怖い」　中尾　藻介選
「玉」　橘高　薫風選
各題2句・正午締切

会費　三千円
賞　各題三才に呈賞
予約制ですので参加ご希望の方は年内に左記へご連絡下さい。
投句受付　61年1月15日必着
投句料五百円
連絡先　〒593堺市堀上緑町二―九―一
河内天笑
電話　0722（78）4706
主催　堺川柳会

謹賀新年 61年丙寅

川柳塔唐津支部

（今年もよろしくおねがいします）

代表 田口虹汀

浜本久仁於
仁部四郎
浜本義美
久保正敏
筒井朴竜
松高多駄子
山口高明
岩崎実
浜本ちよ
相葉あき
児野今子

賀春

富田林富柳会 一同

謹賀新春

翠洋会

高杉鬼遊
山根いつを
井上照子
上田登志実
小野風童
奥田みつ子
北田綾子
栗谷春子
中西兼治郎
西出楓楽
藤村宏子
堀江良
堀江光子
結城君子
横山為子
橘高薫風

頌春

わかあゆ川柳会

島根県大原郡木次町四六一

小砂白汀　藤原鈴江
石田清泉　細木歳栄
岸本輝水　細木志保
福間清夢　北川民子
上代敏明　田中ヒデ子
藤原秀穂　鶴原文子
園山世似　森山英子
渡部悦良　河原恵美子
大倉翠星　吉田笑子
谷岡芳枝　菅田かつ子
志賀美栄　田本保子
松本はるみ

外会員一同

謹賀新年　今年もよろしく

高槻川柳サークル　卯の花

〈連絡先〉　〒569 高槻市明野町15—27　上原逸宛

もくせい川柳会

橘高薫風
安藤寿美子
一瀬福一
上田登志実
江口明
奥田満女
小畑よし子
栗原隆
栗原富子
栗山賀代
滝北博史
田中正坊
玉井房子
玉置英子
辻川慶子
永田千恵子
中野美祢子
額田明吉
春城武庫坊
満仲きく子
宮村しず
横井春子

例会　毎月第3月曜日午後1時半　豊中市立中央公民館

花地抽壇

締切毎月25日。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。
担当・清水健司

打吹川柳会　奥谷　弘朗報

無駄話はずみ用件言い忘れ　菊枝
聞えない振りに後悔差し出口　文子
子のしぐさ無駄を見送る母の愛　高代
家計簿にくらしの無駄を指摘され　佳女
気がせいて粗製乱造二度の手間　梅朗
納得が行かず無駄骨折っている　弘生
台風が用意を無駄にさせて逃げ　柳風
無駄すてて弥陀のふところ定に入る　康子
無駄をせぬ暮しに明日の夢が有る　志づ子
無駄だとは思い仕送る親の馬鹿　亮二
無駄のない話する人うとまれる　英治
行き詰まり無駄と思わず引き返す　美智子
老妻は生活の知恵無駄をとり　孝美
日の丸を無駄には出来ぬ北の島　吉朗
無駄口は言わない父を信じ切り　弘朗
托鉢は無人と知らぬ鐘の音　紫映
ジャングルで青春捨てた甲斐がない　節子
一粒が地に万粒に無駄はなし　寿満湖
結ばれて無駄でなかった交際費　舎人

わかあゆ川柳会　小砂　白汀報

煮つめれば煮つめる程味が出る　敏明
日の丸のまん中平和の血がたぎる　翠星
息をのむ最後の一球どまん中　志保
はげましに清酒一本かけつける　三和
スタミナ源まん丸いおじさん売ってる　ヒデ子
雑踏のどまん中にある孤独感　秀穂
丑の日のスタミナはまだ篭の中　悦良
人生のまん中思わぬ落し穴　笑子
庭草を照らし夕陽の使命感　天痴人
言葉なく煮つめる時間の長いこと　かつ子
人間を煮つめた艶はおだやかで　世似
煮つまった頃に顔出す保身術　歳栄
煮つまって人柄だんだん丸くなり　英子
今日だけは許しておこう花の棘　恵美子
ラーメンが冷えても話煮つまらぬ　清泉
魅力ある臍まん中でウインク　鈴江
煮つめると茄子にも秋の色が出る　民子
母の柚子やさしくやさしく煮つまって　はるみ
煮つまらぬ奴で閻魔も追い返し　白汀

にた川柳会　西村　早苗報

友情の美しさ傷にふれずいる　きみえ
苦むした句碑へつめたい白い風　孝華
嫁きおくれ浮名流した事もあり　登美也
その度に理屈をつけて飲み仲間　独仙
男女平等男も使う化粧品　幸一
コスモスの主張を曲げる秋の風　多賀子
はじらいを脱いで女は熟れてゆく　夢酔
ハイボール男の嘘をみたしつつ　寿美子
婦長には頭上がらぬ青年医　花子
もう一度我慢する気で紅を塗る　裕
名月に母を画いた歩哨の日　宗光

指切に背いた指が疼き出す　〆女
迷信をお守袋に閉じこめる　景子
針箱へ亡母の糸屑まだ残り　雄々
素顔のない女を美人と思わない　雀踊子
ブレーキの利かぬ勢いにも困り　弘朗
縁側で抹茶作法はいらぬ事　亀甲
一言の会話ストレス消してくれ　愚童
水割りに挑むおんなの眼が見える　早苗

堺川柳会（前月分）　河内　月子報

縁のない姉の噂を森で聞く　岳人
血縁をずたずたにした北の風　甘平
縁うすき人の名刺が手に残る　たつお
事務的な顔で混んでる朝の駅　曲ん手
鉄橋を渡ると弾む故郷の駅　一二三
駅までの別れを惜しむ廻り道　妻子
せきたてても各駅停車だけの線　芳水
旅人に語りかけてる無人駅　青舟
駅に来て男の方が煮え切らず　月子
ローカル線つぶれかかった駅を持ち　真柳
人生は緊張いつも始発駅　克子
駅長にあこがれていた少年期　冬葉
作業場の女がまるいズボンはき　草春
円筒を覗けば鉛空が見え　小雪
終点のない円周でまだ迷い　千万子
人前で喧嘩が出来るまるい仲　天笑
円満な夫婦にあった爪の跡　かりん
情け深い女に罪な餌を投げる　素灯
飼いならす餌に主張が盛ってある　柳伸
天王寺で鳩の餌をまく平和な日　金三郎
応接間裸婦と一緒に待たされる　外吉
シャガールの絵は夕焼けを遠くする　元紀

気に入った絵は故里に似た景色　五月
絵の具皿乾きはじめたもの想い　半銭
太陽がいつも燃えてる子供の絵　あか里
女人往生こころが残る志功の絵　作二郎

堺川柳会　河内月子報

お茶の間をアトリエにして賀状出来　半銭
大納会済んでから書く年賀状　あか里
赴任地の子が笑ってる年賀状　金三郎
お互いの元気を賀状だけで知り　紀美女
年賀状また奥さんの名が変り　月子
おでん屋で昔の夢を追っている　すみ子
頬張ったおでんで儲け考える　雅風
串刺しのおでんに愚痴を笑われる　肇
下積みの日をおでん屋に支えられ　五月
おでん屋で話がはずむ初対面　かりん
おでん屋のおやじに調停して貰い　天笑
愛想もおまけのうちか小商人　芳水
おまけです鰯一匹のせてくれ　新造
男と女おまけの街にいる夜更け　夢成
巧妙な嘘がひそんでいるおまけ　甘平
幕切れのおまけに雪を降らせよう　酔月
うち中の腰が重たくなるこたつ　外吉
重大なことだと三文判が知る　一二三
十字架の重み感じている差別　笑痴
嫁かぬ娘が二人も父の荷が重い　妻子
断りのウソへ受話器の重いこと　千万子
花散って心が重くなる二浪　素灯
甘い顔見せたか肩の荷が重い　翠公
音のない地球はきっと寂しいぞ　秋風
靴の音妻は三指ついて待ち　山久
お茶碗の音に猫まで起きてくる　克子
違和感の一つで音の好き嫌い　曲ん手
音狂を又カラオケのとんをあげ　真柳
石橋をそおっと叩く音がする　小雪
足音で僕だとわかる女が居る　東雲
柿落ちたことも話題の尉と姥　柳伸
たくあんの音敵は入れ歯でないらしい　冬葉
有線の流れる中で歯を抜かれ　柳石子
この音は風か地獄へ落ちてゆく　鬼遊

川柳ねやがわ（前月分）　**高田博泉報**

腕まくら夢醒めやらぬ涅槃像　菜月
難民へ貧者の一灯プレゼント　さつき
気配から察して寄附は出ぬらしい　壮之助
あたらしい先生の声新学期　春子
白く爪塗って今年の風に乗る　創吾
ともしびに河内の人情こびりつき　松庄
悲しい時も嬉しい時も菊が好き　杜的
花道でやっと判った敵味方　求芽
花好きへ一鉢贈る敬老日　勝美
勘当を許し産着のプレゼント　波留吉
ゆとりある暮し家計簿楽しくて　新泉
悪知恵を横から入れている気配　藍子
先生の近づく気配マンガ伏せ　トシ
秋の夜の酒ラッキョウが音を立て　章
伏せていた病名知っている気配　君子
中年のつもりへ老人手帳くる　敏夫
控え目な患者もぞもぞ椅子を立ち　まさお
捗った仕事に唄を口ずさみ　シマ子
王様で居るのにプレゼントが欲しい　あやめ
赤ちゃんが信じきってる腕まくら　かすみ
中座して一本つけてくる気配　光子
豪邸の犬がゆとりの欠伸する　淳朗
髭生やす顔には遠いすねかじり　静江
金に縁無いけどロマン追うゆとり　一途
晩秋の絵空ごとにはしたくない　冬葉
三面鏡今日はどの顔しましょうか　てまり
父の日を孫が知ってたプレゼント　晴風
歯車のゆとり程よい年の功　一笑
腕まくら天井にハエが居る　博泉
中へは入らぬ方がよい気配　亜成
やすらかな寝顔は母の腕まくら　三郎
腕まくら話しかけたらもういびき　頂留子
プレゼントそれから変る人の顔　英壬子
義理チョコの相手をきめるあみだくじ　度
金借りに来たなと妻の勘当り　覚然坊
ぼく一人だけでなかったプレゼント　亜鈍

佳句地10選（前月号から）

神夏磯　道子　選

どの道を折れても丸い月が追う　静子
アンテナを時どき磨いている夫婦　正子
他人だけれど縄を握っていてくれる　千代
ストローが詰る誤解だと思う　狂虎
繕ってやるすべがない言葉尻　恒明
足向けて寝られぬ言うたまま来ない　いつを
絵ごころの貧しさで見る零の数　年代
差し支えあるので鉛筆けずってる　小路
ご先祖の達筆残る雛の箱　薫風
ベテランが言えば何でもない話　元江

水かけて先祖の声を聴いている　静歩
手離す気になった子猫がよくなつき　あいき
それからの義理が重たいプレゼント　小路
嘘つきのステテコいつも汚れてる　紫香
旅の街わが十年を引き戻す　薫風

川柳ねやがわ　高田博泉報

足音もなしに物価上って来　さつき
鹿せんべいきっと枯葉の味がする　春子
かけ出しもサインの文字は大女優　創吾
足音に玉子産んだと餌ねだる　松庄
どんな夢見たか人形のみだれ髪　シマ子
落葉踏む足音どうやら二人らし　麗水
販売機キミはしゃべらぬほうがいい　鉱平
別れ道赤いトンボについて行く　杜的
月下美人留守番ひとりに看守られ　求芽
よくもまあニュースの種のつづくこと　一菁
木犀の香りへ朝の深呼吸　勝美
病む妻が子の足音に笑み浮ぶ　波留吉
コスモスも小百合の気品に頭下げ　菜月
通夜の席も女優の顔で座ってる　藍子
松茸は隅どっさりと柿があり　新泉
ほろ酔いのくしゃみが抜ける法善寺　章
石仏の顔半分に陽が当り　君子
おすそわけに行けば隣も柿の山　敏夫
女優の意識が常に演技する　こう礼
ロケに来た女優のファンになってくる　まさお
あの世から苦情出そうな事を書き　あやめ
独り言やっと終った帯結び　かすみ
生涯を脇役ですと名女優　一途
妥協した親子足音そろう地図　勝一
堪えた苦労柿の木だけが知っている　静江
夕焼けの光を柿のひとり占め　光子
改心の足音きいた父の墓　淳朗
足音が耳に迫って来た怖さ　晴風
退院はしたがひとりの部屋である　冬葉
赤ちゃんのくしゃみに笑顔と心配と　博泉
焼香に来てくしゃみとまらない　亜成
どさ廻り楽屋で授乳する女優　右近
どの柿も陽を一ぱいに器量よし　英壬子
粗大ごみ紙袋ではまにあわず　亜也子
裏口へ回ったらしい千鳥足　明代
熟す迄じっとまってるずるい猿　頂留子
玉砂利の反省の音聞いている　吉之助
お隣の松坂慶子が家出した　礫
少年よ足音たてよ野を走れ　度
柿の種より僕だって握り飯　敬山
仁王様時にはくしゃみもしたかろう　静歩
待つ身にはあの足音も違う人　鼓城
足音を一つに合わす老夫婦　亜鈍
おさしみに飛んだクシャミは黙っとく　あいき
ネグリジェのくしゃみで切れた長電話　小路
機の熟すまでは腰など上げぬボス　柳宏子
柿盛って山ノ辺人の居ない店　紫香
柿羊羹昔ながらの旅ごころ　薫風

京都塔の会　松川杜的報

窓に出た月はそのままいてほしい　武庫坊
座布団を折ってなかなか帰らない　紫香
御無沙汰を互いに詫びて法事の座　芳子
鳥葬の山を見上げて飲むビール　和友
かたづかぬ部屋に不満が溜り出す　年代
ちょっとした事で一日気が重い　春江
旅に出る話が合うた寡婦の友　花代子

第20回 岡山県川柳大会

日時　昭和61年1月26日(日)9時開場
場所　岡山県邑久郡邑久町中央公民館
兼題　濡れる　田中好啓選
腕　定金冬二選
階段　小松原爽介選
銀　森中恵美子選
戸惑う　小出智子選
悲劇　長谷川紫光選
残す　白岩文衛選
匂う　石部明選
締切11時・各題2句
席題　当日一題　ほかに特別題
会費　千五百円
投句　縦22cm横4cmの句箋、各題2句以内、1月24日必着
〈投句先〉〒701―42
岡山県邑久郡邑久町山手1116
嘉数幸栄宛
主催　白百合川柳社

児らの声弾んで夕日あたたかし　はつ絵
吹っとんだままを誇示する裏盤梯　求芽
指折りの女で朝のヨガを組む　水客
移植ごて昨年の土をふり落し　葉子
視線移すと相手もツイと眼をそらす　みつ子
移り気な女の白足袋干してある　栄
移り気な女の深き片えくぼ　鼓城
移り気もなつかし亡母の形見分け　笑女
生きる術時には欲しい栗のいが　英子
いつの間にイガを越えたか栗の虫　弘生
栗のいが月謝払って描けました　英壬子
栗飯の栗の無い処母が食べ　花村
栗の毬来るなら来いという構え　杜的
影武者のひきぎわさわやか風に乗る　美穂
パラソルの影で白足袋目に涼し　孝江
にんげんに疲れた細い影法師　幸
ある時の影が味方の顔をする　〆女
叱ってくれる影はいつでも亡父一人　太茂津
ネクタイも気もゆるんでる終電車　飛鳥
ネクタイをはずせば和む風がある　冬子
ネクタイをはずして貰う程に酔い　白渓子
僕はもう部長じゃないよループタイ　正坊
黒ネクタイ課長の机に何時もある　三男
無位無冠ネクタイだけは派手にする　園歩
ネクタイに今日の疲れがぶらさがる　明代
ネクタイは妻の好みのものばかり　鬼遊
日々好日ネクタイしめる故事もなし　巨詩

川柳大原　白岩　文衛報

カナカナが鳴いて返事がせかされる　寿恵子
太陽が朝の返事をしてくれる　耕花
返事なら眉のあたりに書いてある　文衛

明日の日を頼めば夕日返事する　朝代
返事せぬ枕かえして独り寝る　智泉
晩までは待てぬ返事を聞きにゆく　克己
返事にもならぬと返事書いてくる　巴子
言うだけを言わせてノーと言うてやり　かずこ
首を振るだけの返事で来てしまい　やよい
花言葉信じて返事待つ少女　理恵
これがまあ子供の返事かとあきれ　はるみ
独り部屋自問自答の夜が更ける　元江
おいと呼ぶ夫にハイと返事する　睦子
さわやかな返事に弾む朝の膳　きし子
気違いが旗ふる方へついてゆく　沖笛
うかつにはジュースも飲めぬ世の狂い　寛平
狂うてるいうて殺人許される　かずこ
彼の目が今日も私を狂わせる　辰江
札束を見せると狂うヤジロベー　はじ芽
歯車の狂わぬ音で今日も暮れ　こふゆ
新しい服私に年齢はない　美代子
花と語らう日から書き出す私小説　玉恵
秋ざくらお前が咲くと忙しい　喜美子
子が眠る屋根は童話の銀の星　悦子
知恵の輪が解けないままの別れ道　宮子
知恵遅れの子に優しい風もらう　たけよ
知恵はないけれど達者な僕がいる　みづえ
母となり母に手編みの知恵を借り　ひでの
かたくなに米にこだわり持つ老父　正巳
辿りつくまでの夫婦の向う岸　妻子
悔むまい迷って迷って決めたこと　敏子

尼崎いくしま川柳会　角野かず子報

ストーブの芯確かめる十二月　みち子
遅く来て帰り支度の早いこと　貞子

冷奴駆落ち話よく喋り　伊升
松の芯出る頃亡母の年周忌　伊三郎
お帰りと素直に出ない夫婦仲　かね子
終電車帰る人だけ乗せている　牧郎
少しだけ欠けた親父の飯茶碗　紫香
黄泉の風多弁になった三回忌　静江
水すまし池の深さに気がつかぬ　礼子
父帰る茶の間明るい笑い声　春子
薬草になって雑草よく売れる　かず子
造花の芯にコケットリーを求めても　年代
衿芯に追悼式の語尾がある　歌子
角帯の下に男の芯がある　正一
輪の中心にいて火付役となる　郁栄
父さまの帰るあしたを待ちましょう　すえ
掃除した部屋にゴキブリおちつけず　文夫
野仏が手を振っている渡り鳥　静夢
帰り道オヤお地蔵も濡れてはる　美代子
目と鼻に住んで逢えない日が続き　幸子

『夜市川柳』募集

第8回「ふんばり」黒川紫香選
締切　1月31日

第9回「嫁」田中好啓選
締切　2月28日

投句先　〒593　堺市堀上緑町二―九―一
河内天笑方
堺川柳会

カタコトの日本語豆腐も食べてます　かすみ
ロボットにあとをたのんで休暇とる　保蔵
雨の朝赤いブーツが泣いている　君子
老眼鏡忘れて困る旅に出る　幸次郎
罪のない寝顔に唇そっとあて　一郎
禅寺の豆腐料理も京の味　玉子
豆腐屋のラッパ途絶えた都市砂漠　良征
感謝ばかりしてはおれぬと妻が言う　定人

むらくも川柳会　藤井　明朗報

お早うご苦労さん笑顔交し合い　明朗
秋風に倖せ素的な晴着きる　マサコ
春の夢燃やして冬を堪えている　はる代
挨拶が上手になって孫がくる　一葉
たとう紙に亡母の晴着が眠ってる　ヤス子
挨拶の一言傷心なごみかけ　孝華
母となる乳房豊かに張ってくる　みどり
生きる術こころ豊かに持ちつづけ　百代
豊かなる緑の中の滝地蔵　よし子
豊かさに過去の辛さがふとよぎり　光子
豊かさが昔の恩を忘れさせ　はじめ
衣紋竿明日の佳き日を待つ晴着　秀子
晴着きる平和の倖せかみしめる　福子
あいさつも作法の一つ父厳し　武衛
毎日を笑顔で挨拶平和です　さくら
青春へ燃えた思い出いまも抱き　吉野
挨拶を交わしにっこり駆け出す子　八重子
お祭りの山車の晴着は紺法被　林蔵
躾糸抜いて晴着に祈る幸　富子
垣根ごし朝の挨拶両隣り　ふさえ
一言の挨拶町の和をひろげ　節江
古傷を労わる友にする感謝　ゆき子
くしゃみしたとたんに治る軽い咳　克子
亡き父母に感謝で今日も香をたき　蚊声
長い雨感謝いつしか愚痴となり　三津江
一粒の米にも感謝忘れずに　ふみ女
かくれんぼくしゃみ飛び出し見つけられ　峰雪
すれ違いくしゃみを出して振り向かれ　よし美
くしゃみしてどの娘が噂してるやら　幸子
八十路なお姿婆に息災神に謝す　清祥
垣根ごし隣のくしゃみ飛んでくる　雪路
元気かと友の電話に感謝する　昌子
若き日の生け花の趣味役にたち　なつえ
僕よりも長生きせよと妻に言う　鶏生
どん欲を捨てて長生き得拾う　三喜子
大盃で一気に燃えている若さ　正朗
豊かさに溺れてならぬ子を訓し　芳子

川柳高知　川竹　松風報

両面を刷ったチラシの利用価値　佳風
当ったら半分あげる夢を買う　伸
雨の音独りの昼を持て余し　春枝
地球儀を廻すといやな風さわぐ　登舟
月給日前で下宿に僕がいる　弘生
独り言ぶつぶつ言うて一人酒　幸泉
独り言らしいが何か気にさわり　功
それとなく不満を聞かす独り言　朱坊
残り火が一寸ゆれてる秋の風　淳枝
少年にクイズが解けぬ独り言　三吉
亡き父に母は厨の独り言　竹萌
独り言いえばオームにぬすまれる　菊野
うたた寝の中で何やら独り言　十面子
風鈴へ暑さを愚痴る妻の留守　節子
幸せな生活の中で独り言　松風

卯の花句会　辻　白渓子報

遊ぶ児に犬もいっしょにつき回り　よ志子
秋晴れて留守居の犬のふてくされ　秀男
陸橋を渡り慣れてる街の犬　鬼遊
金借りにくるのにチワワ抱いてくる　柳影
犬に聞くあなたも中流なのですか　節子
盲導犬の自負が脇見を許さない　恵美子
野良犬が国道横切ることに馴れ　求芽
小説の町捨て犬が強くなる　作二郎
さり気なく噂聞いてる懐手　紫香
懐手にあれこれ逃げ道考える　享子
維新の夢抱いて竜馬の懐手　暢子
海を見る父で懐手がふかい　和友
ボスがすりゃ何だかこわい懐手　悦子
金儲けうまいピエロの懐手　鐐太郎
一人相撲だったと悟る懐手　弘生
海荒れる島の男が懐手　伊三郎
女では絵になりません懐手　杜的
血圧を気にしておんな芋の秋　如洲
食欲をなだめて帰る子沢山　花代子
食欲の秋母はパートに追われて　房子
食欲の秋に野菜の高いこと　高子
遠い日よびっくりぜんざい力餅　とおる
看護婦の笑顔食欲ふえたこと　勢鬼
ふるさとの味で一杯よけい食い　草木
赤ちゃんの食欲母乳だけで足り　白渓子
食欲がこんなにあった飯茶碗　千歩
食欲が出た病室のにぎやかさ　梅風
求めんとする眼が光るだるまの絵　盛雄
ゴシップに強い女でまた離婚　眉水
酒すこし味方の地図を塗り変える　井寒

会長を呼び捨てにする母がいて　陽露子
韓国産やっぱり匂わぬ土瓶蒸し　芳子
出無精の腰あげさせる秋日和　志津
正論の自負捨てられず左遷の地　一郎
六地蔵陰の淋しさ繰りかえす　静江
老夫婦無味乾燥という絆　春蘭
うちの菊まてず一鉢買うてくる　さと美

川柳はびきの　塩満

我がルーツ麿か拙者か算盤か　志洋
柿の色残したままにダムになる　ケイ子
ライバルがいるので今日の俺がある　重樹
秋灯下猫も漫画を覗き見る　伴子
レーガンの土産にもらう防衛費　末一
虫の声誰のタクトかよく揃う　昇
尻尾だけ残して寿司屋売りつくす　みつる
鳩笛でうつろな胸をなぐさめる　繁男
獅子と虎日本の秋が沸きかえる　蛙声
亡妻の想いがつのる虫の声　憲太郎
夕やけに染まるかごめの輪が長い　阿衣
火遊びをけしかけているマッチ棒　美代子
札束の方へころんで行く政治　隆二
一票の重さ軽さで浮き沈み　石橋義一
独り旅とてやかくてや国境い　一屯
減量を暫く休んで秋を食べ　泰子
何もかも政治の故と気炎あげ　淑子
空白の日記を埋めて秋深し　弘子
歯車も遊びの潤滑油で廻る　昭子
肩書を捨てて遊びの顔になり　葉子
スピードを捨てて民話を拾う旅　隆
年甲斐もないと鏡が笑う赤　比沙湖
一面に事件が無くて古墳記事　徳子
スピードは鈍行でよい老夫婦　美子
ひじてつを虫も殺さぬ顔でする　知世子
虫の声しばし聞き入る床の中　喜代子
化粧品言葉巧みに秋を売る　満洲子
人の事笑ったわたしが飲み薬　清子
バーゲンがあるから虎に旗を振る　シメ子
スピードを落し絶景バスの旅　隅谷義一
一年を造花一つの男部屋　優
多情多恨な傘の雫を二度三度　寿美
一瞬のゴールを決めた亀の首　吐来
春うらら仁王の顔ものびて見え　白水
酒うまい包丁さばきは秋の味　忠宏
こちら菊エゾ地は雪の初便り　久治
料亭で日本の政治組み立てる　胡村
青春をかけた仕事もゴール前　敏

南大阪川柳会　中川　滋雀報

台なしにならぬ根っこを張っておく　洋子
台なしもよし決心は変らない　頂留子
台無しになるかも知れぬくじを引く　隆二
台なしにしても好いかと念を押す　久子
栄転を台なしにした悪い酒　章久
台無しにされた女の恨み節　公一
台無しにしたが看板だけ残し　しんじ
熟すまで待つから烏馬鹿にする　柳宏子
天辺の熟柿が映えている夕日　勝美
銀杏が熟れて無口になるふたり　柳伸
熟れている柿を失礼無人駅　悦郎
何もかも熟れて山は児を招く　喜風
武器図鑑核弾頭は載せないで　善信
図鑑ではお別れとある花もらう　外吉
少年の心とらえた虫図鑑　庸佑
セピア色の図鑑が形見となった亡父　寿美
薬草の図鑑を積んで病んでいる　曲ん手
目だつのが目立つポーズで載る図鑑　弘生
図鑑引いて結局負けと知りました　山久
でたらめは嫌いな父の太い指　重人
でたらめを言っても顔が物を言う　智慧子
でたらめな男を庇う母性愛　智子
でたらめが少し頼りにされている　作二郎
でたらめに騒ぎストレス消えますか　楓楽
でたらめでない一日もやはりある　凡九郎
でたらめなお世辞で呉服一つ売れ　慶三
でたらめな経理ながらもよく儲け　春蘭
でたらめなおとぎ話で子が眠る　あいき
でたらめでも知らない事は信じます　ハル子
でたらめの数字並べて煙に巻く　綾珠
鈍感も目先の欲に鼻動く　恒明
鈍感な男が貰う騙し舟　雀踊子
みんなが笑うてから鈍感が笑い　文秋
鈍感な蠅に似てきた冬の窓　滋雀
智恵の輪が鈍感同士もめている　覚然坊

川柳ささやま（前月分）　脇田　米朝報

泳ぎ来た道が光っている叙勲　文平
財界を泳ぎつかれた偽の金　靖子
いつまでも抱かれて泳ぐ母の海　米朝
世を泳ぐ下手な男がもつ真面目　ゆう也
古時計ねじ巻く嫁に見る平和　久子
ナースの手秒針生きる音をよむ　百合子
時計より高いメガネのわけを聞く　ひか平
ネジ巻けば動く時計と共に生き　つや子
白昼夢地獄へ落す蜘蛛の糸　越山
蜘蛛の巣を芸術と見る面白さ　テル

思わくのある蜘蛛風にさからわず　久乃
陽に祈り月に感謝をくり返し　静子
波静かお濠の月は水鏡　一盃
抱き上げてほれお月さまよと指をさす　貞子
離れ住む親子を包む思暮の月　和子
馳けよりて掬うて見度い秋の月　法斉
牛乳瓶の芒で下宿の月となり　可住

川柳ひらい　行吉　照路報

妻病んで月をもてなす一人酒　胤親
びっくり顔見せれば孫は又せがみ　せつ子
傷ついてから善人の眼をもらう　博
浅知恵で渡った橋に裁かれる　典子
家中を汚しちらして孫が去に　良一
浮き沈みあって帳尻合う人生　美佐保
逃げ道をあけて諭した思いやり　孝子
浮き沈み二人で堪えた吾が城だ　柏峯
吾が過去の汚れを洗うボランティア　美代志
夕暮れの汚れたお手々がもうねむい　トモ子
汚れてもお金になると強い母　年子
松茸は高嶺の花と決める秋　かずを
古里の猫は信号気にもせず　敏和
敬老に腰に梓の弓を張り　栄翁
浮く瞬間信じて沈む海女の綱　幸江
浮き沈み椰子の実一つ岸につき　裕子
土壇場で何んでも来いと受けて立つ　ともゑ
手刀で切りつけられた日の不覚　愛子
浮き沈み人生双六泣き笑い　千恵子
浮き沈み藁一本の恩義あり　寿子
敬老の日思わぬ人が壇に立ち　アヒル
社の浮沈君等の肩にと尻たたき　方巳
虫干しのあれもこれもに亡母の声　やすえ
媚を売る蝶に冷たい秋の風　愛
秋過ぎて紅葉を拾う未婚の手　博友
びっくりした顔から本音もろに出る　柳五郎
沈んでも浮いても飲める酒の味　青銅
むらさきのクレヨンばかりちびる飢え　草風
ご先祖の顔を汚したとはきつい　真備雄
前向いて喋るガイドに私語絶えず　照路

川柳わかやま　堀端　三男報

しごかれた無念を晴らすバチさばき　公子
師を偲び十一月の風が鳴る　三千代
肝心な時には鳴らぬ警報器　正子
片想い高鳴る胸がいとおしい　登志代
私の太鼓は自分でたたかねば　凡九郎
凡人で手の鳴る方が気にかかり　鬼遊
様々な別れを胸に発車ベル　千寿子
待ち佗びる女の鼓動知る夜風　桂香
気がかりへてっきり電話ベルが鳴る　武雄
爆音が耳鳴りとしてまだ残る　三男
手の鳴る方気弱な鬼がうずくまる　栄美子
響かなくなったピアノと旅に出る　芳朗
一泊二日女は軽い旅をする　ケイ子
巣立たせて一息入れる夫婦旅　紀美女
日本地図ひろげ病父の指の旅　忠雄
旅終えて未練が残る夏帽子　正顕
生きているその日その日が僕の旅　克子
いつか本気で旅に誘ってほしい妻　緑良
旅終えてから四、五日の締りよう　十郎
席詰めて貰った旅の屋台酒　天彦
旅の宿主婦を忘れて飲んでいる　月子
ひょんなことから生涯旅を共にする　天笑
終点に比翼塚ある夫婦旅　弘生
見抜いても開けてはならぬ玉手箱　俊平
見抜かれる迄は紳士の顔でいる　正博
見抜かれている気配して酔った振り　周三
見抜いてる素振りも見せぬ懐ろ手　柳宏子
見抜く事知らない妻を裏切れず　幸代
退職の額を銀行見抜いてた　さよ子
見抜けない湿った燐寸擦る様に　狂虎
見抜かれているので珈琲をおごる　智子
アルバムを繰ると哀しい音がする　信秋
菊が咲く育てた人を偲べとや　薫風
針穴へよぎる母なる影法師　きみ
父の忌へ亡父の盃あたためる　幸
叱られた思い出ばかり師を偲ぶ　英子
敗戦を偲ぶ芋がゆ食べ残す　裕美
戻れぬ道で死ぬほど好きなひと偲ぶ　寿子
古文書へ歴史の流れ偲ぶ文字　紀久子
母偲ぶふる里の柿熟れてくる　操子
秋風が偲ぶ面影連れて来る　光代
クラス会くらしを見抜く目に出会い　稚代
柿熟す亡友近くなり遠くなり　太茂津
見抜かれているのか知らぬ顔をされ　節子
見抜かれそうな予感に座り直したが　眉水

三幸川柳教室　桜井　千秀報

宝くじ売場の人が選ぶ運　千香子
拾いくじ灯にすかして欲が出る　静子
宝くじ楽にさせたい人がいる　靖子
宝くじ面白いほど夢が湧く　ふく代
虎視眈々的外すまい眼が燃える　愛子
核隔つ屏風の虎でいてほしい　三千子
虎の威を借りた虚構は脆すぎる　孝子
曲がり角あえぐ娘に貸す知恵袋　みね

曲がり角別れ話を連れてくる　百合子
右顧左眄しても所詮は曲がる角　忠昭
六十路まで曲がり曲がって角がとれ　美代子
直角に曲がって尖った風に会い　千秀
荒れた手にもみじのような手が繋ぐ　当代
手順踏み最後のダメを押し損ね　文子
奥の手は一つ女の泣き落とし　千枝子
添う前の約束手形まだ落ちず　和子
離縁状切手は猫に舐めさせる　桂香
神経痛手加減もせず孫が来る　智水庵

翠洋会　中西兼治郎報報

子の骨を親ひろってる不倖せ　兼治郎
頭だけ出してあれとれタバコとれ　いつを
売れなくて値段上げたら売れたとさ　綾子
噺家も家に帰ればもの言わず　登志実
例え話の小骨チクチク突き刺さる　楓楽
話合いすると娘も芯があり　君子
縄のれん頭でくぐる梯子酒　為子
行いを見て信じようこの話　光子
きりかえた頭に残る古き良さ　照子
娘の話猫神妙に聞いている　良江
たんこぶですむなら意見押し通す　宏子
柿クルクルむいて炬燵の話し好き　みつ子
百舌鳥が鳴く天の高さを一声に　春子
レントゲンこれがあなたのあばら骨　鬼遊

川柳しんぐう　川上溪水報

主役にはなれぬピエロに徹し切る　柳宏子
主役ならいつも演じる夢の中　功
大役のさすが主役という器　まさ子
脇役の使命主役を引き立たせ　えつこ
主役の座降りて冷たい風に遇う　しげお
ゾロゾロへ背く一匹から狂い　三千代
煩悩がゾロゾロのぼる蜘蛛の糸　緑良
ゾロゾロへついて出口見失う　輝子
招かざる客がゾロゾロ来る落目　武雄
ゾロゾロと歩く雑兵に顔がない　雀踊子
嫁入りの荷に賞状も仲間入り　白峰
賞状をもらってからの肩の凝り　金太
賞状に小菊が香る御所の庭　豊声
表彰状通訳のいる賞を受け　登紀夫
嫁ぐ日に父母へ心の感謝状　美代恵
例外がだんだん普通になる怖さ　富子
例外を認めて法は甘くなり　利次
例外にされているのに気がつかず　大輪
例外に入賞させる七光り　国彰
金バッジ付け例外の顔で居る　渓水

聴障川柳　稲田豊作報

赤紙が来てうたかたの恋と消え　たみ
ぬれた灯の夜景ひとしお人恋し　和江
失恋の泪が見てる白れんげ　八恵子
あさはかな恋を相談欄叱る　珍顔
恋人に会って買い物忘れて来　笑路
待ちぼうけして風邪もろた恋もある　峯生
パッと燃え花火のような恋でした　文古
君呼ばわりして共学の恋まぶし　承平
初恋の心の女は年取らぬ　いわお
女子大生のヘルシーボディに恋宿る　広行
初恋の文　手文庫の中で生き　鼓草
髭剃って年金を手に恋の道　みつる
太陽が恋しと稲が泣いている　三香
初恋を彼女の父に怒鳴られて　春一
楽しくて恐ろしきもの金と恋　行江
直線に駈けゆく恋よ火の女　豊作

川柳後楽　井上柳五郎報

薬にも毒にもなれる強い母　進
つまずいた我が子を父が勇気づけ　敏昭
つまずいた過去を打ち消すさざ波よ　健一
つまずいた男が地獄を見て生きる　桃風
ロバの身と言わず耐えてる保身術　柳五郎
姑が逆に耐えてる現代調　紫峰
耐えぬいた男の傷はだてでない　拓治
合掌の鳴咽に耐える背がふるえ　佐加恵
泥くさい鬼面に耐えいる余生　博友
三面鏡耐えた涙を知っている　青銅
白眼に耐えて月日が笑みを呉れ　たけ志
泣く児から順番狂う検診日　美智子
順番へいつでも脱げる紐を解き　吟平
順番がないから世の中おもしろい　玉水
順番をかえてもめてる議長席　哲治
タクシーの順番危篤の母がいる　幸好
ジャンボ機が落ちて古疵晒け出し　進平
古都税に便乗拝観料値上げ　哲郎
ポスト中曽根週刊誌から模索する　昭路
所信表明軍靴の音が高くなり　草風

岸和田川柳会　植山武助報

手芸する心も頭も安らぎて　冨志子
裸婦像の少うし恥じらい秘めた顔　こう
振り出しへ何度も戻り旅続く　希久志
美しく老いたし粗食に甘んじる　寿美子
旅先の祭で他人を意識する　射月芳
卵産む亀の涙を照らす月　一二三
卵の殻積んで客呼ぶたこ焼屋　さよ子
卵酒おかわりしてる左利き　楽天

金婚は妻と築いた金字塔　狸村
献立に窮しお好み焼きにする　武助
人柄が相手の心をつつみ込み　春栄
相手にも言い分がある追突車　ゆづる
いち日が長い相手のないひとり　ひで
交渉決裂相手のせいにする　勝晴
弾む日の絵皿は濃い目の紅を溶く　甘平
めしを食う以外はなにをしてもぐず　白光子
地すべりの前は景色のよいところ　操子

西宮北口川柳会　奥田みつ子報

一点だけぜいたくと思う家具を買う　て る
ぜいたくは誰にも気がねのない暮らし　紀美子
ぜいたくを言って困らす母子家庭　笑女
ぜいたくに溺れアフリカ遠くなる　礼子
ぜいたくに馴れてポイ捨て粗大ごみ　春蘭
余白多くぜいたくに描く明日の夢　よし津
天神さんちょっと拝んで通りぬけ　好江
神の声聞こえるような山の朝　貴代子
風紋は神の足あとかも知れぬ　静子
神様の居留守を神馬知っている　柳影
よくもまあ頼みにくるなと神あきれ　勝紀
イエスノーはっきりおっしゃらぬ神さんで　杜的
お賽銭忘れて神に借りが出来　武庫坊
高貴薬のように頂くご神水　春江
だんじりワッショイ人間神とたわむれる　千世子
神様がくれた秋です背を伸ばそう　きよ子
手術後の身体を神様から貰う　廉一郎
懸命に生きる喜び神に告げ　しげお
ライバルへ答えを二つ用意する　白渓子
真っ先に答えてほしい参観日　正一
愛情に答えは要らぬ命綱　コンピュータの答えに愛情などはない　求芽
迫られた答えが出ないのど仏　冬子
ウチはこどもじゃないと口答え　眉水
たして割る答えでいつも揉めている　はつ絵
虹色のヴェールに包む母の愛　幽香
鍵っ子をやさしく包む月あかり　(山)君子
うつくしいうそを包んだ赤い布　いわゑ
地方紙が包む味覚の宅急便　(伊)春子
連れそうてほろもくしゃみも包み合い　伊三郎
鉄の芯薄衣で包む肌触り　紀雄
金婚式似たもの夫婦が祝われる　隆子
長風呂を出たら阪神負けており　保蔵
健康な笑いの中に居る妻子　光代
美しく老いてピンクの似合うひと　文子
幸福を計る物差しありますか　義広
五平餅亡母は瞼の中に棲み　婦美子
積ん読を次々崩す秋の夜　園歩
松茸をクールにながめ買う気なし　よ志子
答えは一つ鰯雲動かない　半歩
長い橋犬には犬の用があり　かすみ
わくらばが最後に答え出すだろう　年代
あぶり絵に私の答え書いてある　芳子
神さんと仏同居の我が家無事　暢子
修行僧の剃りあと青き秋彼岸　鼓城
もう一人の私だなどと才女ぶる　明代
猿廻しの猿神さまの真似をする　作二郎
過重包装解いた中味の小さいこと　米朝
生きざまを包まず話す声の張り　みつ子
短かさを花の命と言う他人　千秀
はっきりと答えて呉れる菊づくり　静江
雪月花死を美しきものにする　弘生
自問自答して鼻毛抜く昼下がり　右近
赤トンボとまりにおいで母の指　志津
行きくれてまだ見付からぬ終の宿　枯梢
補聴器を外すと答え雲に乗る　良征
ド肝抜く答え年の差思わせる　歌子
秋がきて強壮剤をのむ男　まさお
午後の雨鬼をぐっすり眠らせる　文平
天高し軽い約束してしまう　智子

川柳ささやま　脇田米朝報

幽冥の境を越えてリンゴ汁　素水
柿一つ膝下にありし菩薩像　冨美
柿一つ欲な鳥が遠慮する　大槻
果物もよいが焼芋ほしい秋　百合子
地に還る熟柿悲しい音で落ち　越山
病む人に一口ずつのメロン水　きしゑ
月守る下で嬉しいかくれんぼ　やよい
果てしない母の愛盛る守り札　和子
満たされし余韻受話器そっと置き　ゆう也
直感へ電話冷たく鳴る夜半　靖子
ご主人の居なさる電話すぐに切れ　ひか平
催促と知らず受話器へ飛んで出る　法斉
きれい声残して間違い電話です　テル
へそくりが甘い言葉に顔を出す　金之助
臍出してステージ歩く世の移り　くにの
臍の緒を母は宝のように持ち　静子

城北川柳会　野呂右近報

乱れ髪女流画家の個展する　千世子
秘めるごと文箱に包む句の一つ　カネ
浦島も真逆と思った箱の中　テルミ
箱庭の日本大きくなりました　晃世
服装が乱れて来たら要注意　綾珠

飢餓の国心とどくか赤い羽根　温子
百円で買える品物選って見る　佐津乃
思い出す石炭箱での差し向い　市郎
中流と思い込ませて居るカード　満津子
乱雑な部屋にも憩の場所がある　泰世
ディスコから箱入りはもう生れない　新一郎
ワッペンを色々貼って宝箱　茂一郎
肝心な時に慌てる薬箱　笑風
文箱の底に褪せてたラブレター　静子
乱暴な言葉が何故か温かい　八重
下駄箱の隅で軍靴がむせび泣く　頼一
映像の不倫をさめた目で見つめ　婦美子
お手玉やおはじき詰めた宝箱　達子
空けてすぐ捨て去る箱が綺麗すぎ　節子
種のある手品に酔うて居る善人　弘生
聖戦と呼ばれた頃の教師像　倫子
大相撲大熱戦で髪乱れ　午郎
王様の椅子から枯野が見えて来る　静歩
乱菊は女の悩みに似て哀し　ふみ
西の部屋秋の日射しはさわやかに　寿美礼
空箱に千代紙貼って可愛くし　芙久枝
フルムーン愚痴を忘れた五日間　白峰
老い二人犬の若さをもて余し　悟郎
道訪うて明日香の村で柿を買う　星斗
満員の貯金箱から夢が湧き　ただし
花道を勝って乱れた大銀杏　麻黄
嫉妬心こころの乱れ隠せない　道子
針箱に女系の重味ひしひしと　右近
乱筆が涙を誘うメモの遺書　公一
捨て猫の箱に冷たいパンミルク　圭介
乱世と言いたくもなる民主主義　繁子

菜の花句会　高杉　鬼遊報

仕度するだけでホントに嫌になる　凡九郎
叩くだけ叩いて納期急かされる　柳宏子
ロケ隊が去って静かな港町　章
ストリップ小屋の支度は脱いでいる　柳伸
みかんだけ住い離島の港町　みつる
バーゲンを待って家族の冬仕度　春蘭
ウインクの女が小骨ぬきに来る　雀踊子
万里の長城急いでいるのは日本人　幸生
マドロスが去ると静かになる港　糸葉
病んで知る働くことの有難さ　蕉露
木枯しの寒さへ急ぐ毛糸針　勝美
三人も居るのに知恵が働かず　射月芳
ウインクの笑顔で鎖を付けにくる　悦郎
働いているから好きな物買える　冬葉
出稼ぎ仕度遠い雪崩を聞いている　郁栄
片便り港に早い冬がくる　美智子
嫁入りの仕度を見てる男親　健司
コップ酒明日はどこで働く身　弥生
さよならを倦くほど聞いた港の灯　美幸
そこでまた男悪知恵働かせ　頂留子
島を出る仕度を月に見つけられ　栞
阿修羅になり借金の共稼ぎ　鬼遊

川柳塔まつえ　恒松　叮紅報

美辞麗句奥にねたみの矢を匿し　玄艸
記憶力うすれてねたみとけはじめ　孝華
無駄骨と思えどねたみの糸を解く　翠星
年寄りは耳遠くなりねたみがち　静江
友人のスピーチねたみ混ぜている　肇
抜擢をねたむ視線にさらされる　愚童
善人が妬むと風が鳴り止まぬ　昭二

同列から抜け出した馬ねたまれる　寿美子
落ちぶれてねたむ心に支えられ　長三
本当のねたみは距離を置いている　貢範
祝電にねたみ添えてるとも知らず　芳子
ねたましく思う祝辞のときれがち　きみえ
ねたむ目のやり場やっぱりうす暗い　紫吻
思い出は古い背広の袖のシミ　吾作
最高の背広祝辞がまずかった　巡歩
詐欺師とも知らず背広にだまされる　雪美
着こなしの悪い背広の怒り肩　代仕男
ちゃんとした背広姿の父がすき　弁治郎
背広着ると父の背中は疲れてる　壮樹
遺された背広にあの日あのロマン　みえ
背広にも重い日がある靴を履く　美治
ハネムーン幸せ知っている背広　正朗
脱サラの背広樟脳くさくなる　鳳人
皿時計今日の安らか見張ってる　友子
民宿の皿は僻地の彩を盛る　由郎
女房が腹立てて割る安い皿　幸一
料理人皿の色にも気を配り　みつこ
受け皿も小さくなって三代目　与根一
愛を盛る皿は白い方が良い　ちかし
もみじ葉を一枚添えて皿が映え　多賀子
恋人の話を聴いている小皿　妻子
皿に盛るまずしき心まずしき絵　嘉寿子
裏切りの皿を落とすとすぐ割れる　雄々
母の皿だけひかえ目に盛ってある　孤呂二
皿を回すと走馬灯がまわる　鶴丸
初めてのデートコーヒー皿が鳴り　叮紅

川柳はびきの　塩満　敏報

情熱の二人の耳に蓋があり　昭子

めおと箸なぜ女だけみじかいの　久治
風のいたずら総理の髪を吹き上げる　志洋
冗談もリズムの中に乗ってくる　末一
両親のどちらに似ても短気な子　満洲子
行き先をくるくる変える短気者　伴子
警官が橋の向うで違反待つ　徳子
本当の事はあの世へ持ってゆく　重樹
やさ男酔えば突然目がすわり　昇
踏み切りで競馬のように並ばされ　蛙声
親と子が北と南の四十年　シメ子
席けった短気の後の白い椅子　淑子
夏の海ドラマを捨てた砂のあと　ケイ子
煩悩をじっと見守る石地蔵　憲太郎
孤児の目に富士は涙でよく見えず　白水
凧の糸風のこころとうらはらに　忠宏
気短かな男が蜘蛛の巣を見てる　一屯
核の冬告げる時計の針動く　隆
ギクシャクと地球お前も疲れてる　美代子
虹の橋渡る夢みる女下駄　寿美
とても愛して少し憎んで含み針　比沙湖
逆立ちをしても詩情のこぼれぬ日　吐来
風雪に黙って耐えた夫婦箸　優
軽い日も重い日もある夫婦箸　隆二
長生き税何年先か取られそう　隅谷義一
酒ぐせも七癖の中へ入れておこ　繁男
酒ぐせがしきりに握手せまってる　葉子
白南天無病を箸に祈るなり　石橋義一
花氷見事に咲いた予約席　司
戦中の兵隊並みだとみるラッシュ　弘子
デートの日時計の針を進めとく　千代子
内心はお箸が欲しいフルコース　泰子

割り箸を口で割ってる屋台そば　清二
針の穴天はやっぱり広すぎる　胡村
針千本のましてやりたい風見鶏　敏

川柳たけはら　小島　蘭幸報

よういどんはるみちょっとおくれたよ　小二晴美
六人ではしって五ばんになった　小二晶美
魚つりいっぱいつれた日よう日　小三聡子
すずめばち巣をこわされてもとんでいる　小三由博
世界地図夢が広がるパラダイス　小四方昭
歩いても歩いてもまつたけがない　小五純平
お弁当手作りだからおいしいね　小六美保
日が沈む早く帰れと日が沈む　小六鉄二郎
稲刈りがはじまったのに雨が降り　小六亜貴子
どこに何を置こうか私の部屋が出来　中一早代
お母さんだんだん小さくなってゆく　中一仁昭
地球まで怒っているのかこの地震　中二恵子
運動会の記憶たどらす早生みかん　高一紀
何時死んでもと薬を飲んでいる　シゲヨ
脇役のおかげで乗って来たリズム　しんじ
いつまでも若いつもりで見るドラマ　かつ子
真実を詰めたポッケを確かめる　博子
自転車を軽く走らす金木犀　康子
栗おこわうれしい客を待つ秋で　貞子
両成敗してから一人呼んで置く　笑俳
今に見ろ見ろかたつむり休まない　笑子
好きな人の言う事は素直に聞ける　清水
あおむけに眠る金魚も居てたのし　淑子
もう飼わぬつもりで猫の墓建てる　菁居
童心に還ってカバがあくびする　鈍舟
蜜柑山いろ付く度に父老いる　令子
円高も円安もなく夜を稼ぐ　政己

脳天をえぐる深夜の電話ベル　静佳
久しぶり甥の放談二時を打つ　麻代
置手紙女は秋を買いに出る　良恵
静水さんの三代リレーに見たファイト　房子
長女もうボクと呼ばれて振り向かぬ　蘭幸
石段をゆっくり数珠を掌にのぼる　一路
恩愛のきずなプツンとおんな断つ　こうじ
一切れの松茸賞味した幸よ　静水

サークル檸檬　田形　美緒報

白菊を凜と咲かせて人嫌い　美代
蓋とれば菊の香りの茶碗むし　雅子
嵐来る車と菊鉢入れ替える　智恵子
古道具菊一輪が映えており　三四子
菊薫る天皇様の背の丸み　久子
大輪の菊もて余すせまい庭　今日子
天も地も菊に埋まる文化祭　美房
突然に煮え湯を呑んだ胃の痛み　泰子
お隣の菊二階から見頃なり　薫風
野菊にも小さな幸せ運ぶ秋　美緒

川柳藤井寺　赤木　和子報

すだちの香焼松茸はカナダ産　つや
秋深みあなたの愛に目をさます　治子
澄んだ瞳を都会の風がつれて行く　吸江
老眼鏡かけて隠居の顔になり　三郎
やるだけはやった男の心澄み　志洋
年上の女を恋うるも秋の所為　美代子
夜おそい娘をにらむ老眼鏡　作秀
苦になった運動会が忘られぬ　須美
羽振り良いのが呼び止める久し振り　本蔭棒
栗めしの塩味足らぬ妻は留守　繁男
役職を辞して人情見えてくる　麻雄

信じよう澄んだ瞳にうそはない　美佐
魚棲まぬ程の澄む水ほしくなり　義一
目覚しが二時間早い運動会　正枝
故国恋うコアラ虚しいユーカリ樹　彩
ウエートレス虫も殺さぬ顔を見せ　哲正
畦道を通せんぼしてる彼岸花　清心
神鈴を振る巫女の前心澄む　祐二
マツタケに申し訳ないクレラップ　末一
別れたるその夜のままに虫しぐれ　雅美
秋霖を聴き亡妻を恋いやまず　和美
澄んだ目に引き戻された崖の淵　ふみ
ラジカセが山の空気を濁らせる　伴子
故里は今も変らぬ川が澄み　昭子
久し振り矢っ張り涙もろい人　与呂志
運動会済んで先生骨休め　秋園
せっかくの旅に予期せぬ高いびき　初枝
騎馬戦のここから男いくさ好き　和子

川柳泉尾　吉川寿美報

許すこと学んで教師に秋が来る　弘子
九ちゃんの歌空いっぱいに聞こえてき　多和子
後ろから見ればステキな脚線美　三世
一寸した出会い一生共にする　シマ子
早起きになれさせたのは猫二匹　昭子
抱きしめてやりたい園児の運動会　文子
十字路でそれから先を往きまどう　美代子
裁鋏女のドラマ見つめてる　葉子
切り絵師の鋏生きてる様に見え　伴子
古里は藁葺の屋根吊し柿　淑子
熟柿待つ間に烏先を越し　シメ子
初霜と添書柿の宅急便　トミ子
鏡餅の上で干柿威張ってる　白水
柿の実が古都の夕陽に燃えて秋　敏
こぼれ萩おんなひとりの夜を余す　寿美

川柳大阪　井上喜酔報

照れながらシルバーシートの好意うけ　しげお
ちょっぴりの好意に眩しい赤い羽根　一介
政治家よ好意の民を裏切るな　敏
ご好意にあまえて帰る里の味　司
無に出来ぬ好意で困るお付き合い　柳弘
ご好意は今日もふれ合う街で住み　我勝
名も告げず去った好意の背を拝み　本蔭棒
ご好意で甘えておれぬ坂もある　鉄心
河豚の湯気友の本音を聞いている　洛酔
河豚の味知って女はくどかれる　与呂志
しびれさすあたりが美味いと通が言う　天平
ふぐ鍋の湯気に話が円くなる　本蔭棒
てっちりの箸に夫婦の差なし　重人
てっちりを囲む我が家の灯が温い　金太
殺人の電波茶の間を直撃し　酔舟
語らずも心電波で通じ合う　雅巣
内戦を電波で見てるこの平和　希久志
国鉄の事故は家まで先につき　一歩
病人が輪切りにされてる超電波　河南子
人間の電波は知らぬ蝸牛　喜酔
電波網善人だけの物でない　みつる
感じない電波に暮し変えられる　比呂志

川柳塔唐津支部　久保正敏報

松浦夫は太閤へ八幡旗ひるがえし　朴竜
神様へ条件つけるならず者　多駄子
お供日の余波かおかずはまだ供日　虹汀
武家屋敷古書骨董へ下がり蜘蛛　高明
なにもせぬことにしておく七十二　久仁於
秋の夜は五十男も星の声　四郎
乱世を母子で渡る世間かな　今子
床脇に金の成る木がおいてあり　あき
乱筆ご免末尾に筆のよく走り　実
すきすらいするこはいつもやせっぽち（六歳）　正敏
伴食と思えど理事の名が重い　かおり

東大阪川柳同好会　斉藤三十四報

いっぷくのお茶にからだがほぐされる　三十四
惚れぼれと体にさわる仕度部屋　白屯
からだが心配などと楽しみとりあげる　美子
もう一つからだが欲しい老いの趣味　勝美
大切にすれば百までもつからだ　たつを
部分品まだ取換えの利くからだ　弘生
断りが出来ぬと見込んだ頼み事　千代子
お人好しまた頼まれて来たらしい　柳影
わたくしのからだ私がお医者さま　天笑
極限の話を指がたすけてる　光水
よくよくの頼みお女将が掌を合せ　慶三
伝言を頼むと軽くなるメガネ　悦郎
独り居を心ゆたかに毛糸編む　春蘭
着てもらう喜びだけで編み上げる　鎮彦
曽祖父が編んだ菅裏納屋に寝る　滋啓
早朝のタクトは軒の雀振る　柳宏子
故郷はよきかないつも夢に出る　良京
指しゃぶる子に父の影がない　冬葉
仁王門山の古老が編む草鞋　喜風
ああ夫婦我慢くらべがまだつづく　湖風

川柳化粧櫓　植村客遊子報

内孫の居る幸福をかみしめる　秋月
嫌いだがお得意さんの猫を撫で　大鷹
見送りの駅合理化の無人駅　実男

夢のない話で中年飲んでいる　岳詩
香煙縷々ひたすら弥陀へ炎えつづけ　葉香
六甲おろしの歌日本は平和なり　紅月
開運の判この位置が決まらない　礎石
花籠を盛れば女の私語となる　越山
耳もとでささやく女に負けてみる　悲子
父さんの出番は金のいる話　柏秋
老姉妹寄れば自然と亡母のこと　みつこ
零つくし終って独楽が廻りだす　サワ子
人生を雑魚で終った父の靴　みね子
謂れ聞く仏足石へ萩さかり　輝月
年齢忘れ明るく生きて旅楽し　永楽
一流の作家気どりで席につく　とし
才なくて知恵の輪とけぬ私です　孝栄
豊作へトンボすいすい彼岸花　詩風
お茶席へキンモクセイの香がとどき　和子
止り木へ倖せ薄いコップ酒　客遊子

倉吉川柳会　渡辺　菩句報

散歩する孫の手じんと熱くなり　道子
ひと刻を野菊に憩う散歩径　寿満湖
タレントの愛あちこちで冷える秋　幸苑
転勤の赴任あちこちひとり旅　小生
古日記あちこちしみがついて来る　とめ子
あちこちを掘れば古代に逢う明日香　あや子
あちこちのチャンネル同じ嘘をつく　明
あちこちに咲いた妖花に騙される　秋人
流れ矢は散歩道まで届かない　雄々
片意地であちこち職を替えた数　車楽
シャンソンがお似合い秋の散歩道　浩子
心の灯せめてあちこち年賀状　寿朗
あちこちで見かける顔で名は知らず　柳風
身を飾る娘に親馬鹿の金が減る　十六夜
ブームとかあちこちで聞く離婚沙汰　紫泉
ーニンさん宣伝文句よく並べ　次男
雨の日に心を飾る本を買う　昭生
午前二時女の部屋を見てしまう　観洋
着飾ったママとは手をつながない　とみお
エレキバン社長自ら顔を出す　かつみ
コマーシャル良く効くような気にさせる　碧水
散歩する歩幅に今日を問い直す　千秋
ご利益があれば宣伝などしない　みなと
王様の散歩見たくて鳥になる　亜弥
散歩道女が追って来ないかな　蛍
招待という名で届く宣伝状　文子
六根清浄なまぐさき歯をみがく　完司
あちこちを修理してます更年期　やえ
宇宙から宣伝に来るハレー彗星　ゆり子
宣伝の下手な親父は砂を掘る　荒介
人形の首があちこちから届く　諷人
宣伝に針千本を飲まされる　御前
獅子頭生れた日から総入れ歯　石花菜
諦めるほうへ傾く糸切り歯　千代
父祖の絵を飾りしがらみ抜けられぬ　瑞枝
あちこちの結び目隠し古稀夫婦　独歩
あちこちにまだ案山子さんかがし君　菩句

熊本川柳会　北川　一進報

人柄を買われて損な役が着き　真吾
人柄を偲んで通夜の泣き笑い　エツ子
お隣を覗く答案紙の焦り　一進
覗かれて目高の学校パッと散り　節夫
カーテンの裾から覗く初舞台　方円
ラブシーン望遠レンズにキャッチされ　謹爾
プリズムを覗いて子等の夢開く　康子
自白して終うとどっと来る睡魔　芳仙
盃に話せばゆるんでゆくしこり　俊子
一瞬のゆるみを悔いる松葉杖　丹青
末っ子が巣立って母の背の丸み　昭代
輸入枠ゆるめ買えよと揺さ振られ　一乗
包囲網ゆるめてホシを泳がせる　アヤ子

川柳塔きゃら木　石垣　花子報

観光地にストレス捨てる魔女になる　夕子
国訛り抜けぬまんまに根を下ろし　富枝
子の帰省訛が一寸拗ねている　てい子
同郷の妻で気兼ねのない訛　時子
腹割って話が出来る国訛　八重子
乱暴な言葉で叱る国訛　高代
この街に故郷の訛をそっと置く　文世
里の秋おいでなんせえきなんせえ　冨美子
宅急便ふる里訛り連れてくる　より子
味噌倉に残した瓶と国訛り　登栄
さよならはお国訛で言いたいな　玲子
花売りの篭からこぼす島訛り　花子
ばあちゃんの民話訛で味がでる　千春
一族の訛の中にいる蛙　日枝子
しがらみの中で訛が直らない　荒介
月の暈亡父の訛が野を渡る　瑞枝
ふる里を捨てても訛ぬけ切れず　伊都
みちのくの訛にひたる秋の旅　田鶴
国訛り土の下でもかばい合う　千代

富柳会　藤田　泰子報

行きずりの恋を拾った一人旅　荘次
よく聞いてくれた恋人いますとも　文次
瓦礫の下泥海の中で生きのびる　勇

出刃包丁熱があるので錆びている　岳人
誰よりもおてもやんの熱信じとく　美代
この人と歩く奇跡のすばらしさ　維久子
熱湯に触れて私も母になる　森子
初恋の人すれちがう御堂筋　ミツエ
恋女房愛し続けて古稀となり　義雄
広庭に走り続ける蛙追う　シズエ
発熱の妻にお米の量を聞き　花子
母さんの頃はブラトニックラブでした　冨美子
音の無い少女の手話に熱がある　〆女
熱い視線を背中に受けた日のうれい　美緒
木枯に熱燗ほしい祖父の顔　綾子
どうせならなってみたいよ恋病い　美津子
青い恋火種つぎ足す詩集買う　優
炊飯器妻恋う夜の一人炊き　章久
何んだろう心の熱が高くなる　春枝
わが庭に一本悪の木を植えて　冬二
きっと来る私の庭に冬景色　泰子
潮時を知ってる男恋多く　文子

ハワイ川柳ウイロー社　市岡　暁舟報

新聞を立ち読みをする出勤者　拝山
聞き落ちを新聞紙上で取りまとめ　公女
新聞の十大記事で年送る　香夢女
俄雨新聞かぶり急ぎ足　蒼生
新聞紙じゃまになる程よく溜り　紅渓
ハワイ報知新聞立派な日英字　虹宵
世の乱れ記事で新聞賑やかし　張賀
妃殿下の写真は特に切り抜いて　利子女
三面を鼻毛抜きつつ気持ち良し　一牛
売名の新聞記事に反吐を出し　陽子女
新聞の匂いで昼寝よく続き　秀山
新聞で見たと議論に箔を付け　暁舟

井上柳五郎報

川柳後楽

面構え男一匹勝負する　桃風
面憎いときも我が子にある絆　幸好
税金は絶対払わぬと仏様　進
中流を競う親娘の七五三　美智子
生きていた死火山人智をあざ笑い　柳五郎
リーダーになるにも金がよくかかり　信善
職場でのリーダー親でも子でもない　吟平
リーダーに欠点があり女好き　博友
リーダーの猫は媚など売らぬ顔　青銅
リーダーの心と別の鞭になり　佐加恵
リーダーの怨念勝つことだけの策　照路
手作りの良さを自慢の民芸店　紫峰
手作りの味頷いて褒められる　哲治
手作りのこけし民話を抱いている　健一
嫁ぐ娘へ父の笑顔がこわれそう　玉水
サングラスかけた笑顔が不気味だな　進平
何事もなくてよかった笑顔みせ　拓治
福助の笑顔に商い叱られる　草風
算盤が作り笑顔の底にある　たけ志
手作りの味でのれんが生き続け　哲郎

豊中もくせい川柳会　田中　正坊報

完璧に騙せ私をだますなら　寿美子
完璧な胃を持ち歩く花ぐもり　福一
完璧な応対　体が硬くなり　美祢子
ぶらぶらと来て死にそうな蝶に逢う　作二郎
ぶらぶらとしているようで眼の凄さ　春子
犬までがぶらぶらしてる釜ヶ崎　明
老いにまけぶらぶらと花いちもんめ　明吉
点滴が多すぎるから退院す　博史
カルダンのハンカチ一点豪華主義　正坊
手品師の盲点鳩が知っている　紫香
よく笑う少女と犬とコスモスと　きく子
姉の部屋紙人形も嫁き遅れ　岳人
迷惑な話を悪友さげてくる　山久
下駄ばきに慣れて暮らして靴はEE　房子
美辞麗句並べて弔辞しらじらし　隆
貸金庫犬の遺骨も入れてある　花村
宮さまは質素が良いと帰朝談　富子
よい席で分からぬままに観たキャッツ　よし子
甘栗とみかんで話す久しぶり　慶子
再会はうれし馴染の店で飲む　登志実

尼崎尾浜川柳会　春城武庫坊報

残る世を思わぬとこで蹴つまずく　よしを
列車待ち隣の人がよく喋る　昌子
三度目の裏切りを聞く泣きぼくろ　歌子
国創め西も東も女より　いわお
金婚式女の方が意気盛ん　貞吉
強そうな相手に臍は見せられぬ　武庫坊
切札を使い忘れて妻も老い　佳秋
見合席女の母がよく喋り　よしつぐ
喪が明けて弱い女を脱ぎ捨てる　礼子
嫁った娘へ月を相手の独り言　すみ
髭があるから無駄口は叩かない　夢之助
コスモスは天気予報を聞かず咲き　十四郎
電話ベルこちらの都合など聞かず　寅之助
わが儘の言えない罪を妻に負い　弘治
笛吹けば旗振る奴が多すぎる　良征
まだコタツ出してないから早寝する　江美
幹事だけ残って茶漬けにして帰り　紫香
登りつめると神も女も遠くなる　牧郎

1 月 各 地 句 会 案 内

	日／時及び題	会場と投句先
菜の花	10日(金) 夕6時より 明日・線・靴・咲く	八尾西郷会館　近鉄大阪線八尾駅南西歩5分 〒581 八尾市山本町5－4－6　内海幸生
川柳塔 まつえ	11日(土) 午後1時半より 朝・拝む・出発	慈雲寺　松江市和多見町 〒690 松江市雑賀町1686　恒松叮紅 句会費 300円　投句料 300円(60円切手可)
川柳 わかやま	12日(日) 午後1時より 跳ぶ・誇り・波	和歌山県民文化会館 4F 〒640 和歌山市駕町15　野村太茂津 句会費 300円　投句料 60円切手3枚
西宮北口	13日(月) 午後1時より 新・修理・自由吟	西宮中央公民館　阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5－25－17　春城年代 句会費 300円　投句料 60円切手4枚
南海電鉄 川柳部	16日(木) 夕6時より 前進・番号・酔う	南海会館ビル内 南海電鉄本社 地下食堂 〒542 大阪市南区難波5丁目1番60号 南海電気鉄道(株)不動産管理部管理課　広井季雄 句会費 無料　投句料 60円切手1枚
富柳会	16日(木) 午後1時より 妖しい・視野・慌てる	富田林市中央公民館 〒584 富田林市寺池台3－22－18　藤田泰子
高槻川柳 サークル 卯の花	16日(木) 午前10時より 虎・床柱・揃う・自由吟	高槻市民会館301号室　阪急電車高槻下車歩5分 〒569 高槻市桜ヶ丘北町3－19　辻 白渓子 句会費 500円　投句料 200円(小額切手) 60円3枚、20円1枚
南大阪 川柳会	19日(日) 夕6時より 罰・微力・無作法・別口	寺田町高松会館　国鉄環状線寺田町裏駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1－5－2　金井文秋 句会費 500円　投句料 180円(郵券可)
川柳 ねやがわ	19日(日) 昼12時より 縞・宝・鯛	国松公民館　京阪電車寝屋川駅よりバス国松下車 〒572 寝屋川市春日町9－9　高田博泉 句会費 1,000円　投句料 60円切手3枚
もくせい 川柳会	20日(月) 午後1時半より 初め・歩く・面・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急宝塚線曽根下車東南歩5分 〒560 豊中市旭丘8番87－2　田中正坊
東大阪 川柳同好会	25日(土) 夕6時より 理想・勇気・再起・家族	東大阪社会教育センター2F 近鉄布施駅北へ5分 〒579 東大阪市新池島町1－4－14　斉藤三十四 句会費 500円　投句料 60円切手3枚
駒つなぎ 川柳会	27日(月) 夕6時より 袋・スタート・不思議・ 隙間・顔色	寺田町高松会館　国鉄環状線寺田町駅南口下車南 一丁三筋目左へ駅より歩3分 〒572 寝屋川市成田町19－28　里 義治(小路) 句会費 1,000円　投句料 300円(郵券可)

★特に記載なき場合．句会費 500円、投句料 300円（郵券可）

原稿送り先（〆切・毎月20日　予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です）

〒596　岸和田市荒木町1－29－1　宮園射月芳

本社1月句会

日時　一月七日（火）午後六時
会場　メンズファッションセンター3階
東区内本町一―一　電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車（2番出口）交差点西南角

★短冊交換会（一人3点以内）
★60年月間賞杯授与と全出席者表彰

兼題
おはなし　阿萬萬的
「数」　西山幸選
「緑」　里小路選
「盛る」　笠原吸江選
「門」　西尾栞選

席題　二題　当日発表　各題三句以内厳守
会費　五百円

★投句は柳箋（4cm×19cm）に一葉一句。
投句料 **300円**（60円切手5枚）同封のこと。

川柳塔社

2月の兼題　「その他」「認める」　「腕」「水」

2月の本社句会は7日（金）

本社句会の日どり

昭和61年

3月句会……3月7日（金）
4月句会……4月7日（月）
5月句会……5月7日（水）
6月句会……6月7日（土）
7月句会……7月7日（月）
8月句会……8月7日（木）
9月句会……9月8日（月）

●募集●

三月号発表（1月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「削る」　波多野五楽庵選
「調子」　行吉照路選
「裏」　木村はじめ選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

四月号発表（2月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「読む」　有働芳仙選
「合図」　野中御前選
「餌」　中村優選

★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。
★用紙は川柳塔社柳箋をご使用ください。

1月の常任理事会は休み

定価　五百円（送料55円）
半年分　**三千二百円**（送料共）
一年分　**六千三百円**（送料共）
昭和六十年十二月二十五日印刷
昭和六十一年一月一日発行
編集兼発行人　中島蓬太郎
印刷所　藤原童心社
〒545
大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（六）六二九―六九一四番
振替口座大阪8―三三三六八番

＝編集後記＝

☆明けましておめでとうございます。

☆丙寅の私は今年還暦を迎えた。路郎先生が豆秋さんの還暦に贈られた句は微笑ましいが、私の亡母の還暦にも一句を頂戴した。その朱塗りの丸い額の色紙を居間に掛けて新年を迎えた。「還暦のまだこれからという姿」というものである。

☆栞主幹ご夫妻が一月九日（木）NHKの「お達者くらぶ」に操り人形の結城孫三郎翁と出演される。旧年十一月に寺尾俊平さんと私が関西からの皮切りに出た番組だが、新春のこととて晴やかなムードとなろう。昨年に喜寿金婚を祝われた主幹らしい新年の夫婦像を皆さんどうかご覧下さい。

☆旧臘十六日から放映を開始した「近畿文字放送」に川柳番組も登場、選者を担当することになった。森中恵美子さんに手助けして貰いながら、ニューメディアに挑戦する。一般のテレビには、アダプターを備える心要があり、視聴者も少ない筈で軌道に乗るまで投句者にも事欠くことであろうが、ご支援をお願いする。

☆路郎のことをいつまで言うのかと、路郎を知る作家の少ない昨近に叱られそうだが、作品の上では、水府三太郎を凌ぐものがあると思っている。それ故、路郎色の薄れた現在、再認識をすべく、句集「旅人」の鑑賞会など「弟子に孫弟子ひ孫弟子」たちの間で試みたく思っている。

☆愛染帖は頁数が限られているので毎月の全没者は八十名を越えている。選者としても残念な思いがする。

☆そういう事情から、女性作者のみを投句の対称とする「女性コーナー」を設けるのが数年来の懸案で、かつて「婦人友の会」なるものもあった。女性川柳人の激増に、その復活も然るべきではなかろうか。

☆年頭の抱負や希望は立派だが、実現することは容易ではなく、有耶無耶に終ってしまうのが常だ。

☆大方のご意見をお聞かせ願いたい。（薫）

▼師走の一日、梅田（大阪駅近辺）へ出かける用があって駅の改札を出た。歩道に面して人々の長い列ができている。阪神タイガースの優勝感謝セールでもあるまいし、何の列かと一瞬、とまどったが、年末ジャンボ宝くじの売り出しであることがわかった。三角くじやスピードくじもあったが今では宝くじが定着したようだ。大金が当って悪い気はしない。千万円以上の高額当選者が、五十九年度で二千三百八十三人もあったことを思えば、そのうちの一人に自分もなれると思うのが人情である。そんな人たちがガードマンの指示で長々と四列縦隊をつくっている。アイシュビッツのガス室へ続く列でなかって幸せである。西日本での確率の高い売り場は、地下鉄梅田南口、梅田地下阪神前、そして私の出合った、梅田中央東口等となっている。

私の親戚にも一人、同じ愛好者がいる。〝買わないと当らない〟とも〝夢を買う〟とも云うが、私があまりよい顔をしないので、宝くじの話をしないようになった。辞書によれば「夢」とは、眠っている間に、種々の物事を見聞きすると感ずる現象。実現が困難な、空想的な願い。はかないこと。たよりにならないこと等とある。夢とはもっと華やかで楽しいものと想っていたのでがっかりした。

〝宝くじどうせこの世は夢芝居〟か。（き）

☆その時、ぼくの両隣りには、どちらも二、三才の男の子とその母親が座っていた。電車はすいていて、昼下りの陽光が差しこむ車内は、ついウトウトしそうになる。子どもたちはおとなしく、左側の子は時々、ぼくの顔をチラッチラッと見る。視線が合うとぼくはニコッとしてやった。するとさっと顔をそむける。そしてまたチラッと盗み見る。またニコッとする。そむける。そんな遊びを二度三度繰返していると母親が気づいたのか、子どもの頭をやさしく撫で、微笑した。こういう時、母親は大抵こちらの顔は見ないものだ。

☆その子が急にムズかりだした。ぼくの右側の子の方を指さして母親の膝の上から身を乗り出してくる。見ると右の子が怪獣のプラモデルを持っていて、どうやらそれが欲しいらしい。

〝あれはオニイチャンのよ、ボクはもっといいのがあるでしょう〟そう言って母親はバッグからミキサー車のおもちゃをとり出し、しきりになだめるが、きかない。

☆こういう場合、取られまいとして隠したりするのが普通なのに、その子はワザと見せびらかすように怪獣を鼻の先で振ってみせるのである。

☆愉しい気分はとたんにけしとんでしまった。こんな子は大きくなったら、どんな大人になるのだろう。（史）

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和六十年十二月二十五日　印刷
昭和六十一年一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻七〇四号　川柳塔　一月号
定価　五百円（送料　五十五円）

謹賀新年

電波新聞社

東京本社
東京都品川区五反田一丁目一一—一五
大阪本社
大阪市北区中ノ島三—二—四
（朝日新聞ビル内）

投稿欄案内

川柳選者　橋高薫風
（掲載日）毎週水・土曜日

俳句選者　小寺正三
（掲載日）毎週火・金曜日

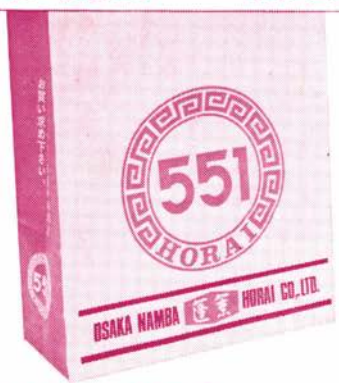
短歌選者　佐々木信夫
（掲載日）毎週月・木曜日

※優秀句には掲載紙をお送り致します。

〈投稿規定〉
はがき一枚に三句（首）以内。投稿随時・自由課題。
〈投稿先〉
〒530　大阪市北区中之島三—二—四
電波新聞大阪本社学芸部あて。
（朝日新聞ビル内）
（川柳・俳句・短歌を明示）

ボリュームたっぷり　スタミナ満点!!

豚饅・焼売・焼餃子



なんば戎橋筋本店
その他有名百貨店でどうぞ

551 HORAI

ほうらい
蓬莱
TEL641-0551

雑誌　05703—1